
邪神の加護を受けし者

くるみい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神の加護を受けし者

【Nコード】

N1285Y

【作者名】

くるみ

【あらすじ】

いきなり不幸になった少年がいた、世界に疎まれた少年がいた、世界に棄てられた少年がいた、別のところで流行の「異世界落とし」で人間観察をしようとしていた邪神がいた、邪神が少年を面白そうだと拾った、しかし、拾った少年は変わって性格で二人の距離は次第に縮み、そして、二人は遠い昔に求めることをやめ、傷の舐め合いだと笑っていた「友情」という「絆」を手に入れた、この物語は心がすさんでしまった少年と時々遊びにくる邪神の物が「なにシリアスっぽくしてんだ馬鹿作者」「やはりただのバカか」ちょw今

あらすじだ！お前等！「いや、これコメディだろ？」「いやバトル
コメディらしいの」いや、恋愛も入れるけどな「な・・・なん・・・
だど！？！？」「！？お主・・・死ぬ気か！？」お前等削除するぞ
！「お前の夢が壊れるだけだぜ」う”「やはりバカか」

ご挨拶及び小説説明（前書き）

この小説の詳細とご挨拶

ご挨拶及び小説説明

どうも、くるみいというものです。

他の作者の方々の小説を見て、書きたいと思って文才もなく文法なにそれwおいしいの？

という状態の私が小説を書きます。

さて、この小説についてですが、できる限り独自で考えていますが、やはりくるみの能力では厳しいイベントや、恋愛方面の運び方などは他の作者の作品を参考にする場合があります（もちろん許可は取ってからです）そしてこの転生最強チートオリ主のヒロインはちうたん、茶々丸、アキラ（崩壊）あたりで逝こうかと思っていますが、読者様方にアンケートをとって追加する！ということもあると思います。

ですが！！このちゃん、せっちゃん！この二人を選択する貴方！気をつけて、作者の能力じゃ再現できないかもです。主に口調。それでもいいという方はアンケートどうも、くるみいというものです。他の作者の方々の小説を見て、書きたいと思って文才もなく文法なにそれwおいしいの？

という状態の私が小説を書きます。

あとこの小説の書き方ですが、オリ主視点で地文も主人公寄りになっています。

世界観や登場人物の考え方が違う！！！！といわれる前に言いますが、思いつきり独自設定入ってます、それはもうコレでもかというくらいに突っ込んでますよ。ええ。突っ込んでます。突っ込んでますよ！ゲフンゲフン・・・詳細はお話の中と設定説明で書いておきます。能力に関しては第2話あたりで説明があるのでそちらでご確認を。

次に投稿関係ですが、2日に1話くらい、「妄想がWとWまWんW
ねWえW W W」とか気持ち悪いことになったら連続投稿します。

ご挨拶及び小説説明（後書き）

どうも、この小説を閲覧していただきありがとうございます。

さて、いきなりですがアンケートします！！ヒロインです！アンケートです！ワーワーパフパフモミモミ！

ヒロインは学園生徒でお願いします。とーこ先生は好きなのですが使い辛く、作者の能力では無理ということが判明したので除外させていただきます><

あ、でも、上位食い込んでたら書きます。書くしか・・・ないじゃないか！

出会い（前書き）

少年が棄てられ、邪神と出会います

出会い

side 少年

「暗い・・・どこだここ・・・確か家でゲームしてたはずなんだけどな・・・」

気がついたら真っ暗な空間に居た、自分がそこに存在しているかもわからないほどの闇、訳のわからない不安が押し寄せくるような闇。

「これは・・・夢・・・じゃない・・・なんで！？俺がなにかしたかよ！！！」

夢だと逃げたかったが本能がわかっていた――コレハ夢ジャナイ

そこで俺の意識は一旦なくなった。

side 邪神

「やべー・・・超暇・・・」

私こと邪神はとても暇である。俺は力が強すぎるので回りに誰もよってこない、天界の討伐だの何だのほざくバカ共か、俺に罪を償って正しい神になれるとか言うあの慈悲女しか俺のところに来ない。

来たとしても100年に1回程度

「あー、なんか面白いことないか・・・探すか」

そうと決まれば情報収集！力任せにアカシックレコードをこじ開ける

「なんか糞屑ゴミの神共の間で”異世界落とし”が流行ってるらしいな・・・」

ふむ、あのゴミ共にしては良い遊びを考えたもんだ！これで人間観察でもするか

「そうと決まれば人材を・・・ん？」

アカシックレコードを閉じようとしたら誰かが世界から追放されたようだ

「は？世界から追放されるって何やったんだよ・・・まあこいつ面白そうだ・・・こいつにするかw」

side out

side 京夜

俺こと京夜は中学3年生8月までは普通な不幸の生活を送っていた。

だがある日から異常な不幸に見舞われた、といっても、昔から不幸だったが、親が死んで、遺産目当ての親族、遺産目当てのクラスメートの女、前々から不幸だったがレベルが違うことが起き始めた、痴漢疑惑だったり、ぼーかろいど○音のカゲ○ウデ○ズがビツクリを起こすような・・・例を挙げると、トラック突っ込んできたり、

鉄柱落ちてきたり、AK乱射してる薬中に追い掛け回されたり、変なお前はでてけとかいう変な夢を見たり、とにかく2ヶ月間不幸の連発だった。

そしてなんでいきなりこんなこと話してるかというところでもしないと頭がおかし「おい!・・・聞こえたら返事をしてくれんか」

「・・・ん?」

side out

side 邪神

「おい! (あぶね、元の口調で言うところだった) 聞こえたら返事してくれんか」

「・・・ん?」

(お・・・パスが通った、引き上げるか)

side out

side 京夜

え? は? え? は? 何が起こった

「ふむ、困惑してるところ悪いがの、聞いてくれんか」

（誰だこいつ・・・ああ・・・神様ってやつか・・・プライバシーは守ってくれてるのかな？）

「どうした？いつまで放心しておる

」

（ふむ心は読んでないみたいだな。あまり返事しないと読まれるかもしれない）

——邪神は心を操れるので読む必要がないので覚えていないから読めませんww——

（なにか受信した気が）

「あの、貴方は神様で間違ってますんよね？」

「うむ、間違いないぞ」

（やっぱりか）

「私を地球に戻してください早く今すぐ！ASAP！（できるだけ早く）」

「あー・・・それが・・・のう・・・」

（ん？なんか違和感が・・・）

「お主を間違えてあの世界から隔離してもうた！すまんのw」

「・・・は？・・・というと？」

「うむ。もうあの世界には戻れん、だが他の世界に転生させてやる。もちろんその世界ですぐ死なないように能力もつけてやるぞい」

（・・・おかしい・・・だったらあの空間は？そのこの人は何か変な感じが・・・そうなにか・・・嘘を・・・嘘？・・・ああ・・・もうヤケだ・・・カマかけよ・・・）

「あんたさ・・・もうわかってるぜ・・・バレてるバレてる、もう遊びはやめようぜ？」

「ッ！なんのことじゃ？」

「あんたが隠してることだよ」

（この言い方だったら、慌てていたら、人格、性格、しゃべり方、事情、全部の嘘に対応できる・・・）

side out

side 邪神

（あーだりー、さっさと観察してーな、能力適当だいいよなーなにがいいか・・・）

「うむ。もうあの世界には戻れん、だが他の世界に転生させてやる。もちろんその世界ですぐ死なないように能力もつけてやるぞい」

「あんたさ・・・もうわかってるぜ・・・バレてるバレてる、もう

遊びはやめようぜ？」

（なっ！？なにが・・・カマか・・・！？慌てるな・・・慌てたら俺の人間観察ができなくなる・・・）

「ッ！なんのことじゃ？」

「あんたが隠してるってことだよ」

（こいつ・・・）

「ハア・・・めんどくせーな・・・せつかく面白そうだったのによ・・・」

Side out

Side 邪神

「ハア・・・めんどくせーな・・・せつかく面白そうだったのによ・・・」

（きた！かかったか・・・）

「くくっ・・・ただのカマだったのにな・・・」

「あ”あ”！？カマあ！？・・・ハア・・・なさけねえ・・・」

「あー・・・あんた邪神かなんかか？」

「ツツ！ああ、そうだけどなにか？」

（切れてるな・・・まあカマに引っかけたらこうなるか・・・）

「なんで俺を隔離した？」

「ちがーよお前は世界に棄てられたんだ」

「は？」

「お前が何かしたんじゃないか？」

（・・・あの変な夢か！あれは世界だったのか・・・！？つかんだよ”棄てた”って！俺が何かしたのかよ！俺はただ・・・）

「！？おい！小僧！おい！落ち着け！」

「あ・・・？え？」

「・・・お前の棄てられた理由が今わかったよ」

「なに！？教えてくれ！なにが！？！？」

「お前は・・・器がでかすぎるんだよ」

「器・・・？」

「器ってのは、簡単に言えば力・・・パワーを入れておくもんだ」

「それが大きいって・・・？」

「まあ世界が数十個入っても問題ないような・・・器・・・まあ俺の100万分の1くらいだけだな」

「あんたがチート性能なのはわかったから早く俺について説明しろks」

「お前口悪くなってきたな、いやそっちが素か？ま、いや、まあ器だけ大きいなら別に世界もお前を追い出したりはしなかっただろうな。だがお前はあの地球を持ってる力に方向を加えてぶつけるだけで木っ端微塵にできるような力を持ってるんだ。だから・・・棄てられた」

「・・・ごめん、スケールがでかすぎて・・・」

「まあ・・・お前は俺の次にチートだな。他の神でさえデコピン瞬殺あぼぼーんwwってな風な」

「神を瞬殺・・・なあ・・・もしかして・・・」

「あ？」

「さっきの話ってまだ適応中！？！？（超興奮）

「え・・・いや・・・」

「どっちだ！家！？AIBO！」

「落ち着けやあああああああああ！」

side out

side 京夜

「はぁ・・・はぁ・・・」

「なんかごめん、でもさ！最強じゃん！オリ主TUEE！ってできるよ！やったね！きょーちゃん！」

「おい！やめろ！それトラウマなんだよ！・・・ん・・・お前・・・力を使うってことは・・・」

「命を背負う覚悟があるか・・・でしょ・・・あるよ・・・あの闇は死後の世界だったんだろ・・・？怖かったよ、あんなの見てしまった後に命を簡単に奪えるほうがおかしいよ」

「見たのか・・・アレを・・・」

「うん・・・悲しみ・・・憎しみ・・・怒り・・・喜び・・・色々混ざり合っていた・・・」

「正確には死んだ魂の残留思念だ、本体は輪廻転生するからな。」

「でも・・・殆ど変わらないよ。あれはその人が生きてきた証拠であることに変わりない」

「くくく・・・」

「なんだよ、気持ちわるい」

「お前・・・面白いな・・・」

「・・・つぶ・・・なんだよ・・・シリアスだったのに」

「個人的に気に入った・・・お前を転生させてやる！俺の純度100%友情でできた邪神の加護＋アニメとかの能力付だ！」

「なんだってー！そんな邪神様にしびれる！憧れるう！！！！！」

「まあ・・・もう手に入れることはないとおもっていたからな・・・この暖かさは・・・」

出会い（後書き）

はい、くるみいです！ははは文才無いいうな！gggg言うな！
あ、石投げない・・・あっ！いい！いい！

さて・・・今回は転生するために結構ゴリ押ししました。

邪神様も一緒に降ります。ですが殆ど下界であった女性とラブって
ます。（であった描写なし、もしかしたら書くかも・・・？）

世界の仕組みと能力付与

side 京夜

「あーそういえばさ、俺世界に棄てられたって言ったけど、アノ不幸はいったい何？」

「ああ、奇跡ってあるだろ？あれは世界が干渉してるからなんだが、現象を起こす程度、鉄柱落したりだとか、トラック運転手眠らしたりだとか、そういうのはその世界の生命体から1mmくらいの力ふんだくってできるんだが、追放とか、まあお前がされたやつだな。あれは世界の寿命を10分の1支払うって行使できるんだよ。俺は力小指程度でできるけどな？まあ、だから寿命を減らしたくないから奇跡を使ってお前を殺そうとした。殺したら天界の輪廻課に送られる、そして異常な力を持った魂はその力を取られるんだ。」

「なるほどなるほど」

「んじゃま、準備しますか、能力どうする？」

「んーなんでもいいの？」

「ああ、お前の器5%くらいしか埋まってないぞ」

「まじか！？それで地球木っ端微塵って・・・」

「あーそれ、説明長くなるが・・・聞か？いや聞いとけ、自分の力にも関係するからな」

「ああ、頼むよ・・・暗くないよな？その話」

「大丈夫だ、問題ない。まあ世界・・・つつつても次元とか色々あるから一くくりにできないんだが、俺らの次元の世界は”全界”、”上位界”、”中位界”、”下位界”、”離界”がある。”全界”は神や死神、悪魔、墮天使、神獣、その他が住む世界、神といわれる存在と悪魔という存在が仕切っている。ここまでで質問は？」

（ん？それって結構危ないんじゃない？）

「墮天使とかは大丈夫なのか？・・・その・・・他の天使たちと居て」

「前まではアレだったんだが、普通の神と墮天使とが子をなしてな、それで別にいいんじゃないかってことになったんだ。元々もう天使から墮天使になるってことはない、墮天使っつー一つの種族なんだ。」

「そうなのか、わかった続きを頼む」

「はいよ、それで”上位界”これは・・・あー世界っていうのは自然発生と神が作るのでは容量とかは変わらん、変わるののは耐久性だ、魔法ですぐぶっ壊れなかったりとか。まあそれでだ、”上位界”これは生命が自然によって生まれ育ち、進化していった世界だ。生命が自然から生まれたことによって新しい世界の糧となりやすい。」

（糧って・・・なんかいやな感じがするな。）

「糧になるって言うのはどういうことだ？」

「漫画とかアニメとか、そういう物が人気なる、そうするとその物語が世界になる。」

（そういう意味の糧か、なら問題ないな、問題があっても何もできないんだが・・・）

「把握した、それでそこに介入とかできるわけか」

「まあ実際、その物語の世界には介入できない。ま、この説明は後だ、んでだ、さっき言った世界とかが”中位界”に属する。だが”中位界”の殆どは激しい魔法、気のバトル物とかだ平凡日常とか、現実系の戦闘は”上位界”に属する。まあさっきいったが世界と人に神の加護をかけて世界を作る。人に加護をかけるのは、そうしないと魂が自分の放った破壊力に耐え切れないからだな。一気にいくぞ、次は”下位界”呼びづらいのは気にするな、即興だからな。まあ下位界は悪魔とかが荒らしすぎて神が介入しても再興不可能で寿命を待っただけの世界のことだ。まあ元の物語に、ってことで別に無法地帯で「ヒヤッハー」って意味じゃあない。そして”離界”俺たちがいる世界と世界のに神が意図的に作った空間のことだ。」

「じゃあ離界ってのはそこまで重要じゃないのか？」

「ああ。お茶したいけど外がうるさいな、そうだ、離界を作ろう。こんな感じだ」

「軽いな！？おい！」

「んでお前の力は中位界と相性が良いから中位界に送るからな」

（相性がいいってどういうことだ？？）

「相性がいいってどういうことだよ、つか俺に選択権は！？」

「ねーよww相性は世界が壊れ辛いつてことだ。お前の力ぶち込んでも壊れない。なんせ・・・俺が作った世界だからな！！！！！」

「・・・あっそ」

「ちょ！？結構傷つくぞ！？それ！・・・まあいい、んで能力決めるぞーお前の容量ならなんでもOKだから言えや。あ！でもあまりやりすぎると人格壊れるから注意しろ。あと送る世界は「ネギま！」だお前好きだったろ？あとお前の魔力、気はネギま、の全生命体の12乗くらいだから！」

「まあ、神超えてるんだから当たり前か、じゃあ能力は・・・」

- ・直死の魔眼・真理解状態、副作用なし
- ・見稽古　　..チート仕様
- ・超一流の曲弦師、音使いの能力
- ・武器・楽器のガンダールブ的な能力
- ・容姿を好きに変えられる力

・能力を作る能力

「これくらいかなあ？」

(さっき怖いこと言われたからコレくらいしかできなかった・・・)

「・・・お前容赦ねえな・・・まあそれがお前か・・・」

「これでも譲歩したよ？」

「・・・もういい、んで俺もネギま！にいくからな「さてよ！俺のオリ主人生を邪魔する気か！俺の夢を！茶々丸は絶対n「いや、俺は介入しない、つか俺を普通の人は好きになれない、本能が避けるんだよ。」

(・・・そんなのってありかよ・・・それってずっと一人だったってことじゃねえか・・・)

「わりい・・・」

「ははは！なにしかけた顔してんだよ！・・・お前は俺の友達じゃないのか？／／／」

「・・・つぶ・・・ははははははは！！恥ずかしいなら言うなよな！ははは！」

(そうだよな・・・俺がこいつを一人にさせなきゃいい・・・傷の舐め合いか・・・昔の俺もよく言ったもんだ・・・ははは！)

「~~~~~！！！！もういくぞ！ほら！今すぐいくぞ！！！」

「あゝ後もう1つ従者がほしいゝかわいい系か美しい系で！」

（ペット飼ってみたかったんだよね！！）

——京夜は後で後悔する・・・なんでもっと詳細を言っておかなかったのかと・・・——

side out

side 邪神

こいつ後で絶対殴る！思いっきりなぐる！ぜってーゆるさね！！！！

「~~~~！！もういくぞ！ほら！今すぐいくぞ！！！」

「あゝ後もう1つ従者がほしいゝかわいい系か美しい系で！」

（あ？何言ってるんだこいつ、まあ当然か丁度一番性欲が出てくる時期だからな・・・）

「わかった、容姿は俺が造っていいのか？」

「おうよ！一番いいのを頼む（キリリ）」

（ふむ、久しぶりだな、従生命を作るのは・・・）

「よし！能力付与と従者製作は終わったぞ！」

「マジかー！出発しようZEE！！！！」

「クスリッ・・・ああ・・・いこうか・・・」

（ああ・・・本当に・・・悪くない・・・お前は絶対に失わない・・・
・全界を滅ぼしてでも・・・な）

「じゃあいくぞー、転移陣起動〔離界N.O. 3221から中位界物語〕ネギま！”平行世界N.O. 235へ、【製造者・エルティアスに許可を申請します】【転移許可申請を許可しますか？】」

「んじゃいくぜー」

俺がそういうと申請を許可した。その瞬間俺たち二人を凄い光量が包み込んだ。

「ああ、俺とお前は基本別行動だ、強すぎるのが二人居ると世界が壊れるからな。」

「了解、遊びにこいよー？」

「わかってるよ。またな・・・”相棒”／／／」

「！・・・ああ！またな！”相棒”」

そして俺たちはネギま！へと旅立った

side out

side?..?

「まあ・・・あのエルが・・・ふふふ・・・罪を償うのではなく・・・罪と生きていくのですね・・・私はあなたが進むのを待っていましたよ。あの人の子には感謝しなければいけませんね。エル、いつでも会いにきてください、私は貴方の・・・」

———母親なのですから・・・

世界の仕組みと能力付与（後書き）

どうも！くるみ입니다！今回は邪神の名前と慈悲女こと母親がでてきました。

エルティアス（以降エル）は昔犯した罪によって邪神となりましたが普通は母親さえも離れるのですがエルの母親だけはずっとエルのことを心配していました。

ヒロインアンケートですが、11／15までが第一次募集です。

邪神の悪戯と勘違い（前書き）

やっちゃった・・・俺の妄想大暴走！もうなにがなんだがわけわからぬwwww

ここからはa11京夜サイドです。分けると色々gdgdになりやすいので、わかりやすくします。少し視点を分けないとわかり辛かったら別の話であげます。

邪神の悪戯と勘違い

あのバカみたいな光に包まれて数秒してやっと前が開けてきた。

「うー・・・目が・・・っとうあ・・・コレが死・・・、オフしとこ」

つかアイツいつの時代に飛ばしたんだよ・・・つか・・・体に違和感？よく体を観察する・・・

華奢で力をこめただけで折れそうな華奢な腕、同じく足、すっきりとした胴回り、鈴が鳴るような美しい声、少し膨らんだ胸、そしてなければならぬものがない・・・この条件から推測されるのは・・・

「あんの糞エルが嗚呼あああああああ！！！！！！！！！！ってあれ？なんで俺アイツの名前知ってんだ？まあアイツだから仕方ないか・・・どうせ能力付与のときに突っ込んだんだろうな・・・」

そして俺はアイツにもう一回出会ったら死の点を突くことを誓って歩き出した・・・が！

「貴様！連合の人間か！」

なにこの状況300くらいの部隊がか弱い女の子を囲むってどうよ？

「え・・・あの・・・（涙目）」

「ゴフッ！」「わが生涯に一片の悔い」ここに俺の幻想が・・・」

なにこのカオス．．．．そして光を屈折させて俺の顔見たら超
かわいい．．．ハア．．．ん？

！？なんだ！？このアホみたいな力．．．って．．．え？なにあの
美しい人．．．女神ですか？

陶器のような肌、紺色の、だけどどこか透き通ったとても神々しい
髪、とても美しくかわいらしく整った顔．．．俺に引けをとらない．
．．．！．．．．．自分で言っただけで悲しくなった

「貴様等、私だけの可愛らしく可憐で儂いお嬢様の涙目を見たんだ．
．．イキテカエルトオモウナヨ」

ちょ．．．殺気がやばい．．．つと．．．いきなり軽く．．．ああ
俺だけ外したのか．．．っってお嬢様？

「お嬢様．．．エルティアス様に創造していただいた従生命体でござ
います。（美しい．．．このお方が私の主．．．ゴフ）」

「（吐血！？）ビクッ！え．．．従者？え？」

（．．．ああ．．．昔の俺．．．なんでもっと詳細に説明しなかつ
た！！！！！俺の歳って丁度そういうこと考える歳だからとか思っ
てやったんだろうなあ．．．嬉しくないわけじゃないけどさ☆むし
ろ超嬉しいなにこの女神）

——ビシャグチャ

「．．．え？」

一瞬で周りの人間がバラバラになっていた。

「さて、このような穢れた場所にずっと居てはいけません、少し移動しましょう。」

「え・・・あ・・・うん（コクリ）」

「ゴファ！！！」

「ひゃああ！（ビクン！）」

「ブシュ！（愛は鼻から）」

「にゃああああ！（ビククン！）」

以降ループ

それにしてもこの体になってから精神が体に引っ張られてるような・・・感情とかじゃなくて考え方とかは前世の歳相応なんだけど女の考え方、仕草とかが自然なんだよな、中では「俺」なのに「私」になっってしまう。怖いさすが邪神怖い

「お嬢様、怖がらせてしまって申し「アリしゅ・・・アリスって呼んで！！」・・・私の生涯に一片の悔いはありません・・・エルテ

「イアスさま創造していただきありがとうございました・・・」

（アリスはロリ、陶器肌と来たらこれしかないと思った・・・って
考えてる暇じゃない!!」

「戻ってきて〜!お願い〜!」

「・・・・・・」

うぐ・・・こうなったら俺の精神ダメージがカンストするが・・・

「ひっく・・・えぐ・・・起きてよお・・・」

「ガバツ!」すみません、お嬢様、私は少し幻想を見ていたようです。今も十分幻想卿ですが」

それより白いメイド服がブラッドな色になってますよ・・・

「では、アリスお嬢様「お嬢様は嫌っ」orzわ・・・わかりました・・・アリス・・・さ・・・様・・・う・・・」

「う・・・うん・・・（あ・・・コレってダメだったパティーン?）
あ!そろそろ出発しよう!?!」

「お嬢様はダメ・・・お嬢様がダメ・・・メイドなのに・・・アリスさ・・・様かわいいのに・・・可憐なのに・・・」

「ああ!もういいよ!お嬢様で!だから立ち直って!」

「はい!では出発しましょう、私だけのお嬢様——」

邪神の悪戯と勘違い（後書き）

変態メイド型従者登場もちろんあのナイフの人を参考にしました・
・！

登場人物説明

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} ブチ切れ時…零崎 狂
夜、なぜ識が付いていないのかは後々邪神が説明してくれます。

身長…150cm いくかいかないか ブチ切れ時182cm

体重…黙秘します♪（なんかイヤなんだよね）

一人称…「私」 ブチ切れ時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く髪を持ち陶器のような肌ととても可愛い顔、だが自我を忘れるほどブチ切れたら元の京夜の姿に戻る。で左目が黄色で右目が青（左目が？で右目が直死）

性格…（夜のみ）ドMというより周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので全ての矛先が自分にくる。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜DS

年齢…12歳 ブチ切れ時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力・神力（邪神の加護）

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象でさえ殺せる⇒エヴァの呪いなど

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師・音使い…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない

容姿を好きに変えられる…変えようとがんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…コレはブチ切れた、または人を助けるためのときしか使用しません。

名前…エルティマス

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在った

年齢…1億あたりから数えていない邪神になったのは2千万歳あたりなのでそれからずっと一人ぼっち、なので京夜を殺そうとするとブチ切れる。ならばエルからと手を出すと京夜がブチ切れるので打つ手なし

身長.. 172cm少し背が高いが夜抱くときに苛めやすいので気にしていない

一人称..私

性格.. (夜のみ) 超ドS、通常はノーマル

年齢.. ” 邪神の悪戯と勘違い ” のときで1時間ちよつと

設定・使命などは命令として与えられメンドクサイと感じていたが
本人にあつて電流走る、この人にすべてささげようと思った。夜以
外は従順

登場人物説明（後書き）

今回は設定でした。4時間ちょつとなのですがもう見てくれる方がいてとてもうれしかったです^^ありがとうございます。

鳥頭に女好きに犯罪者（前書き）

やばい、アリスとフリージアたのしい

鳥頭に女好きに犯罪者

sideナギ

おつす俺はナギ・スプリングフィールド！未来の英雄様だ！

まあ今は【紅き翼^{アラルブラ}】のリーダーをやっている！

まあそれはいいとして・・・

「これは一体なんだ・・・？この鋭い切り口・・・刀でもこうも見事には・・・」

「それほどなのですか？」

「ああ、アルか、この切り口はありえないほど鋭い私でも無理だろうな・・・」

な！？えーしゅんでも無理だあ！？

「おい！それまじか！？」

「ああ」

「ですが、敵方を攻撃した、ということは”まだ”連合の敵ではないということです」

「そうだな、一旦戻ってみんなと話し合おう」

「ああ、そうだな！皆！一旦戻るぞ！！」

一体誰があんな・・・ああっ！考えんのは俺の仕事じゃねえ！俺はぶっ飛ばす！ただそれだけだ！！

side out

sideアリス

さて、まずは歩いてるわけですが・・・この従者異常に私の行動に敏感で転びそうになったらクレーター作るほどの速さで助けに入ってくる。マジで自然破壊やめて。ん？この気配・・・

「あれ？このでかい感じ・・・【紅き翼】??」

「つつ！私とアリスお嬢様の時間を邪魔するとは・・・ゴミ共が消失去ってやる・・・ククク」

「ちょっ！キャラが・・・変わってるよ！」

「では少しいって来ますね♪」

(まづいまずいまずいまずい！これは、いきなりBAD ENDとかマジ勘弁してほしい・・・こうなったら・・・)

「一人にしないで・・・？(涙目)」

「バタッ」

ふう・・・なんとかフラグ回避・・・

「おい！そのやつら！」

ん？なんだあの赤毛・・・ってナギ！？それに詠春・・・ロリコン・・・
・ヤバイとくに最後の・・・

「な・・・なんでしょうか・・・（プルプル）」

これやっときゃなんとかなる・・・あああああ！ロリコンがいる
の忘れた・・・

「ゴフアアッア！！私の生涯に一片の悔いもありません・・・」

「君たちはここでなにをやっていたんだ・・・！？その女性は
大丈夫か！？」

「え・・・スルーですか？・・・フリージアは大丈夫だと思います・・・」

「はい。問題ありません」

二人は顔を赤らめた・・・まあフリージアだしね、人間国宝だしね、
女神だしね

「ちょ・・・！／／／／」

「・・・／／／」

「私の幻想卿・・・ふふ・・・」古代禁忌魔法——捌きの炎——
ドゴオオオオオ！！！！！
ルミナスフレア

「「！？」」

え・・・容赦なし？うそ・・・

「てめえ！なにしやがる！！」

そういいながら武器を手にする・・・

「なにいつてるんですか、こんな幼い子に発情するゴミなんて消毒するに限ります。私は発情しているのではなくて弄りたいんです！」

「それを世間では発情してるっていうんじゃない？」

さすが詠春ナイスツツコミ

「まあ、そんなことより、お前等強いな！俺の仲間になれ！！」

「はぁ・・・あんなロリコンがいるところ」「いいですよ」お嬢様あ
！？！？！？！？」

「いくところないですしね、別にいいじゃない？守ってくれるんでしょ？」
(ニコ)

「！・・・はい、わが主・・・」

「これで鼻血を流してなければ完璧だったな」

言わないで上げて詠春

鳥頭に女好きに犯罪者（後書き）

はい！くるみいです。

今回は紅き翼に加入する場面です。

ヒロインアンケート11／15まで！

初めてのブチ切れ（前書き）

今回は切れたらどうなるのか〜というおはなしです。

初めてのブチ切れ

ナギたちと一緒に行動して結構時間が経ったんだけど・・・

アルビレオが異常に私に話しかけてくる。コスプレは好きかとか、色々そしていやらしい目で見てくる。そしてルミナスフレアで燃やされてる。まあそれはいいとして、

いま、戦場にいます。

「黄昏の姫御子まで出してくるとは・・・」

「だって王族だろ！？まだ小さい女の子だって言うし・・・」

「ナギ、冷静にそしてうるさい」

多分私が一番イラツイテル、なにかわからないけど昔から力による強制的なものには胸焼けがするほど嫌悪感を抱いていたがこの頃それが激しい。

「・・・アリスお前が一番落ち着け・・・その殺気に当てられてはたまらない・・・」

「・・・ごめん」

「殺気にあふれるお嬢様・・・ああ！でもそれがいい！！」

「空気を読んでください」

「「「「アルがアリス関連で真面目なことをいった!?!?」」」」

「いくら私でも怒りますよ? #」

「冗談だつての! アル!」

「ナギ! 鬼神兵が向かつてる塔だ!」

「わかったぜ・・・っち! おい! アリス先にいけ! お前のそのチー
トなら抜ける!」

「わかった! フリージアはみんなの援護お願い」

「承知」

間に合つて・・・アスナ・・・

着いた! あれは・・・アスナ!?・・・体の中がボロボロだ・・・酷
い・・・ミニクイ・・・

何でこんなこと・・・——アイツラトオナジ——・・・

「貴方たち・・・そんな子供まで担ぎ出すことはないわ・・・」

「お前は・・・紅き翼・・・【神速の槍】・・・」

「つく！こいつは私たちの”所有物”だ貴様に言われる筋合いはない！！」

「ピク」なんていいました？よく聞こえませんでした・・・」

コイツイマナントイッタ？

「こいつは私の”所有物”だ・・・」

クロス

ゴオオオオオオオオ！！！！！！！！

そんな暴風が吹くほどの風と共に現れた黒髪の男、金色の目と青色の目をした男、
ただ目の前の蟲を駆除するという眼をした男。人目でわかった、こいつは・・・

———圧倒的強者———

気がついたら瓦礫の上に立っていた、アノ老害が所有物といった瞬間からの記憶はある。

記憶が正しければ仲間を攻撃してしまった、、私の力が未熟なせいで・・・

「やっととまったか、このじゃじゃ馬むすめえええ・・・！」

とナギがいう

「夕風が粉碎するかと思った」

と詠春がいう

「他のみんなは・・・？」

と私が震えた声で言う

「皆は・・・」

「え・・・？」

「お前の後ろだww」

「ああ・・・お嬢様のおい・・・」

「にゃあああああああああああ！！！！」

所変わって野宿中。皆には私が回復を施した。さすがチート万能だ
その後今回のことを謝った・・・が皆気にしてないといい私を殴っ
た！痛い！

チートボディといっても痛いものは痛いのだ！！

そして今鍋の準備中！あんなことがあったので今日は景気祝いだそ
うだ。

そこまで祝う・・・というか・・・ねえ・・・もっとシンミリとか
暗いとかじゃないの？

まあこいつ等バカだしね・・・私だけ気にするのバカらしくなって
きた・・・

「んっふふっこいつが旧世界は、日本の鍋料理ってやつかあ」

「じゃ、早速肉をっ♪」

「あつ、ナギ、おまつ・・・何、肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

鍋のやり方がなっていない・・・。その辺は詠春に任せるが、面倒だから！そして言い忘れていたがいま鍋をしている！・・・ナベ？鍋ってアイツがこなかったっけ・・・あの筋肉達磨がくるんじやなかったっけか！？あれ？記憶があいまいなんだy「食事中失礼！ッ！！！」ああ・・・私は正しかった

「俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！いっちょやろうぜッ」

まあ・・・本を読んで時はあまり思わなかったですけど目の前でやられると・・・ねえ？

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ・・・お、お！？」

「フ・・・フフフフ・・・食べ物を粗末にするものは・・・！？！？」

「あはは！おじさん・・・すこしOHANASHIしようか・・・！」

「「「さて逃げよう」「」」

「お嬢様・・・美しいです・・・」

初めてのブチ切れ（後書き）

こんなggdggdで大丈夫か？大丈夫じゃない・・・大問題だ！

初めての夜

私は今、宿の部屋に居る、一旦ナギたちと離れた、事情は・・・まあこの前のあれだ
やっぱりあんな簡単に割り切れない

はあ・・・あんなことがあって・・・あれ？私心の中でも私になつてない？

まあ、そこまで気にしないけどさ、

「あら、まだ起きていたんですか？」

「リーザ・・・」

ちなみに長いということと愛称はリーザになった。もっとどうでもいいけど二つ名は【断罪の女神^{ギロチン マリア}】という二つ名だ、

「あれは仕方ありませんよ、いくら加護でも、いくら友情だったとしても、その加護は”邪神”の加護なのですから」

「う・・・ぐす・・・えぐ・・・でも・・・」

「ですが貴方が悪くないわけではありません、もう少し感情を制御できるようにしてください。もうこれ以上大切なものを傷つけないように」

「うん・・・ねえ・・・」

「はい？なんでS「ギユ」！？」

「少しこのまま・・・」

sideリーザ

ヤバイヤバイヤバイコレハヤバイあんな「感情を制御しろ（キリリ）」とか言っておきながら襲うとかシャレになりませんヤバ・・・

「ああ・あ・あ・・・ああのお嬢様ままま？」

「・・・ん？」

「感情の制御ってとても難しいんですね・・・（遠い目）「へ？」すみません・・・私”本能”に従わせていただきます」

「え？ちょ？ま？え？・・・うん？えーっと・・・」

（カーツ／／／）サツ！（↑逃げる音）ガシィ！

「逃がしません・・・誘ったお嬢様が悪いんですよ・・・？」

「え・・・あう・・・／／／」

「さあ・・・？」

—————楽しみましょう？—————

初めての夜（後書き）

さてはて一線を越えました！
後悔も反省もしない！だが・・・私の黒歴史の一部になったと言っ
ておこう

邪神と神子の大喧嘩！（前書き）

悪戯の付けが回ってきました

邪神と神子の大喧嘩！

sideエル

降りてきてから結構経った、降りてきて一番驚いたことは普通に人が関わってきたのだ・・・コレはおかしい、神でさえ寄り付かないというのに何故だと考えていたらその答えは案外簡単に出てきた。ああ・・・京か・・・ふふ・・・アイツはココまで俺を変えていたのか・・・本当にアイツは・・・
そういえばアイツを悪戯で女体にしたがどうなったかな？

「ふふw楽しみだ・・・そうと決まったらすぐ実行！【転移陣】発動！」

そう叫ぶと大きな光が走り、光が収まった時にはもう誰もいなくなっていた・・・

side out

sideアリス

はい、従者に捕食されたアリスです。・・・うんなんとなく予想はしてたよ？でもあのタイミング・・・私も考えないでやったのは悪いと思うけどさあ・・・とにかく・・・

「エルに会ったら絶対殺る・・・」

「!？お嬢様!!いくらエル様とは言えエル様とやるのは私が全力で阻止しま「何勘違いしてるの!？殺人のほうだよ! killだよ!」」

「ああ・・・そちらなら問題ありません」

まったく・・・リーザは全部下関係に持っていこうとする・・・というかエルを殺すって言うのには反応しないのね

ピカー!!

「なんぞ?!?!?」

「迷惑ですね・・・まったく」

「おい・・・作ったの俺なんだが・・・?」

この声は・・・エルか!!この恨みここで晴らす!

思うが早いか神速の速さでエルに接近する。接近中に【武器製造】の能力をつくりナイフを製造。

そして直死を発動して死の点一突き!

ドスッ!

「・・・ふふ、貴方の自業自得ですよ?」

「人を勝手に殺すんじゃないよ!つかいきなり死の点突くな!俺じやなかったら死んでるぞ!?!」

「ゴキブリ並みの生命力ですね」

「お前俺が作ったんだろ！？なんでそんなに態度悪い！」

「私の主はアリスお嬢様だけです。野郎には興味ありません、消えてください」

「／／／／／」

「これは酷い、何があった」

——状況説明中——

「H H H H H A ☆まさか計画通りに進むとは・・・！！くく・・・」

「あ”？」

「いやなんでもねえよ・・・つかなんで男に戻れてる！？」

「しらねーよ、切れたら戻るみたいだな」

「ああ・・・加護か・・・」

「そんな能力があったのかよ・・・おい！この際だ！あの離界に居たときに聞いた「実際は介入できない」ってヤツと”邪神の加護”について説明しろや！」

「もちろんだ、そのために着たんだよ・・・（今思い出したけどな）」

「なんか変なこと考えなかったか？」

「い、いや？何も考えてないが・・・？（なんか勘が鋭くなってきたぞ？）」

邪神と神子の大喧嘩！（後書き）

はい、くるみいです。

邪神様再登場！ちなみに邪神様は結構前からこの世界にちよつかい出してるので下準備は完了しています。ご都合主義万歳wwwwらんらんーwwww

あと感想ください！この小説に関すること、「こうしたらいいんじゃない？」「こういうイベントやってほしい！」「戦闘描写もつと書け」など批判も受け付けてます。ドシドシ送ってください

平行世界

「さてと、まず先に介入できないってのはだな、オリジナルの世界について意味だ」

「ふむ、ということはだ、平行世界なら介入できるんだな？」

「ああ、ネギを殺そうがナギを殺そうが関係ない。ただの似ている世界なんだからな。だが、平行世界といっても色々あるんだ、ナギが頭良かったり「ありえねえええ！！！！」ネギが紳士だったり、超が改変にきたんじゃないくて、ただ事故で飛んできただけだとか「そっちのほうが平和じゃね」茶々丸が生まれてなかった「いやああああああああ！そんな世界いらねえ！ぶっ壊してやる！！」たとえばの話だ！落ち着けアホ！あとライフメイカーが本当に人のことを考えて善作を練ってる世界とか、アーウェルンクスシリーズに喜怒哀楽がある世界だとかな。」

「本当だな！？この世界は茶々丸いるんだな！？」

「ああ、問題ない。お前がチョツカイださなければな？」

「オリ主は謹慎します！」

「まったく・・・んでこの世界の特色はひとつだ！「一体それは！
？」ライフメイカーが綺麗・・・まあ必然的に完全なる世界が綺麗コスモエンテレケイアになるわけだ・・・が・・・」

「なんか歯切れ悪いな」

「普通平行世界に入るにはその世界の管理者に許可を取らなきゃならん、だが俺は邪神だからな、転生者の処分に使われちゃってる。許可をとらなきゃ駄目なそこらへんのルールが無視されちゃったんだな、この世界に多数の転生者がいる。まあ12人くらいか?」茶々丸ううう!!! いやああああああああ!!!」

「落ちつけ! コレでも20人はつぶしたんだ、そして12人の内2人は無害だ、平凡を求めて能力も植物、動物と会話できる能力だの、料理が美味く作れるようになるのだ。だが10人のうち3人が厄介だ。原作の可愛い子全員奴隷にするだのほざいて「クロス」落ちて、まあ俺の世界だから茶々丸が作られるのは強制的に組み込めるから安心し「そんなエル様にしびれる! 憧れるう!!!」」テンション上がるのいいが・・・その・・・後ろの従者が怖いから」

「ゴゴゴゴゴゴ）・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん? お前のことが嫌いって訳じゃないよ、ただ俺って結構節操なしなんだよね?」

「それなら問題ありません・・・ですが・・・あまり多すぎるとOHANASHIしますからね」

「お・・・おう・・・」

「話終わったところで”加護”に付いての説明だな! コレは超チートだぞ? まず武文関係なく鬼才レベルだ。」「ちょ! ?」正確にはそのレベルまで訓練すればなれる、まあ見稽古あるからもっとチートだ。見てわかるってことはその武術の真理を理解してるってことだからな。」「なるほろ」シャマキンなつかしいな、おい、あと力のセーブ、んでどういう理屈かわからんが性別が逆転したっぽい☆」

「なんて素敵に加護なんでしょうか・・・これだけは感謝いたします」

「俺的にはアレだけだな・・・」「あら、喜んでいらしたではありませんせんか・・・あんなかわいらしい声で喘い「あーあーあー聞こえない聞こえないーあーあーあー」

「後切れたときに本能が全ての力を使って敵を殺そうとする。これはお前の本質だ、加護はその本質によってお前を壊れないようにする保護膜みたいなもんだ。」

「じゃああの暴走は俺が感情を制御できれば起きないのか？」

「そうなるが、まあ生き物だ全部は無理だろう」

「やっぱりそうか・・・まあできるだけ努力はしよう・・・」

「そうだな、まあそのことでお前が壊れても俺がいつも一緒に「私がいづまでもお嬢様を見守っています」

「・・・まあいい・・・あと麻帆良の土地あれ俺のだから」

「はあ!？」

「たしか麻帆良の土地管理者は【鮮血の死神】・・・ああ・・・そのまんまですね容姿」

「確かに・・・」

「結構傷つくんだが・・・」

「はははWまあいいんじゃないか・・・ん？念話？」

『アリスですか？ガトウがあわせたい人が居るとのことですので2日後の早朝・・・6時頃いつもの場所で』

『会わせたい人？わかった2日後の朝6時だね』

『はい、あ！リーザもつれてきてくださいね？』

『了解・・・アル・・・ごめんね』

『まだ気にしてたんですか・・・？そんなに踏ん切りがつかないのなら私の抱き枕に・・・』

プツッ！

私は念話を切って二人に話しかけた

「リーザ！2日後の朝6時にいつもの場所集合だって」

「承知・・・ではここの紅茶の葉を買ってきますね」

「んじゃ俺はソロソロお暇するよ」

「ん。じゃあまたね、麻帆良で必然的に会いそうだし・・・」

「そりゃあな、まあ正義の魔法使いがウザイけどあいにくさ！じやな！」

ピカー!

相変わらず眩しいな・・・

「まったく・・・もう少し光量抑えられないかな？」

平行世界（後書き）

平行世界の設定と加護の説明です

再会、そして決戦間近

あの念話から二日後私たちは待ち合わせの場所にいる。もうそろそろきてもいいと思うけど・・・？

「またせたな！！」

「まったよおー！この鳥頭！！30分遅れてる！！」

「おま！？この前俺たちを半殺しに居たやつ言うことじゃねえぞ！！？」

ちなみに私が男に変わる事などは聞かないでくれる・・・まあ「なんだ・・・ただのチートか・・・」と詠春とガトウに言われたけど・・・否定できなかった・・・

「お！すんげえぺっぴんじゃねえか！俺とランデブーでもしねえか？」

「――其は全てを凍てつかせる絶対氷河「皆逃げてえ！？」」「言われなくとも！！！！」「あ？なにがだ？」

あの時リーザは遠くから観察していたので筋肉はリーザの知らない⇒十という結果に・・・

「――罪深き者に死は生温い――ならば与えよう永遠の苦しみを――透氷に生き狂え」

【永苦氷棺】アフソリユート 「なぬおおお！！？？」

キイイイイン！という甲高き音と共にそそり立つとても美しい、
 だけどこか悲しい氷が現れた

「その氷棺はかつて最強の墮神を封じ込めた物です。永遠にそこで苦しみなさい」

『ぐおおおおお!!!
【気合脱出】!!!』

バキイイイイン！！！！！！

[illegible]

「さすがネタ担当……恐ろしい筋肉ですね……」

「アルそこ突っ込むところじゃないよ?」「おや?私にアリスが突っ込んでくれるなんて嬉しいですね♪」

「オマエが入ルカ?」「遠慮しますよ……（ガクガク）」

「それより早くしてくれないか？大物なんだが・・・」

「ああ！ごめん！皆いこうよ！」

「ゴフウウ！・・・了解ですお嬢様・・・」

「またこのパターンか・・・」

「ふふ……かわいらしいですねえ……ガシイ！」

ドカ！バキ！ボキン！グシャ！ビチャ！

なんか後ろで聞こえては行けない音が聞こえるけど皆顔を汗でぬらして後ろを振り返らず歩いていく・・・私も早くいこつと・・・

で、今はそのガトウに呼ばれて本国首都に来ている。

協力者に会うそうだ。

「それで？ 協力者って誰なのお？」

私がそう質問すると実にいいタイミングで一人の男が近づいてきた。

「マクギル元老院議員！」

「いや、主賓はあちらのお方だ」

そこに登場したのは、ウエスペルタティア王国アリカ王女。

綺麗っちゃ綺麗なんだけど、キャラがリーザと被っているため見劣りしてしまう。

ジャック（呼び方変えた）が話しかけているが、『気安く話しかけるな下郎』と一刀両断。

ナギは見惚れている、ナギの好みドストライクだったようだねえ

話し合いの内容は要約すると戦争を終わらせたいから力を貸してくれって感じだった

その後ナギは見惚れてたことをネタにされジャックに弄られている。うん、私もジャックにリーザとラブイチャしてることを弄られたんだナギも弄られる！！

そしてようやく『完全なる世界』の存在が明るみになり、私達は休暇中『完全なる世界』についての独自の内定を開始。

完全なる世界・・・綺麗なんじゃないの・・・？まさか転生者がなにかやったのか？まああって見なきゃわかんないよね

——キングクリムゾン——

「ほい、チェックメイト」

「む、おぬし本当に強いのお・・・」

私たちは今リーザのお茶を飲みながらチェスをしている相手はゼクトだ。

「ふ・・・チートボディを舐めちゃだめだよ？」

「おぬしがそれを言うとは異常な説得力があるのお」

んーゼクトに決戦のこと言おうかな？ゼクト個人的にすきなんだよねえー、よし！ガトウとゼクトの生存√DAZE！原作結構気に入らなかったんだよね？

「あれ・・・ゼクトちよつといい？」

「なんじゃ？あともう一戦するぞ！初めて2回目で負けるなど納得できん！」

結構子供っぽいところあったんだね・・・

「ゼクト・・・死相がでてるよ・・・」

「・・・なんじゃと？」

「ちよつとまって・・・今全部読み終わった・・・占い・・・聞く？」

「自分の人生は知らんほうがいい・・・といたいが・・・今が楽しくて失いたくないという気持ちのほうが大きくなってしまった、聞かせてもらおう・・・」

「OK、占いだと、決戦で「紅き騎士」の身代わりに「そしてそれにより「血塗れた翼」の持ち主たちの内「皆を纏めし剣士」「半生を見る者」が死を迎える・・・って」

「・・・紅き騎士はナギのことじゃろうな・・・血塗れた翼・・・」

「【紅き翼】のことじゃないかな？人を大量に殺してるんだから・・」

「なるほどの・・・剣士と半生を見る者・・・これは詠春とアルか・・」

「多分そうだろうね、よし！絶対決戦で無理しないでよ？私は誰か一人でもかけるのは嫌だからね？」

「・・・仕方ないのお・・・自分だけが犠牲になるならまだしもわしが死ぬことによって詠春とアルが死ぬかもしれんのだろう？ならそうしないほうがいい・・・だがわしがそうしないことで他の奴等が犠牲になるのでは？」

「そこはチートな私とリーザの二人に任せなさい。絶対誰も死なせないから」

「・・・まかせた」

「まかされたぞよ」

「はあ・・・」

ドガガアアアアン！！！！

「何！？」

「何じゃ！？」

「うお！？」

「おやおや・・・」

「なんですかー!？」

「ナギか!？」

「リーザから報告があってナギだそうです」

「戻ってきたら説教だ・・・#」

上から私、ゼクト、筋・・・ジャック、アル、タカミチ、ガトウ、私、
詠春の順番

詠春ご立腹だねえw?

「当たり前だ!!」

「あははw」

———2時間後———

「お? 帰ってきたみたい」

「ゴゴゴ」 ってくる・・・」

「「「ご立腹だね」(じゃの) (ですね) (だな)」」」

「ナギイイイイイ!!!!!」

「ちょ！？　まで！　詠春！！」

「待たん！　【百裂桜花斬！！】」

「うおおおお！！？」

「お！　俺も混ぜろや！　【ラカンインパクト】！！！！」

「てめえええええ！　後でぜってえボコる！」

「神鳴流式の太刀、【斬岩剣】！！」

「どわあああ！？　少し切れたぞ詠春！！」

「まったく・・・お前は姫さんまでも引っ張りまわしてえ・・・しかもアリカ殿もアリカ殿だ・・・なんで・・・」　ブツブツブツ

あらあら詠春がダークモード入っちゃったよ・・・

「まあまあ、大事がなかったただけまだよかったでしょ？　ナギのすることだし、気にすることないよ。気にしてたらやってらんないしね！！！！」

「それもそうか！！　H A H A H A ☆それもそうだな！」

「そうそう！　でも適度に怒ってね！　疲れるだろうケド！」

「まあ・・・仕方ないな・・・ガトウにも手伝ってもらおうよ」

「まあ別にいいじゃねえか！それに見ろよコレ、俺が行った意味があると思うぜ？」

そういつてナギが見せてきたのは・・・メガロセンブリアのナンバー12の執政官が奴らの手先だという証拠

で、現在。私、ナギ、ジャック、ガトウの面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。

「法務官はまだいらっしやいませんか」

しかし、法務官が未だに現れない。

「法務官は……来られぬことになった」

「ハ……？」

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここに来て……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

「ハア」

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪

い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

「待ちな。あんたマクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

こいつは偽者ですね。ナギが仕掛けるはずなので私もそれに合わせて準備する。

ドカン！ とナギが相手の頭を燃やすと同時に（燃やす音じゃない気が？）に私も心臓目掛けて【武器製造】で魔装ナイフ【ペシュカド】を投擲。

「ちよっ！？ ナギおまつ……元老院議員の頭いきなり燃やして……アリス！、お前も躊躇いも無く心臓にナイフ投げるな……！」

「ただのナイフじゃないよ！【ペシュカド】だよ！コピーだけど本物より性能いいけどね……！」

「アリス、そういう問題じゃねえと思うぞ？そしておっさんをよく見てみな」

「そうだよガトウ。観察眼足りてないよお？」

「何っ……」

炎の中から出てきたのはマクギル議員ではなく白髪の……えっと、一番目だっけ？

「……よくわかったね。千の呪文の男、神速の幼女神。こんな簡単に見——」

ついでに投げた【ペシユカド】のスキルが1つ【黒炎】発動！この私が投げるだけで終わらすとでも？

「全く、まだ喋ってる途中なんだけど。やはり君が一番危険だね。」
チッ。黒炎が身体を燃やし尽くす前に肌ギリギリに障壁張って転移魔法で逃げてまた戻ってきたな。避けるのだけは無駄に上手いやツだ。

「ごちゃごちゃうるせえ！」

ナギが一人突っ込むが、

「通しませんよ」

「くらえ」

と、一番目の仲間の登場で攻撃が阻まれる。

「強えぞやつら！」

「ハッハ。だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！戦いやすいぜツ！！」

「同感です！リーザ！やるよ！」

「はい、お嬢様！」

意気揚々と敵を潰しにかかろうとする私達だったが、

「わしだ！ マクギル議員だ。スプリングフィールド、アリス、フリージア、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「ハッ！ その前にテメエの人生の幕引きが先だろ」

ダダダダ！！

「くっ！ 兵が来ましたこの中にはいつて！」

能力製造で「境界を操る程度の能力」を創造そしてスキマ発動皆が入ったのを確認した後にフェイトと通信

『聞こえますか？ ライフメイカーに何が起こったのか知りたいのですが後で場所の位置を送るのでそこにきてください。もしかしたら貴方の主を助けられるかもしれません』

『！？・・・わかった連絡を待っているよ。』

その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフ、いいねえ。」

人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

「かはは。傑作だぜ。やっぱ退屈しない人生ってのは最高だな」

「お嬢様お怪我はありませんか？」

「大丈夫だよ。ありがとね（ニコ）」

「恐悦至極・・・」

「かつこよく言ってるが鼻血が台無しにしてるな・・・」

「詠春言わないで上げてよ・・・まあそれがリーザなんだけどね・・・」

そんな話をしながら私達は辺境を転戦しながら隠れ家を目指した。

まあ皆と一緒に居るのは私の分身体なんですけどね？

再会、そして決戦間近（後書き）

どうも！くるみ입니다。

今回は特に進展はありませんでしたねえ、

それよりも新しい設定と武器、能力を増やしたので後ちよつと進めたら新しい設定集作ります。

設定集

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} 暴走時…零崎 狂夜
なぜ識が付いていないのかは後々邪神が説明してくれます。

身長…150cm いくかいかないか ブチ切れ時182cm

体重…黙秘します♪（なんかイヤなんだよね）

一人称…「私」暴走時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く白い髪を持ち陶器のような肌ととても可愛らしい顔、だが自我を忘れるほどブチ切れたら元の京夜の姿に戻る。左目が黄色で右目が青（左目が天眼 右目が直死となっている）

性格…（夜のみ）DM。そして周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので少し泣き虫になってきている。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜DS

年齢…12歳 暴走時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力で神力は”邪神の加護”により得た。神力の総量はエルの10分の1たとえると京たちの次元の神全員をあわせても足りない。

身体能力…通常はラカンと同等程度、剣術は詠春より使えるが詠春

が落ち込むのでやっていない。

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象を引き起こすものでさえ殺せる⇒エヴァの呪いなど

天眼…使用時黄色から金色に光る。攻撃の軌道、どれほどの力がこめられているかがわかり、使用中は身体能力が3倍ほどに上がる

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない

音使い…楽器を演奏するので一般人に使う程度のレベルまではできるようになった

ガンダールブ…よく楽器などをみんなの前で演奏する、その腕前は加護と合わさって神の領域

容姿を好きに変えられる…変えようとがんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…戦争に参加するようになってから使うことに躊躇がなくなつてよく使うようになった

能力を作る能力で作られた能力

【武器製造】武器を製造することができる。通常の武器、宝具、魔

装器、なんでもござれのチート。しかし扱う本人を超えるものはその力を行使できない。例）アリスの魔力半分を詰めた【闇黒刀】をエヴァに渡したとしても扱うことができない、ただの刀としか使えない（ただし強度はヤバイ）

【境界を操る程度能力】東方のお姉様から参考にした能力、そのまんなまでスキマを作ることができる。仕様用途は移動のみ保存はできない。

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより上のレベルで使用可能。

咸卦法・極…神力を除く全ての力を混ぜ合わせた秘奥義。

咸卦法・神…極に神力を混ぜたもの。はっきり言ってチート。エルの20%をギリギリ倒せるレベル

名前…エルティース

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服
仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在ったことにより負がなくなり子供から好かれたり、普通に恋愛対象になったりするようになった。ブチ切れる要素は、母親、恋人、京夜

年齢…1億あたりから数えていない邪神になったのは2千万歳あたりなのでそれからずっと一人ぼっち、なので京夜を殺そうとするとブチ切れる。ならばエルからと手を出すと京夜がブチ切れるので打っ手なし

名前…フリージア　アリスが前世好きだった花からとった花言葉は「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」「期待」「純潔」「あこがれ」

身長…172cm少し背が高いが夜アリスを抱くときにアリスを苛めやすいので気にしていない

体重…「・・・まだ懲りてないのですね・・・？―其は全てを燃やす始原の炎―罪を重ねて犯す愚かな者に聖なる捌きを―全てを灰に！！」
【聖炎^{エクス}の爆風^{ブロード}】「ぎゃあああああああああ！」

一人称…私

容姿…美しい紺色の髪でところどころに赤色のメッシュが入っている、光が当たると神々しく美しさを放つ、陶器のような白い肌と、美しいボディーライン、体の全てが美しい、

性格…（夜のみ）超ドS、通常はノーマル

年齢…20歳ほど（魔法球に入っていたため）

能力…アリスの100分の1程度、神力は仮契約による強化時のみ。
身体能力…アリスより少し優れている。魔法を使ったり殴ったりする中距離が得意

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより一つ下のレベルで使用可能。霊力・妖力があるが4つの制御ができないので極の行使はできない。

設定集（後書き）

設定が結構増えましたね。

閑話1 名前

「あの！お嬢様！私にいつ名前を付けてくださるのですか？」

「あゝ・・・えっと・・・ごめん忘れてた・・・」

「クスン・・・忘れられてた・・・私の名前・・・お嬢様に忘れられてた・・・」

ああ！ヤバイ！可愛いゲフンゲフン！ヤバイ・・・どうしよう・・・
そうだ！前世好きだった花の名前にしよう！アレなら花言葉もピッタリだ！

「んと・・・じゃあ貴方の名前は今から「フリージア」だよ」

「フリージア？花の名前ですか？」

「そうだよ！花言葉はね？」「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」
「期待」「純潔」「あこがれ」
なんだよ？ピッタリじゃない？期待、純潔、いいじゃない！」

「・・・ありがとうございます・・・」

「え”！？イヤだった！？イヤだったら・・・」「イヤじゃないです・・・！とても嬉しいです！」

「そっか・・・よかった」

「あ・・・でも・・・」「うん？」親愛の情が気に入りません・・・

「へ？」

「なんでもありません」

「そう？」

「親愛の情」あながち間違ってもいませんが・・・気にいりませんよ・・・だって私が抱いているのは・・・

——恋心・・・ですから・・・

——そして近い未来に両思いになるのはまだ知らない——

白と白の会談

私は今みんなのところに分身体を残してちよつとした草原に来ている。

そして待ち人はもうすぐくるだろう。

「またせてしまったかな」

「いえいえ、呼びつけたのですから待つのは当然ですよ。コーヒーで言いですか？」

そういつてテーブルとイスを創造する。コレは神力の奇跡なので能力などではない。

「!・・・ああいただくよ・・・というよりコーヒーお願いしますよ。」

「わかりました」

私はそういつて二人分のコーヒーを入れる。実はこのコーヒーはエルから貰ったとてつもなく美味しいコーヒーで、3番目が生まれてきたら飲ませてあげようと思っている一品である。

「さ、どうぞ」

「ズッ・・・美味しいね・・・」

「ありがとうございます」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでボクを呼び出した理由は僕の主のことでいいのかい？」

「ええ、ライフメイカーがこんなことを仕出かすとは思えないので」

「そのためには君の力を示してもらわないとね？ 力のないのはただのお節介だよ」

「ふう・・・仕方ないですね・・・」

私はそう言って1番目から離れていった、後ろから呆れたような視線がくる。私が諦めたと思っているようだ。そして私は1番目に向かって

「では、いきますよ？」

体の中で気・魔力・妖力・霊力を神力という繋ぎで混ざり合わせていく・・・

「はああああ・・・フツ！【咸卦法・神】！」

発動した瞬間に自分を中心として力の渦が起こる。そしてそれはすぐに私の中に納まった。

そして発動した私の体は重力など存在しないように軽い。そしてダメ押しで

「これでわかっていただけましたか？」

認知できない速度で後ろに回る。

「っ!?!・・・ああ・・・わかったよ、だから解いてくれないかな・・・威圧感で死にそうだよ?」

脂汗を流しながら1番目が言ってくる。

それに「わかりました」と返して発動をとめる、だがその瞬間1番目が殴ってきた

パシン!ドゴォ!

「いきなりなにするんですか?」

拳を受け止め【天眼】を発動して20%くらいで殴ったがよく吹っ飛んだ。

そして天眼の発動をとめて

「そろそろ話して下さいますか?」

「ああ・・・十分だよ・・・それにしても手加減してほしかったね・・・」

「びっくりしたもので(ニコ)」

「情報とは違って結構Sだね・・・」

「いえ鬱憤がたまってるだけです。それで、ライフメイカーはどうしたんですか?」

「ふう・・・全部説明するよ、質問はあとでお願いするよ

主と一緒にこの世界を救う策を練ってたんだけどね、いきなり一人の男が現れた、そいつは主を【黒箱】とか言うへんなものに閉じ込めて無理やり主の力を使いだした。そして、今のやっていることをやりだしたのさ。主は悪くないんだよ・・・」

あら？1番目の時点で感情がすっごいあるんですけど？まあそんなこともあるっていったしなあ・・・
まあ気にしないほうがいいか・・・まあ乱入してきた男ってやっぱり・・・

「転生者かぁ・・・」

「転生者？」

「屑な神共の遊び道具さ、観察されて笑われてることも知らない・・・ね」

「・・・俄かには信じられないね・・・」

「信じなくてもいいさ、ただそういう認識をして対処してくれれば・・・ね」

「・・・わかった何をすればいい」

「旧世界の麻帆良に言って土地の管理者にアリスに言われてきた、かくまってくれて、言って？そしたら匿ってくれるから。」

「そうしたら主が・・・」

「大丈夫・・・能力創造・・・【コピードール】！〔対象、前方の

男性、思考回路、魔力波長、コピー完了。投影開始」

ゴウ！という風が巻き上がったところには1番目そっくりのドールがいた。

「これから君は1番目として潜入してね」

「わかったよ。じゃあボクはいくよ」

そういつてドールは消えた

「・・・大丈夫なのかい？」

「ええ、思考回路も魔力波長も、完璧よちなみにあれば私の分身みたいなもので魂ないから気にしないで」

「・・・チートだね」

「貴方が会いに行くエルティアス・・・【鮮血の死神】のほうがチートよ」

「・・・あの連合の4万もの軍隊を腕の一振りですべて全滅させたって言う逸話をもつ？」

「ああ・・・多分それ逸話じゃない」

「・・・いきたくないね・・・殺されそうだ・・・」

「くす・・・あいつは優しいからな？大丈夫だ」

「口調がいきなり変わったね？まあいいよ、じゃあ・・・主のこと・
・頼んだよ」

「まかされた・・・まったね」

そういつて私は転移した

「まったく、嵐みたいな子だったね・・・さて、旧世界に行かなき
やね・・・麻帆良の【鮮血の死神】か・・・大丈夫かな？」

幻想の一時

私が1番目と会談して帰ってきたらもうアリカ姫達の救出は終わっていた。

「あー少し遅かったかあ」

「アリスが二人！？どういうことだ!？」

「元々私たちのところに居たのが分身のようですね」

「ちょっと用事があったねーそれで大丈夫だった？」

なにもなければいいけど・・・

「アリカ姫とテオドラ姫が強姦されかかった」

「・・・・・・・・皆を連れて避難しなさいリーザ」

「ビク!」は・・・・はい!!!!皆さん早く避難して!!」

「な・・・・なんだ?どうしたリーザお前が取り乱すなん「いいからはやく!!!!」お・・・・おう・・・・」

「さて・・・・力で強制的になんて・・・・虫唾が走るわ・・・・消して

あげる・・・ふふふ・・・」

「皆さんは私の不完全なルミナスフレアしか見てませんが、今回本物が見れますよ。そしてお嬢様の本気の一端も・・・」

「お？そりゃ楽しみだな！つかなんでいきなりアイツが本気なんか出しやがったんだ？俺とナギが突っかかって片手であしらうようなやつが・・・」

「お嬢様は力で強制的に何かをすることを嫌悪します。あと芯の通ってない正義とかですね。

今回はお二人が強姦されそうになった、というところでしょうね？」

「なんじゃ？アノ娘は？強いのか？」

「テオドラ様あの娘が【紅き翼】最強で一番情に溢れ一番背負う覚悟を持っている少女である【神速の幼女神】アリス・K^{カミギ}ティアスですよ」

「あんな幼女がか！？うう・・・私の憧れが・・・」

「いえ、あの娘は憧れに相当しますよ、剣士の私でさえ持っていない覚悟を持っていますからね」

「ほう、さすがはわが騎士のチームだな」

「さあ？お仕置きの時間よ・・・」

——全てを燃やす始原の炎　——全てを照らす神の光　——
不浄の溢れるこの場所に　——不浄を滅する神炎を——
【ルミナス・フレア捌きの炎】

ゴオオオオオオオ！そんな音が聞こえそうな白い炎、だけど音は聞こえないただ、ただ、美しく、燃やし尽くす。そしてその場に残ったのは数人の働人と兵士のみだった。

「貴方達は私を害さないようですね・・・貴方達は神炎の加護を受けました、幸があらんことを・・・」

私はそういうと、ナギたちの居るところへと咸卦法を使って飛んでいった

——後にこの事変は【捌きの始まりの日】と呼ばれるようになる。
そしてこの個人的な【捌き】が終わるのはもうすぐ・・・決戦はもう目の前——

「ふう・・・すみません遅れました」

「おかえりなさいませ」

「うん、ただいま」

「「「「「「・・・」」」」」」

「どうしました？」

「ははは・・・我々より少し強いだけだと思ったいたが・・・最強は伊達ではなかったな・・・」

「まあ私は最初からチートだと思っていましたがここまでとは・・・」

「「おい！後で俺と勝負しろ！！」」「「おい！ジャック（ナギ）俺が先だ！」」

「すごいじゃ！綺麗だったのじゃ！もう一回やるのじゃ！」

「うぬ、さっきのは確かに綺麗だった。」

「はあ・・・俺の周りは何故こうもチートばかりなのか・・・」

上から詠春・アル・ナギ+ジャック・テオドラ・アリカ・ガトウの
順番だ

「あはは、もう一回はダメです」

「むゝ！なら他に何か見せてくれ！綺麗なのがいい！」

「丁度夜ですしね、いいですよ」

私がそう返すと

「やった！早く見せてくれゝゝ！」

「お？なんかやんのか？だったら酒用意しろ！」

「はいはい、っと・・・コレくらいでいい？」

「「おうよ！」」

「あまり飲みすぎるなよゝコレから隠れ家に帰るんだ」

と詠春がいう、まあ3本しか出してないから大丈夫でしょう

「認識阻害・・・っと・・・よし！いくよおゝゝ」

魔力と霊力、そして綺麗見せるために神力をこめる・・・そして発動！

「即席観賞用魔法【スターダストレヴァリエ】！」

パアアアア！！

発動と同時に夜空に七色の光が点滅し始めそれが次第に破裂、広がりまた破裂その破裂時に美しい七色の光を放つ、自分で見てとても神秘的だと思った。

・ ・ ・ ・ ・

「きれいだったのじゃあ……」

「気に入っていただけましたか？ 今度テオドラ様の誕生日などによっても宜しいですよ」

「是非やってほしいのじゃ！ すごく気に入ったぞ！」

「恐悦至極です」

幻想の一時（後書き）

後書き はい！くるみいです。今回はまた東方ネタですね。

【スターダストレヴァリエ】..あまり攻撃に向かない魔法です。これからもちよくちよく演出などで出てくると思います。戦闘では絶対できません。

最終決戦―前編―（前書き）

いよいよ最終決戦です！

そんな15話目です！どうぞ！！

最終決戦―前編―

ああ、いよいよきたね・・・最終決戦。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「そんなことはどうでもいいさ。向かってくる奴らを落としていけばいいだけだ」

「ちげえーねえー！」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう。あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それで、あの・・・ナギ殿」

「ん？」

「なんだ？」

「ササ、サインお願いできないでしょうか」

「おあ？ああ、いいぜそれくらい」

「そ、尊敬していました」

「あ！あとアリス様！」

「はい？なんですか？」

「あの・・・抱きしめてもよろしいでしょうか!？」

「え？いや「いいでしょう【アリスお嬢様を愛でる会】1桁ナンバ
ーに免じて許可します!」「え？私の意見・・・むぐ!？」

「あああ・・・アリス様あああ・・・」

「おぬし等・・・決戦なんじゃが？」

「す・・・すみません!!！」

「私悪くないのに・・・」

ん？通信だ。ガトウさんのほうかな？

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか?』

そういえばいつの間にかクルトがいたんですよねえ。詠春から神鳴流習ってるっぽいしですし。まあー私としては奥義盗めるからいいんですけどねえ？

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています・・・「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼等の手にあるのです」

「ああ」

「そうだな」

「よしっ。や「待って、ナギ」ろ・・・んだよ、アリス？」

「最初に大技を使います。露払い代わりですよ。合図をしますのでそれで突入してください。そして外の安全が確保出来次第私もそっちに合流しますので」

「分かった。一発派手に行ってくれよ？」

「もちのろんですよ。皆さん下がってください。リーザ皆さんへの軍への支持お願いします」

「了解しました」

「さていただきますかー！」

「軍の皆さん下がって！合図が来ますのでそれにあわせて最大出力で魔法障壁を！」

「は、はい！全隊に伝令！アリス様の合図とともに最大出力の魔法障壁だ！伝令！——」

うわー結構いるねえ・・・敵軍の上に来るとよくわかるよ、まあこんなことしてる間にも攻撃されてるんだけど、私の魔法障壁舐めないですよ？さて・・・やりますか

「ふうふう・・・ハア！【咸卦法・神】！！」

ゴォッ！私を中心とした周りで力の渦が起こる。

その力の渦が私の中に納まったときに私が動き出す。

「さあ・・・いきますよお・・・ガトウさん直伝【豪殺・居合い拳】！！」

ズドガガガガガガガガ！！！！！！

一発一発を打ち込むごとに25mほどのクレーターができる。それを1秒間80発打ち込む。

本当ならもっと連射できるが、ラスダンがあるので手加減。

ズドガガガガガ！

打ち込むごとに面白いくらいに、舞う、舞う、舞う、散る、散る、散る

そろそろいいかな？

「デッカイのいくよお・・・！私の今考えた即興奥義！【神殺・居合い拳】

ヒュカカカカカカ！！！！チュドドドドド！！！！

一発が【ファイナルスパーク】なことになってる。これダンジョン

大丈夫か・・・？

敵を消滅させたときの余波で暴風が起りますが、事前に魔法障壁を全力で展開するようにさせておいたので、味方に被害はないようですね。

「い・・・今ですナギ！」

「今のが即興奥義ですか・・・？」

「よ、よおし、野郎ども。行くぜっ！！」

なんか周りが呆然としてますね・・・私が一番驚いてますよ？自分がここまで人外になっていたなんて・・・

さて、気合を入れなおして・・・そんなじゃまあ残りの後始末と行きますか！！

Side. end

Side. セラス

私は今、あの【紅き翼】アラルブラに協力して、真の敵【完全なる世界】コスモエンテレケイアとの最終決戦の場にいる。

ナギ殿のサインをもらえて。尚且つ我等がアイドルアリスお嬢様をハグできたのだ！私はかなり舞い上がっているのだろう。いや、というより今死んでも後悔はない！

ナギ殿が敵陣に突入しようとしたときにアリス様が止めに入り、敵陣の上に浮かんでいました。攻撃されていましたが、魔法障壁を張っていたようです。私は見ていてヒヤヒヤしていましたが、次の瞬間にはそんなものは吹っ飛びました。

アリス様が咸卦法（？）を使った瞬間にあふれ出た威圧感・・・私たちに向けられているわけでもないのに息がつまりました。そしてその美しい姿と勇ましい後姿はまさに【戦女神^{バルキリー}】が相応しいでした。

そしてその後ガトウ殿が使う「居合い拳」なるものを使って敵を攻撃しました。

その一発一発が当たるときに20mを軽く超えるクレーターがものすごい速度で打ち出されました。

そしてアリス様が「デッカイのいくよ・・・！」といました。

私は「今のでデカイヤツではなかったのか？」と疑問に思いましたが周りの軍兵や【紅き翼】の面々もそうおもったようです。

そしてアリス様が”即興奥義”を放ちました・・・

そして、暴風が治まったのを確認後、私が見たのは、敵陣に向かっていくアリス様と会長除いた【紅き翼】のメンバーと、総数が2割以下の軍だった

S i d e . e n d

S i d e アリス

ナギたちを見送った後、私は先ほどの技の威力について考えてい

た。

「ああ、これは色々と拙い技を作っちゃったかなあ・・・」

「拙いってレベルの話じゃないと思いますが・・・」

「さ、さて、敵さんも慌てて予備兵力出してきたっぽいし、早く終わらせましょう？ゼクトが心配です。」

「そうですね。お嬢様のご友人を殺させるわけには行きません」

「じゃあ私は掃討しますよ」

「あの、セラスさん。私より前に出るなと通達してください。」

「もとより前にでていません。」

「私は何かしますか？」

「一応障壁張っておいて」

「承知」

「私テイルズシリーズ好きだったんだよね？」

そういつて私は神力を始めて開放した・・・が！予想外のことが・・・まず綺麗な羽衣のようなものをいつの間にか羽織っていた、そして・・・綺麗な12対の羽が・・・もっと出せます・・・まだ3分の1ちよいです。なにこれこわい。

なんか後ろから「美しい」「女神様だ」など色々聞こえるけど聞こえない！今は敵に集中する！

「―――れいめい霊冥へとみちび導くはじや破邪のきら煌めきよ 我がわ声にこえ耳をみみ傾けたかたむまえ
せい聖なるいの祈り 永久とわにつむ紡がれ 光りひかあれ―――」

―――グランドクロス捌きの聖十字―――

まばゆい十字の閃が敵を滅する・・・そして光が静まったときにはもうそこにはなにもいなかった。

「さ、っさささっ、さて、外はもう危険は少なくなりましたし！リザ！私はこれからナギたちと合流します！。ここは任せましたあ
！！」

「え！？お嬢様あ・・・ってもう居ない・・・」

んじゃ、いつてきまーす。

これ・・・捌きの光柱ジャッチメントが怖くて使えないわ

最終決戦―中編―（前書き）

中編ですゝ連投やでえゝ！妄想がギンギンや！！！！

最終決戦―中編―

「見事・・・理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？消える前に吐け」

私が追いついたときには既にナギと分身との決着はついていたようだ。

「フ・・・フフフ・・・まさか君は、いまだに僕がすべての黒幕だと思っ
っているのかい？」

「なん・・・だと？」

「！？しまった！ゼクトが！！」

「ナギ、気をつけろ！」

「！？」

「ナ・・・ナギイツ！！！！」

「誰だ！？」

「ゼクトオオオオオ！！！！！！！！」

(間に合って!!!!!!!!!!!!!!)

【神器製造】 〔製造完了〕

「守って!! 【アイギス】 !!!!!!!!!!!」

(転生者の攻撃がゼクトに届く前に止めれた!)

ぐっうう……流石に造物主^{ライフメーカー}クラスの魔力は簡単には防げない……。でも……これは見せたくなかったんだけどなあ……

【天眼】 【直死の魔眼】 発動!!

ガキイイイイイイン!!!!

「ぐっ……バカな!？」

「あいつが黒幕か!? よっしゃあ! ぶっとば「ダメよ」は!? なんだよ!

「いいから! ここは……私にやらせて……」

「ダメに決まってるだろう! お前ばかりに任せられるか!」

「わかった……でも私の言うことに従ってね……」

「ああ」

あ……結構やバイかもしれない。
かなり無理な感じに防御したからかな、結構体に負担がかかったっぽいな。

「待てコラてめえっ!!!」

「任せて、ジャック・・・」

ジャックは前の方で防御してたようで両腕が飛んでしまっている。

「い・・・いけませんナギ!その身体では」

詠春はナギを庇ってたからか。かなり傷が酷い。たしかに、ゼクトが防御していたら危なかっただろう。

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかし。そんな無茶な治癒ではッ」

「30分もてば充分だ」

「ですがッ」

「ふふよかろう。ワシもいくぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「ゼクト!何をいつているの!?!」

「大丈夫じゃ、無茶はせんよ、それにここで奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかろう」

「・・・わかった・・・でも絶対無茶はしないで!友達を失うなん

てことをしたくない・・・
これは命令よ・・・」

「・・・わかった・・・じゃがこの場面だけだと告白みたいじゃの」
「・・・それだけボケれば大丈夫ね・・・」

「ナギ、アリス、ゼクト！待て！奴はマズイ。奴は別物だ。死ぬぞッ。態勢を立て直してだな・・・」

「バーカ。んなコトしてたら間に合わねえよ。らしくねえなジャツク」

「本当、お前らしくないぞ？」

「俺は無敵の【千の呪文の男】サウザンドマスターだぜ？」

「そして私は【戦女神】バルキリーですよ？」

「この二人がいるんじゃない、問題ない！」

「ナギィ！！アリスウ！！ゼクトオ！！！」

最終決戦―後編―（前書き）

いよいよ終戦！はてさてどうなるか！？
そんな感じの17話どうぞ！

最終決戦―後編―

「私が前衛を！。ナギは後衛！、ゼクトは中衛！」

「まかせろ！」

「わかったのじゃ！」

あそこですね！

「先手を打ちます！あわせて！私も貴方達の呪文を使いますから！」

そう言って私達は無詠唱で魔法を使う。

「「『千の雷』！！！」
キーリプル・アストラベ

無詠唱だと威力が落ちるか。でも十分！！！！

「神鳴流・我流奥義！【零閃蓮華】！！！」

キキキキキキキン！！！！！！

「これを受けてまだ立っていられるのですか……」

「この程度で死ぬわけがないだろう！！！」

「そうですね……ライフメイカーの力を自分の使いたいように使えるのだからそれはそれはいいでしょうねえ！！！」

「っ!？貴様!?!?そうか・・・貴様も同じか!」

「貴方のような暇つぶし要員と同じにしないでください」

「つく・・・まあどうでもいい!始末すればいいことだぁ!」

「あなたじゃあ無理だよ、転生者!」

「おい!どういうこった!」

「ライフメイカーは悪くないのよ!ライフメイカー自体は人のことを第1に考えている!

こんなことを仕出かさない!自分の命を差し出して枯渴を状態を潤すことをするようなやつよ!」

「だったらこいつは!?」

「こいつが元凶!こいつがライフメイカーを拘束してその力を好きなように使ってるの!」

「だったらこいつをぶっ潰せばいいのか!いくぜ!お師匠!アリス!隙を作ってくれ」

そういった瞬間にゼクトが

「『燃える天空!』!』」
ウーラニア・フロゴース

それに対して転生者が

「『雷の投擲！』！』」
ヤクラーティオ・フルゴリス

ナイスタイミング！ゼクト！

「その腕・・・もらうよ！」

死の線をなぞって腕を落とす。こいつ死の点が見当たらない。多分消し飛ばさないといけないんだろな。

「まだまだ！【武器創造】【ペシユカド】！！」

武器創造でペシユカドをつくり投げる。腕を切られてあせっている転生者はよけることができずにその体でペシユカドを受け止める。

「――灰にせよ！【黒炎】！！！」

「ぐあ”ア”ア”アアアアアア！?!?」

黒炎の熱で苦しがつている今がチャンスだ・・・！

「ナギイイイイ！！！！ぶっ放せええええええええ！！！！」

「撃つのじゃ！！ナギイイイ！！」

「いくぜえええええつ！！」

「来れ虚空の雷！！薙ぎ払えええええ！！！！【雷の斧くくディオス・テュコスくく】」

ズドガアアアアアアアアアア！！！！

これで終わったのか？だが微量ながら奴の気配が残っている。この方向は！？まさか！？

「ははは！！俺はしなねえ・・・俺は最強だぞ！最強オリ主なんだ！貴様等になんかあ・・・」

ゼクトの身体を乗っ取ったの・・・？！

「く・・・見苦しいわよ！」

「なんとでもいええ！！貴様になにがああ・・・」

（あのゼクトの後ろに見えるのが転生者・・・？）

（死の点が見える・・・！）

「ナギ！足止めを！」

「な・・・お師匠様だぞ！？」「私を信じて！」・・・わかった！！」

「【千の雷くくキーリプル・アストラペーくく】」

ナギが魔法放つと同時に即効発動できる【咸卦法・極】を発動！
最高速度で背後に回りこみ・・・

「ぐおおおお・・・くく・・・なかなかハイスペックじゃない・・・か・・・？」

「———死になさい」

死の点を突く

「あ……い……やだ……しにた……く……」

ドサア！

「ゼクトォ！大丈夫！？ゼクト！？」

「うるさいのじゃ……耳が痛い」

「お師匠様……よかった……」

『助けてくれて有難う』

「「！？」」

『はじめまして、私がライフメイカーと呼ばれているものです。』

「……いきなりで悪いけど……貴方には悪役になってもらうしか道がないわ……」

『ええ、最初からそのつもりです』

「おい！どういことだ！」

「そうか……連合は”操られていた”という事実が必要なのだ」

「そういうことよ、いきなり膿を出し切ってもそこから菌が入って

壊死していくわ・・・」

「少しずつ直していくしかない、ということかの・・・」

「なんでそんな!」『いいのです。私がもう少し気をつけてればよかったのですから』

「でも見捨てることなんてできないのよね、1番目とも約束したし?」

『っ!?!? あの子が!?!?』

「ええ、とても悔しそうに・・・「あの人は悪くない」ってね・・・」

『そう・・・ですか・・・あの子が・・・』

「と、言うわけで貴方には1番目と暮らしていただきます!」

『え? それは・・・「貴方の答えは聞いてません! 決定事項です!」
【転移陣発動】〔対象前方女性1名・転送先・1番目〕じゃあまたね、【鮮血の死神】によろしく!」

『え! ちょっとまってくだ』ピカー!!!』

「ナギ。満身創痍のゼクトとアスナの回収をしましょう!」

「あ・・・? ああーそうだな!。ところでアリス・・・。さっきのやつは一体どこに・・・?」

「安心して。私の知り合いのところに送ったから、問題ないよ。それじゃあ、早く行きましょう。アスナがまってる」

「見つけた!!」

ゴゴゴゴゴ!!

「おい!これって!発動しそうなんじゃ!?」

うーん・・・さっきはああいったけどあの老害ウザイのよね・・・
少しくらい削りたいわね・・・
それに私の能力あれば浮遊を続けることもできるようになるし・・・
よし!少し犠牲になってもらいましょう!この二人の未来の子供のためにもね♪

「ナギ、アリカが自分の国を犠牲にしようとしてる」

「なに!?!だったらなおさら・・・」

「それで私その犠牲を払ってもそれ戻せるんだよねー」

「・・・は?」

「老害潰したいから発動させてもいい?」

「・・・・・・・・ハア・・・・もう疲れた、お前に任せる・・・・だけどだ！！ハッピーエンドじゃねえとゆるさねえからな！」

「血塗れた英雄にハッピーエンドはないよ・・・・まあ幸せは私が決めることじゃない、だけど、努力はするよ」

そうして私達はゼクトを背負い、アスナを救出し、最終決戦を制したのだった

最終決戦―後編―（後書き）

決戦終わったああ！！

ちなみに後半の魔法世界編ですが、残りの転生者で構成します！

感想待ってます！批判でもいいので送ってください！

崩壊阻止と嘘

私とナギ、ゼクトの三人は造物主ライフメーカー（仮）を倒すも、間に合わず、「世界を無に帰す儀式」の発動を許してしまう。（わざとだけどね・・）その結果、広域魔力減衰現象が観測された。

しかし、その危機にやってきたのはMM国際戦略艦隊旗艦、帝国軍北方艦隊の協力と、王女のアリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女の指示により、集結した全艦隊で「墓守り人の宮殿」を取り囲み、魔導兵団 大規模反転封印術式を起動し世界を救うことに成功した。

オスティアを崩落させるという、多大な犠牲を払うことで。（させる気一切ないけどね）

そして今は帝国とかで楽器演奏をしたり傷の治療をしている。
まあ最初は受け入れられなかったが誠意を込めてやっていたら全員とは言わないが
少しずつ受け入れられていった。

そして場所が代わってみんなのところ。実は終わった後皆に任せて逃げたので詳細を知らない。
まあ大体予想できてるけどね。

「アラルブラ【紅き翼】は全員無事生存ですよ。ですが、詠春の傷が思っていたより深く完治するまで剣は振れないとのことです。アスナ姫のほ

うは元老院に気づかれないところで保護していますよ。それと・・・」

「オスティアは崩落ですか？」

「知っていたのですか」

「大抵のことなら予想してました」

「ん？　そういえば・・・ゼクトはどこに？」

「そこにいるじゃないですか」

あら・・・そんなところにいたんですか・・・っていうか何で一人チェス？

「むう・・・これではアリスを負かすことなど・・・ブツブツ」

「帰ってきてからずっとですよ？　初めての貴方に負けたのが悔しかったんでしょうね。」

「ん・・・？　アリス！　チェスをするぞ！」

「そんなにあせらなくても私たち不老なんだから・・・」

「おや？　あなたも不老なのですか？　まあ・・・予想してましたけど」

失礼な・・・それより・・・「言ってませんでしたっけ？」

「聞いてないぞ！　説明「おいアリス！　いまの本当か！？」」しろ・・・

「空気読まんか！このバカ弟子！「バカだから読めないのよ」

「こいつのことはおいといて俺も気になるんだが？」

「あれ？詠春歩き回って大丈夫なの？」

「歩く程度なら問題ないそうだ・・・で？」

さすがバグキャラ。

「いやぁ・・・もうちょっと待ってほしいな？」

「・・・まあいいじやろう・・・教えてくれる日を待つとするかの、ではチェスをするぞ」

「そんじゃ行こうぜ」

「どこへ？」

そういえばヘンタイ（アルビレオ）はどこに行った？

「俺たちの表彰だよ、表彰」

「アルはどこいったの？」

「逃げたんだろ。どうせ、上がり症なもので。とか言って「まああの男も来て遠くから眺めてると思いますよ、なにせあのロリコンは会員NO.2ですから」

「あいつ、入ってたのか・・・確か【アリスお嬢様を愛でる会】だっけか・・・」

「・・・サッ！ ガシィ！！ 逃がしませんお嬢様、「H A・・・H A☆N A☆S E！！」今日はお嬢様の晴れ舞台！ 全国トップのカメラマンを54人雇い照明係りも賄賂で雇いました。さあ！ いきましよう！ さあ！ さあ！ さあ！！」

「お前はそんなことのためでいなかったのかの？」

「そんなこと・・・？」

「お前はそれでいなかったのかの？」

ゼクト、内心マジであせってるだろうな。

「ええ、せっかくの晴れ舞台ですし、【アリスお嬢様を愛でる会】会員3億人突破記念ですよ」

「ちょ！？ 多すぎない！？！？」

「お嬢様の力です。それに停戦が可決されましたし、その祝いもあってお祭りみたいなものですよ？」

「ふーん・・・ちょうどいいし、あれやるかな」

「何のことだ？」

「まあー後のお楽しみってことで」

「私にまかせなさい！」

「おい！信じてないわけじゃないが、大丈夫なんだろうな！？」

「ええ、やったことの責任はとるわよ？」

「リーザはもしものためにエルに連絡とって」

「了解しました」

さて・・・やりますか！

そしていま上空100mといったところか。ココくらいでいいかな

「ふううう・・・」

決戦の後に実験してわかったんだけど神力を一定以上に高めると人格化状態になるらしい。

あと感情によって白だったり灰だったり黒だったりした。色によって魔法の性質も変わっていた

「【リミッター全解除】」

今回は純粋な神力だけだ。

前の3倍出ると思ったのだがなぜか28対の翼、倍になるわけじゃないんかな？

まあエルに聞けばいいか。

「では・・・いきますよ・・・」

【――大氣たいきに舞まいし精靈せいれいたちよ】

【――我の力の元に具現せよ】

【そして美しき清浄せいじようなる調べしらべを 奏かなでよ】

――スピリットサークル――

【我らわれに聖せいなる加護かごを】

・ 魔術発動と同時に集まる集まる、”中位精靈”、”上位精靈”まで集まってきた・・・ここまではよかったが予想外のことが一つ・・・

「な・・・あれは精霊王!？」・・・そうです精霊王来ました。何故わかったかと言うと周りの精霊を従えているから

「精霊王を従えてるのか・・・？」 「やはり女神様だったか・・・！」
「幼女万歳・・・！」

・・・最後のやつ後で殴る

「っ!？今寒気が!」「大丈夫か?」「大丈夫だ、問題ない」

なんでそのネタしってる。・・・っと精霊王が全部あつま・・・った・・・?

・・・なぜにオリジン・・・? 天地人の源流が何故ココに・・・まあいい!

【私の呼びかけに答えし精霊よこの地に加護を・・・!】

コクリ・・・1回だけオリジンがうなずくと広大な魔方陣が描かれた・・・

「これで下準備OK・・・いくよ!」

この白翼のスピリットサークルは次の呪文の強化補助だ

【神の御名において そのみ使いをここにたまわらんことを欲す】

【我御身の代行者たらんことを願う者なり】

【私の願いを聞き入れ 開^{ひら}け 聖^{せい}界^{かい}の門^{もん}】

———【セフィロト】———

セフィロト・・・これは白翼状態だと設定した一定範囲に神力の加護を受けた魔力で満たす。これは多分私が望んだからだろうね。そしてスピリットサークルの補助強化を使うと、精霊、神力の加護を受けれる上に、セフィロトだけだと大雑把な陣引きが正確にできるのだ。・・・っ!?

やばい、神力が半分持っていかれた。

そして発動した途端に炎精は炎に、水精は水に、それぞれの元素に変わりあらゆるものへの加護を与えてゆく。そして陣が発動。セフィロトによる魔力が噴出。一帯を魔力で包み込んだ。

いくらマジックキャンセラーで作り出した現象でも・・・神の力には勝てないでしょう？

side out

side テオドラ

式典中にいきなりゆれだしたのだがどういことかココが崩壊するらしい！

アリカが独断で犠牲にしたらしいが馬鹿なことを！

そしたらいきなりアリスが「私に任せろ」といつてきた。何をするつもりだと見ておったが

見たものを信じられなかった。素質のあるものしか見ることのできぬ精霊が見えたのだ！

中位精霊、上位精霊ならまだしも精霊王まで出てきおった！本当にアリスはなにものじゃ！？
すると横でゼクトが

「・・・オリ・・・ジン？」

「オリジンとはなんじゃ！？ゼクト！」

「あの中心の精霊のことです。オリジンとは天地人の源流とも言える精霊・・・つまりとっても強くて凄いということです。」

凄くわかりやすい説明じゃのう、なんだかバカにされたような気がするが・・・

「アリスがチートということでもいいのかの？」

「ええ」

その後、次の詠唱を始めた。こんどはなんじゃ・・・？

【セフィロト】

確かに聞こえた、こんなに距離があり、尚且つ叫んでもいないのに
じゃ・・・

それにセフィロト・・・これなら知っておる！確かセフィロトツリ
ーのことで、生命やエネルギーを生み出すもの・・・だったかの？
確かそんなようなものだった気がするのじゃ！

隣を見ると驚くのも疲れて、呆れた視線を送るゼクトがおった、ジ
ヤックやナギも同様じゃ。

確かにあれを見たらあきれるしかないのお・・・

そしてそれから精霊たちが元素に変わってあらゆるものに加護を与
えた辺りから皆が一声もあげなくなった。皆見とれておった。ある
学者はいった、精霊は感情がなく”使う物”だと。間違いじゃな・・・
・力を貸してもらっておるだけではないか・・・それに感情がない
？あんなにアリスの周りを楽しそうに飛び回っているではないか。
その後に精霊たちが作った陣が光だしそこから濃い魔力（？）が噴
出した。　　っ！あれがセフィロトか！

ただ光出した陣も加わり、魔力が満ちた空間を悠々と踊る精霊たち
の神秘的なひと時が流れた

S i d e アリス

全てが終わった後に戻っていったら民から「女神様」だのなんなの
でモミクチャにされていた。

途中でリーザに救出され、アリカたちに挨拶して皆と帰った。

だけど挨拶のときに、ナギを見ながら悲しそうにしていた。

まあ理由はわかるけどね。

帰り道でゼクトを除くほかのメンバーから説明しろの視線が痛かつ
た。

あまりに視線が痛かったので「先に帰ってるよ」といってダッシュ
何か言ってきたが無視！突き進む！

ああーこれから先はどうなるかな。

どうやって解決しようかな。と言うかオスティア崩落を防いでもア
リカたちは【コスモエンテレケイア完全なる世界】に繋がっていて父王殺しをしたってこ
とで、処刑されるんじゃないや・・・？

「考えてなかったあああああああああああ！」

バサササササ！鳥が逃げ出す

「いやああ！助けてエルーー！！！！」

「んあ？どした？」

「っ!?!」

【神器製造】で『ガラドボルグ』を製造

「式の太刀【神・雷鳴剣】!!」

ズドギャアアアアアアアア!

「うおわあああああ! あっぶねえな!」

ガラドボルグはエクスカリバーと同じ「雷の激しい一撃」という意味がある。

故に風、雷との相性は抜群だ。・・・というより

「エル!?! なんでここに・・・、しかもいきなり後ろに出てくるから敵かと思ったよ・・・」

「お前が呼んだんだろう!?! リーザが呼んだら来てくださいとかいうから、きたんだぞ!」

「あ・・・ごめん・・・」

「まあいい・・・んでどうしたんだ? もう崩壊はとめたみたいだが・・・」

「アリカ救出考えてませんでした。どうか助けてください!」

ジャンピングDO☆GE☆ZA

「・・・お前バカだろ・・・そこから考えるだろ? 普通」

「・・・返す言葉もございません・・・」

「まあいいや、ほれ、父王の汚職書類、証拠もばっちりだぞ。」

「え”！？本当にあるの！？どんなご都合主義」

「お前が進行しやすいように調べてやったんだ、燃やしていいなら使わせていただきます」

「そうか、うまく使えよ？」

「うん！ありがとねえ〜」

「おう、んじゃ麻帆良でなあ〜」

そういつてエルは消える、転移陣の発光少なくなったね！

「さて、私も隠れ家行こうと・・・」

そして今私の前には怖い顔した【紅き翼】の面々

「えっとね・・・」

「ああ」

「・・・」

「・・・」

「ふう・・・わかったよお・・・」

「まず皆【鮮血の死神】知ってる？」

「誰だ？それ？」

「な！？お前知らないのか！？討伐連合隊の4万の軍隊を腕の一振りで全滅させたっていう冷酷、残虐な男だ！」

「むぷぷ・・・エルかわいそうwww」

「ふふふ・・・すががしいです」

「貴方達はその反応をするということは、そこまで悪人というわけじゃないですね」

「まあ腕一振りには本当だけど、基本向こうが攻撃してこないとやらないね、それに内面優しいし？口悪いけど」

「ツンデレというわけでもないですしね」

「男のツンデレなんかキモイだけだ！」

「今回だけはバカジャックに同意」

「てめえにバカって言われ「黙れお前等」・・・おう」

「それで、あれは？」

「ん、精霊王とかは偶然だよ、あれは精霊を呼ぶだけの魔法だから（多分私精霊に好かれてるから発動したら絶対くるよね。」

「そうなのか・・・ではあの【セフィロト】は？」

「あれは私の魔力の10分の1をギュギュっと凝縮したのだよ、基本私のオリジナル技は神話から似た現象、似た物からとってるから。」

「なるほどな」

「じゃあ次だ！あの翼なんだ！！！」

あーこれどうしよう・・・これ以上は嘘つくのは・・・私のハートが粉々になっちゃう・・・

「それは私が説明いたします「ちょ！？」」「お嬢様では説明し辛いですしょう？」「う・・・うん」

有無を言わせぬ迫力に押された・・・『大丈夫です。エル殿に言われた言い訳をいいますので。』
なら大丈夫かな？エル基本的にミスしないし

「お嬢様は神格者の先祖がえりなのですよ」

「「先祖がえり？」」

・・・こいつら本当にバカだな

「先祖の血が現代に色濃く出ることをいいます」

「「把握したぜ!!」」

「それで？」

「神格者はある一定の力を循環させると翼を具現展開することができ、その対数でその神格者の力量、神格がまります。ですが性質によっては翼が力を貯めやすいなどがあり、その場合5対なのに12対ほどの力を内包しているなどがあります。コレはお嬢様ですね、ちなみにお嬢様は歴代神格者のチートといわれています。」

「・・・そうだったのか、でもそれはかくすようなことなのか？」

「自由に移動し、少し力を込めただけで都市を破壊できるような化物を野に放って置きますか？」

「っ!?!・・・そうか・・・」

「まあそれだけならまだアリスお嬢様のような方なら殺されたりしません、不老不死・・・なのですよ、そして人は自分より長く生きるものを嫌悪します。ちなみに、私はお嬢様の家の属家で神格が現れた場合属家の一番優れた乙女を差し出すことになっていましたので、まあ私は永遠にお嬢様を愛でることができるので・・・ふふ」

「まあそのことで権力とか地位とかで強制的に・・・っていうのが嫌いになったの」

読みが凄い、凄いですがエル凄

「そうだったのか・・・」

「それで質問は？」

「特にないな・・・いやあえて言うならどれくらいのを食らえば死ぬのだ？先祖というからには死んでいるのだろうか？」

「肉体を残さないほどの攻撃」

「・・・むりじゃの」

「H A H A H A ! ! じゃあこのお話はここでおしまいね！後この話は誰にもいわないでね？」

「ふう・・・こんな話誰も信じませんよ・・・」

「同感じゃの・・・」

みんなごめんね・・・

・・・

あとあの崩壊事件から私は【精霊を統べる者（従える者）】と呼ばれるようになった

そしてオスティア崩壊事件から2ヵ月後、アリカ王女は父王殺しと【完全なる世界】と結託し世界の破滅を誘ったことにより【災厄の王女】と呼ばれ2年後に処刑されることとなった。

大戦終了時の設定（前書き）

はい、今回は大戦終了時の設定です。

アリスオリジナルですが、まとまり感がなかったので、今までののは未完成、

決戦前に完成した、という設定にしました。

大戦終了時の設定

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} 暴走時…零崎 狂夜
なぜ識が付いていないのかは後々邪神が説明してくれます。

身長…150cm いくかいかないか 暴走時182cm

体重…「【神力半開放】 【黒翼20対】 【——炎よ 闇の淵より来る全てを食らう邪の炎よ 全てを貫く槍となり 敵を貫け】 【黒炎の死槍】」ぐおおおおおおおおお！

一人称…「私」暴走時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く白い髪を持ち陶器のような肌ととても可愛い顔、だが怒ると、暴走状態になり元の京夜の姿に戻る。左目が黄色で右目が青（左目が天眼 右目が直死となっている）

性格…（夜のみ）DM。そして周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので少し泣き虫になってきている。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜DS

年齢…12歳 暴走時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力で神力は”邪神の加護”により得た。神力の総量はエルの10分の1たとえると京たちの次元の神全員をあわせても足りないほどで、

エルの規格外がよくわかる

身体能力…通常はラカンと同等程度、剣術はもはや神の領域になり、剣だけだったらエルを一方的に切り刻める

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象を引き起こすものでさえ殺せる

天眼…使用時黄色から金色に光る。攻撃の軌道、どれほどの力がこめられているかがわかり、使用中は身体能力が3倍ほどに上がる

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない（麻帆良までの準備期間で使えるようになる予定）

音使い…兵士達を操作するときなどに使っていたので最強レベルでなければ防げないほど

ガンダールブ…よく楽器などをみんなの前で演奏する、その腕前は加護と合わさって神の領域。

武器は主に剣とペシユカドしか使わない。

容姿を好きに変えられる…変えようとがんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…戦争に参加するようになってから使うことに躊躇がなくなつてよく使うようになった

能力を作る能力で作られた能力

【武器製造】武器を製造することができる。通常の武器、宝具、魔装器、なんでもござれのチート。しかし扱う本人を超えるものはその力を行使できない。例）アリスの魔力半分を詰めた【闇黒刀】をエヴァに渡したとしても扱うことができない、ただの刀としか使えない（ただし強度はやバイ）

【神器製造】神器を創造できる、製造には神力を使うが元々総量が多いため全ての神器を作っても問題ない、だが常備していると世界が変わりやすくなってしまいためアクセサリや宝石などに変えてワードで発動するようにしておく、だが京はメンドクサイので消してまた製造を繰り返している。

【境界を操る程度能力】東方のお姉様から参考にした能力、そのまんまでスキマを作ることができる。仕様用途は移動のみで、物の中に入れて保存はできない。

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより上のレベルで使用可能。

咸卦法・極…神力を除く全ての力を混ぜ合わせた秘奥義。

咸卦法・神…極に神力を混ぜたもの。はっきり言ってチート。エルの20%をギリギリ倒せるレベル

アリスオリジナル 【人に恵みを与える神の炎】 【全てを燃やす始原の炎】 【平等に照らす神の光】 【愚者を滅する裁きの光】 【全てが凍てつく天・（魔）の霊氷】 【この世に豊穣・（災厄）をもた

らす平和・（滅び）の風】【全てを包み込む優しき闇】【全てを塗り潰す破滅の闇】で構成され、使用する属性を詠唱する。詠唱は補助・強化は前者、攻撃などは後者を詠唱、その後に言霊・・・【罪を繰り返す愚かな者に捌きを】などを言い、魔法名を言うことで、発動できる。10分間なら唱えた後に溜めておける。その間の戦闘は可能で、新しく唱えた魔法との2連も可能。決戦前に唱えていたものの未完成という設定で、決戦前にちゃんと決めようと作った

テイルズ技…その殆どがアレンジされており、自分に合うように詠唱、技名を変えている。だが実際使ってみると予想外のことが多数あり前途多難、スピリットサークルなど・・・ちなみに【セフィロト】もテイルズでシンフォニア(?)の没技

武器、神器製造で作ったもの

ペシュカド…ペルシャと北部インド固有の短剣で、ペルシャではカルドと呼ばれている。刀身は鏢元あたりの断面はT字型になっており、刀身はS字型に湾曲している。片刃で先端は鋭く尖り、湾曲した刀身は甲冑を突き刺し、自然とえぐる事ができるよう、適した形をしている。柄は重めに作られることが多く、象牙などで装飾されている。切っ先は両刃である場合や、キリのように丸く加工されているものもある。本来は投げれるものではないが、そこはチートボデイ！作るときに能力を付与している。

【黒炎】…すべてを燃やし尽くす炎に変わる。

【追尾】…アリスが命令したら追尾する。命中してから黒炎は鉄板、捕まえるだけなら足に当てる

【不治癒】…その名のとおりでアリスが許可するまで回復できない。

刀…切れ味が良く折れない・・・だけどただそれだけ。

アイギス…翡翠色の障壁を作る。製造時は神力だが行使は魔力ででき、転生者の攻撃を防いだときは魔力に枷を付けていたため壊されそうになった。前方、後方、全方、他者への使用、なんでもできる。だが使用範囲は500mと超人バトルでは少し狭い。

ガラドボルグ…形状は十字型で切れ味は抜群、勢いをつけなくても鉄鋼をバターのようには切れる。

その伝承とおりに雷、風との相性がいい。そして魔法媒介としてもつかえる。さすが神器

【雷倍増】 その名のとおり雷系統の威力が上がる

【風倍増】 ” 風 ”

【不壊】 絶対に壊れない。壊れるとしても製造のとき異常の神力を加えられたとき、実質エルしかできない。

名前…エルティアス

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在った

ことにより負がなくなり子供から好かれたり、普通に恋愛対象になったりするようになった。ブチ切れる要素は、母親、恋人、京夜

年齢…1億あたりから数えていない邪神になったのは2千万歳あたりなのでそれからずっと一人ぼっち、なので京夜を殺そうとするとブチ切れる。ならばエルからと手を出すと京夜がブチ切れるので打つ手なし

武器は自分の神力を100年つぎ込んだ【魂喰い】と【神喰い】で神と戦うときだけ【神喰い】を使用する

ソウルイーター

ゴットイーター

この頃出番が少ないのでいじけている。・・・おや？誰か着たようだ

名前…フリージア　アリスが前世好きだった花からとった
花言葉は「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」「期待」「純潔」
「あこがれ」

身長…172cm少し背が高いが夜アリスを抱くときにアリスを苛めやすいので気にしていない

一人称…私

容姿…美しい紺色の髪でところどころに赤色のメッシュが入っている、光が当たると神々しく美しさを放つ、陶器のような白い肌と、美しいボディーライン、体の全てが美しい、

性格…（夜のみ）超ドS、通常はノーマル

年齢…20歳ほど（魔法球に入っていたため）

能力…アリスの80分の1程度、神力は仮契約による強化時のみ。
能力が上がっているのは邪神仕様のため限界がない。

身体能力…アリスより少し優れている。魔法を使ったり殴ったりする中距離が得意

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより一つ下のレベルで使用可能。霊力・妖力があるが4つの制御ができないので極の行使はできない。

アリス直伝オリジナル魔法。 【全てを燃やす始原の炎】 【平等に（全てを）照らす神の光】 【全てを（が）包む（凍てつく）天・（魔）の霊氷】 【この世に豊穰・（災厄）をもたらす平和・（滅び）の風】 【全てを包み込む優しき闇】 【全てを塗り潰す破滅の闇】で構成され、使用する属性を詠唱する。詠唱は補助・強化は前者、攻撃などは後者を詠唱、その後に言霊・・・【罪を繰り返す愚かな者に捌きを】などを言い、魔法名を言うことで、発動できる。10分間なら唱えた後に溜めておける。その間の戦闘は可能で、新しく唱えた魔法との2連も可能。威力はアリスの10分の1

この頃体重が増え「【――全てが凍てつく魔の霊氷】 【――罪深き者に死は生温い】 「――ならば与えよう永遠の苦しみを」 【――透氷に生き狂え】」

【永苦氷棺】アフソリユート え！ちょ！？まってくだスキイイイイン！！

「はい！アリスですココから先は作者が不在なので私がやっていき

ますね!」

「元氣無邪気なお嬢様・・・ふふふ・・・」

名前…転生者

身長…元の姿は185cm

体重…元の姿は48kgという脅威の体重!、本当に皮と骨だけだったんだけど、ご飯はドンブリ3杯食べるという大食っぷり!、おかしいと思い病院にいくが健康体でなんら問題なしだったんだって

一人称…俺

容姿…元の姿は醜・・・醜くて、そのままガリ・・・ガリオタでした

「転生者がかわいそすぎるよ、作者」

性格…自己中心的で、力を貰い自分は選ばれたものだ、その自分に仕えるのが幸せだと本気で思っていた、

「・・・ごめんやっぱりカワイソウじゃないや」

能力…【黒箱】この中に閉じ込めて閉じ込めた相手の力を自由に使える、但し一人のみ

【憑依】同姓の体に入ることができる。そのためライフメイカーに入れず黒箱に閉じ込めた。

後半ライフメイカーを早く出したい作者にめんどくさがられて簡単

に殺された哀れな転生者

大戦終了時の設定（後書き）

はい、くるみいです！ここまで呼んでいただきありがとうございます。

ここからアリカ救出、京都へ・・・そして詠春宅と一緒に暮らせようかと。

詠春とはくつつきませんよ！？オールGLです

11／5 18..25 炎の補助呪文が書いてないと教えていただき修正しました。

11／5 22..37 零崎に識が付いてない、という感想がありましたので追加しておきました。その設定については麻帆良への準備期間で明らかに。

ナギの気持ち（前書き）

——キングクリムゾン——

そして短い!!

ナギの気持ち

アリカが捕まってからもうすぐ2年、もうタイムリミットは2週間を切っている

「もう一週間切ってるっていうのにナギはまだ決心がつかないの？」

私はこの間ずっと戦争の被害にあった場所に赴いて鎮魂歌、傷の治療、食料の配布、孤児の孤児院へ送る、楽器の演奏、復興の手伝い、復興金の寄付、復興金は10万ドル単位で被害状況によっては800万だしたところもある。

何故そんなにお金があるかというと・・・私の能力を思い出していたきたい。とはいっても武器じゃありません。転移符・治療符・治療杖・治療薬など、治療薬は軽症から腕の欠損まで。そして・・・

死の淵から戻すといわれているエリクシールやエリクサーなどを市場価格が変わらない程度に売っていたのでお金はアメリカの国家予算の2倍ほどの個人資産がある。エリクサは魔力回復、魔法媒介にもなるのでエリクシールより高価だった。

「そう言うな。万が一失敗すれば良くて元老院、最悪世界を敵に回すかもしれん。そうなのはアリカ王女を救出しても意味がない」

私の問いかけに詠春が答えてくれるが、世界を敵・・・？今更過ぎて呆れてくる。

いい加減私のイライラも振り切れそうなのでナギに言葉をぶつけるでしょう。

「ナギ！ あなたいつまでなやんでるつもりなのかしら？」

椅子に座りだんまりを決め込んでいるナギに発破をかける。

「・・・アリス・・・俺は・・・」

・・・こいつ・・・戦争中バカみたいに騒いで皆に迷惑掛け捲って
国に喧嘩売ってたりしてたのに・・・いまさら何考えてんのかね・・・
？温厚（？）な私でもイライラするんだよ？

「ナギ、あなた・・・アリカを助けたくないの？ ああ、それともアリカなんかどうでもいいのかしら？ 見捨てるの？」

こんなこといいたくないけど、能力で喋らせるのにコレくらいは必要なんだよね。

【能力創造】 【言霊行使】

「・・・」

いまです！！（某策士風）

「”気持ちを隠せない”」

はじめて使うからわからないけどこれでいいはず・・・？

「そんなわけねえだろうが！！俺だって”アリカ”を助けたい！見捨てたくない！だけど腐っても俺は【紅き翼】のリーダーなんだ！アリカを助けにいけば世界を敵に回す！俺一人の行動で他の奴等に

まで迷惑がかかっちゃう!!」

・・・うん通常なら涙流して「ナギ・・・そんなに私たちことを」とかやるんだろね・・・だけど・・・

「「何を今更言ってるの(んだ) (のじゃ)！バカナギ(馬鹿弟子)！！それは戦争中に言っ(言え) (言ってくれ) (言うのじゃ)！！！！」」」

私達の心の声にナギはキョトンとする

「アリス、貴方結構悪趣味ですね・・・言霊で、強制的に！無理やり！！言わせるなんて」

「ロリコン、その程度ではお嬢様は泣かなくなりましたよ。」

「あっはは！！確かにナギは迷惑かけまくったからな！！」

「「「ジャックもよ(お前もじゃ) (お前もだ)！！！！」」」

それにしてもアルにリーザめ・・・リーザのこと2日無視してやる・・・ああ・・・夜が酷くなりそうだからやめておこう。

それに私は「気持ちを隠せない」って言ったただけだもん！私悪くない！まさかあんな大声で返してくるなんて思ってたけどね。とかいうかよくあそこまで自分を殺せたなあ・・・

「ナギ。もう皆はアリカを助ける気にいるわ。最後のボタンを押すのは貴方よ」

「・・・・・・・・オレはアリカを助きたい。頼む。力を貸してくれ・
・」

そういつて私たちに頭を下げてくる。

「恋が叶わない事ほど辛いことはないですからね、私も手伝いまし
よう「んな!?!?!」

「え・・・まさか隠してたの?」

「ハッ。今更なに照れてんだよ。皆気づいてんぞ!」

「そうですよ。ナギ」

「皆アリカ王女を助けたいと思ってここにいるんだ。断るはずがな
いだろ。そして隠してたつもりだったのか?」

「お前ら・・・ありがとう・・・つかココは「俺が好き」なのは関
係ねえだろうが!!」

「んじゃー作戦会議するからこっち集まれ」「おい!!」

作戦会議

——そして今会議中——

「さて、決まったのはいいがどうやって救出する？」

「そうですね・・・下手に手を打てませんかね」

まあ・・・父王の書類あるんだけど・・・少し考えたんだ・・・エル、皆ごめんね、原作どおりでいくよ・・・

「じゃあさ、処刑時にナギ救出！告白！キャーウラヤマシイーてな感じでいいんじゃない？」

「ですがそれだと私たちに火の粉がかかってしまいます」

「じゃあ、生放送でケルベラス渓谷から飛び降りたところをナギが確保。そして告白！キャーウラヤマシイー

そしてイライラをぶつけるために皆で周りの奴等フルボッコ！」

「そうですね、それなら私たちにも疑惑がかかりませんし、アリカ様も死んだことになるので大丈夫ですね。それに全滅のことも新種の魔獣が来たとかデマながせばいいでしょう」

「そうだね、でもそうしたらMMは私たちを英雄に担いで担いで担ぎまくるよね。

はあ・・・それで芯の通ってない正義バカが大量生産されるのか・・・」

「仕方ないですよ。それに貴方の信念は・・・」

「知らぬ99より知る1を・・・わかってるよ・・・だけどやるせないね」

「そうですね・・・」

と私が終わった後のことを予想して話し合っていると

「けどよ、ケルベラス溪谷って魔法使えないんだろ？どうやって助けるんだ？」

とナギが言い出した

「そこは私のチートで・・・」

【能力創造】！ 【絶対視の魔眼】そして発動！

「この魔眼があれば・・・ね」

「なんだ？その眼」

「絶対視の魔眼、見ようとすれば全てを見ることができる魔眼よ。
私が”今”作った」

「魔眼を作れるってお前・・・いやお前ならできるか」

「なんか呆れられた・・・」

「見て何かあるのか？」

「私のこの青い眼のほうは直死の魔眼って言ってね、こうやって・・・」

ペシユカドを創造して、線をなぞる。

「発動したときに見える線をなぞるとその物を殺せるの。点も見えてそれをさすと一撃」

「・・・・・・・・・・ははは・・・もうなにもいわないさ・・・（遠い目）」

「もうアリスについては驚くのも疲れましたね」

失礼な・・・

「まあセッティングはガトウ、タカミチ、まかせていいかな？」

「ああ、任せておけ」

「はい！」

書類は終わった後にクルトに渡して少しずつ老害を処理してもらおう。

・・・多分恨まれちゃうなあ・・・でも私は自分の選択に後悔しない、絶対に・・・絶対に。

「さてと・・・私も気持ちに答える準備しなきゃね・・・待たせちゃったからなあ・・・指輪でも作ろうか？ふふふ・・・驚く顔が見てみたいな」

作戦会議（後書き）

はい、やっと次回アリカ救出！

思いつきりご都合主義ですね！だがそれが、くるみいくおりていー！

そして最後のセリフが何か皆さんもわかったでしょう。楽しみにしててください。

あとタグにハーレムを付けるの忘れてるという意見をいただきました。た。

完全に忘れてましたので教えていただきありがとうございます！

閑話2 リーザの2年間

私は今、オスティナにある【お嬢様を愛でる会】の総本山にきています。

私がここに来た理由はお嬢様のことを追い回している”蟲”が居ることなのでその情報を取りにきました。

「それで、その不審者の身元はわかりましたか？」

「わかりましたよ会長、元老院の一人、幼女に攻められるSMプレイが大好きな変態爺です。」

「・・・そいつの自宅を教えなさい」

「はい。ここです」

そういうと会員が私に住所の書かれた紙を渡してきた

「それで、会長・・・報酬のほうを・・・」

「ああ、そうでしたね、どうぞ・・・この世に5枚しかないお嬢様の寝顔＋お嬢様の寝起き姿の写真です！！」

「こ・・・これが・・・！！！！アリスさま・・・愛らしいです・・・一度でいいからセラス殿みたいにハグしてみたい・・・」

「それはいくらなんでも許可できません！」

「うう・・・写真だけで我慢します・・・。それに皆アリス様を崇

拝してますからね・・・不敬なマネはできません。アリス様はこういう態度を嫌がると思いますが・・・やっぱり直せませんね」

「お嬢様はご自分を軽く見すぎなのです・・・あの可愛らしく儂げな容姿に加え、あの全てを包み込むような優しき性格、ですが身内に手を出すものは許さない絶対的な信念。コレを一言で表すならば・

」

「お嬢様は「至高・・・ですか？」

「ええ、わかっているようです。そしてそのお嬢様をイヤらしい目でジロジロと見るだけでなく、ストーカー紛いのことをするとは・・・生かして置けませんね。お嬢様の信念が「見知らぬ9より見知る1を」ならば私の信念は「お嬢様に害なすものを滅してお嬢様に永遠に使えること」ですよ」

いやらしい目で見てしまうのは仕方なきことです。私もしてしまつて、しかも襲ってしまったのですから。アレから何回も押し倒してしまっていますしね・・・

「ふふ。情報操作はこちらでやっておきますね」

「まかせました」

ふう・・・さて”蟲”狩りにいきますか・・・

ちなみにこの時【アリスお嬢様を愛でる会】は旧世界にも進出し、

その総人数は7億を超えていた。
そしてこの会の鉄則が【お嬢様の害なることをしない、コレを犯したものは死に値する】というものがある。そして、ナンバーは1~100まで与えられ、リーザのアリスお嬢様への忠誠愛度感知能力による忠誠愛の高いから、1⇒2⇒3 となっている。ナンバーを与えられているものは直接リーザの指示を聞き動く役割を果たしている。

数日後ある一人の元老院議員が惨殺死体で見つかった。恨みのある者と考えて調査が進められたが一步を進展せずそのまま迷宮入りとなった。

別談だが、雇われて、ストーカーをしていたカメラマンや傭兵だが、依頼主が元老院ということと「お嬢様の従者」としての顔もあるの
で、今回”だけ”は不問としたところ「何故許すか」という質問で
「アリスお嬢様は安易には人を殺さないで私もそれにしたがっているだけです」と答えたところカメラマンと傭兵たちが感動し総勢53名が【お嬢様を愛でる会】に入会した。

リーザの2年間はそんな感じであつたとさ

アフリカ救出とダブルプロポーズ

さて、私はいま峡谷の中腹に浮いています。

死の線を切ってみただけだけど30分しか持たないらしいね。まあそれだけあれば問題ない。

ラカン達は上で、ナギはすぐにたすけに行けるように準備している。そして私はいつでも”殺せる”ように準備している

そして上が騒がしくなってきた。そろそろ始まるようだ、ナギに目で合図を送る。

【――魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに『死の谷』】

元老院議員の一人がこれから行われる処刑法を説明する。

内容はこの処刑法が如何に残虐かを語り、目的は死刑囚に恐怖を与えることのようなだ。

そしてその説明も終わり、処刑（茶番）の時間がやってきた

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

アフリカ王女は一步一步と自らの足で死に向かって着実に歩いて行く。

そして最後に愛する人の名前を――

「さらばじゃ。ナギ・・・そなたを・・・愛していた・・・」

最愛の者の名を口にし、足を踏み出し重力に身をゆだねる。

そして谷底から響く魔獣の咆哮が響き、処刑の完了を知らせる。

「よろし……」

「よおーっし。こんなモンだろ♪」

「そうですね、お嬢様がいないのですから、これ以上撮る価値などありません」

何か指示を出そうとした元老院議員の台詞に兵士の言葉が重なる。

「無礼者！ 何者だ貴様。名を……」

「おっさん」

兵士は元老院議員の頭をガツシリとつかみ、そして告げる。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？」

元老院議員に対しこのような態度を取る者。尚且つこのタイミングで現れる者。

頭を掴まれた議員はすぐにヤツらだとわかったようだ

「貴様らはッ・・・!？」

「ぬんっ」

と、掛け声と同時に兵士の鎧が弾け飛ぶ。

「【千の刃】の……じゃ、ジャック・ラカンに【断罪の女神】ギロチン マリアのフリージア!？」

議員の予想は的中した。それも考えうる限り最悪の形で……。

そして処刑場にはまた新たななどよめきが生まれる。

ラカン、フリージアに続き詠春・アルビレオ・ガトウと大戦の英雄が集結したのだから。

「バカなっ!・・・だが! 　いかなサウザンドマスターとはいえあの谷底から生きてh」

「それはどうかな？」

2回に渡りこの議員の台詞はまたしてもラカンに邪魔された

「俺等に足りないやついるだろ？」

「【精霊を従える者】か! 　しかし、同じことだ。どれほどの力をもっていようと、化物であろうと魔法も使えない小娘になにがd」

「ハッハハハ!」。それがどうしたア!？ 魔法が使えない?!そ

んなものアイツにとっては些細な問題なんだよお！」

「そうですね。そしてお嬢様を”小娘”呼ばわりとは・・・殺されたいようだな・・・？」

3回目。どうやらこの議員は最後まで台詞を言えない星の下に生まれてきてしまったようだ。

「ああ・・・アイツが自分でこういえてよ「私は【平等なる死】」だとよ？」

——其れは全てを包み込む優しき闇

「!?!? なん」「そろそろですね。」

これで4回目、そろそろかわいそうになってくる。

——その闇は空を包み静かな夜を映し出す

——【常闇】——

すると突然空が闇に包まれ、夜のような状態になった。誰がどこにいるか、気配でしかわからない。

同時に私が先行し、その後にナギがアリカを乗せて峡谷から飛び出る。だが、魔力の光で闇にポツカリと二人が浮き上がる

「なん・・・だと!?!? なぜ魔法が使えr」

「黙ってろ！」

メキィ！ 5回目にして、ラカンが空気の読まない議員を殴り飛ばした。

『リーザ、ちょっとこちらに来ていただけますか？』

『？はい、わかりました。』

【神力全開放】 【白翼28対】

【スターダストリヴァリエ】！！

七色の光が常闇の空に輝き

七色の光を放ち

破裂し

その破片が七色に輝きながら広がり

また七色の光を放ちながら破裂する。

そしてその中で

「アリカ・・・俺はお前のことが好きだった」

「なっ！？・・・・・・”私”も、だ・・・」

「なあ・・・結婚しようぜ？」

「・・・いいのか？」

「ああ・・・」

「・・・ありがとう・・・」

泣きながらアリカが「ありがとう」という

「俺こそ・・・だな」

あれ？なんかナギが少し大人になった・・・
じゃあ私のほうも・・・

「フリージア」

「はい？なんでしようk んむ！？・・・ん・・・ふぁ・・・」

こっちによってきたフリージアの唇を少し強引に奪う。私たちは浮いているので背の高さは問題ない。

「ふふ・・・返事待たせてごめんね？私もリーザのことが好きだよ・・・結婚しよう？」

「・・・へ？え？あ・・・はい！」

「はい、これ私の指につけて？」

そういつて【アリスダイヤモンド】の付いた指輪を渡す
そして私の持っている【リーザダイヤモンド】の付いた指輪をリーザの左手の薬指にはめてあげる

その後にリーザが私の左手の薬指に指輪をはめる。

「フリージア、私と一緒に生きてくれる？」

「はい・・・未来永劫・・・貴方と・・・」

「おお！？ナギたちは予想してたが、壊ちゃん達は予想外だぜ！？」

「これは、わしも予想してなかったの・・・よく夜に声は聞こえていたが・・・」

「ああ、あの声は情緒が不安定になるな」

「まあコレでハッピーエンドってか？」

「アリスの受け売りだがの、「戦争の英雄にハッピーエンドはない」だそうじゃ、まあ「幸せを決めるのは自分自身」とも言っておったがの」

「まったく、どっちだっつーの」

「ふむ、それよりこいつはどうする？」

そこにはラカンの一撃によって顎の骨が碎けてダウンしている議員が居た。

「ほっとけ・・・おい！？つかあいつ等俺達おいて帰る気かよ！？」

「追いかけるぞ！ゼクト！ガトウ！いくぞ！」

「ふう・・・仕方ないの・・・」

「はぁ・・・最後はいつもどおりか」

私は隠れ家に帰ってきてからナギとアリカに声をかけられた。

「なあ、俺達にも指輪作ってくれねーか？」

「? いいけど何で私？」

「いや、自分で買ってもいいんだけどよ、やっぱり仲間を選んでもらおうと思ってよ」

「私はいいけどアリカは？」

「私も同じ意見だ」

「あれ? しゃべり方変わった？」

「ああ、ナギと話して普通のしゃべり方を心がけるようにしたんだが・・・変か・・・？」

「いいえ、自然でアリカにあってると思うよ?」

そういうとホッとしたように

「そうか、よかった」

「んで? 作ってくれんのか？」

「ええ、いいわよ? 親友の頼みだしね、それより宝石はお揃い? それともそれぞれを象徴したような宝石?」

「象徴した宝石で頼む」

「了解、ちよつとまってる」

私はそういうと自分の宝石を作ったときに創造した【物質創造】で宝石を作り出す。

ちなみにどれだけ試しても食料を作ることはできなかった。

トリコのジュエルミートとか食べてみたかったのに・・・orz

ダイヤモンドを原型とした紅色に発光するダイヤモンドと黄色に輝くダイヤモンドを作った。

ダイヤモンドは「征服できない、懐かない」なんていう意味があるからちよつどいいでしょう。

そしてオリハルコンでリングを作る、装飾は私たちと同じでいいよね？

シンプルなリング型に設置台が渦を巻くような形だ。

はい、これで完成。これ簡単にやってるけど神力を神器を作るときより使う。やはり加護をつけているからだろうか？

ちなみにナギたちの宝石には【絆の光】を付与している。宝石の発光がなくなったら、そのとき二人の関係がなくなったということになる。

宝石の名前は【ナギダイヤモンド】に【アリカダイヤモンド】ってところかな。

「宝石の名前は【ナギダイヤモンド】に【アリカダイヤモンド】っ

てところかな？はい、ナギにはこっち、アリカはこっちね」

そういつてナギに黄色のほうを、アリカには紅色の指輪の渡す

「それでその指輪を左手の薬指にはめてあげて？」

「「わかった」」

「じゃああとは二人でどうぞ・・・」

ふふ・・・まあ後は・・・お楽しみください？

さて、私もリーザとイチヤラブしよ〜今まで抑えてたからね・・・
でも受けは私なんだよね・・・
今日は防音障壁必要になるね・・・

アフリカ救出とダブルプロポーズ（後書き）

ははは！！なにい？やりすぎ？きこえんなあ！！！！

【アリスダイヤモンド】無色透明で発光している。ナギ達と同じ【絆の光】を付与している。

【リーザダイヤモンド】澄んだ紺色で、髪と同じようにところどころ赤色のメッシュが入っている。コレも同じく発光している。以下
同文

他にも【全精霊王の加護】【一心同体】などが付与されている

加護はその名のとおり全属性が強化され、精霊がいつもより力を貸してくれる。

これは二人の指輪のみ。

一心同体は、遠くに居る相手がどこら辺に居るのが大体把握でき、近くに行けば行くほど鮮明にわかる。考えなどがわかるのはプライベートに関するものでそこはできないようにした。

ほのぼのな日常

あれから数日経った、アリカは死んだことになったらしい。

そしていきなり詠春が

「お前等、暇なら京都にこないか？」

なにをいきなり

「どうしたの詠春、いきなりそんなこというなんて」

「面白そうじゃな、だが新世界の者がいけるのか？」

「そこはアリスがどうにかできるんじゃないでしょうか？」

ちなみに一番最後のはリーザで私のことをアリスと呼ばせている。
結婚してお嬢様というのはおかしいので名前で呼ばせた。

そして名前を呼び始めてから口調も少し崩れてきてフレンドリーになってきている。

だが、前の棘々しさがなくなったわけじゃないけど。

「んーやってみる」

そういつてラカン、アリカに神力を送る

「あ、できちゃった」

「「「「「.....」」」」」

「さすがアリス・・・」

「あら？ ご褒美にキスでもしてくれるの？」

「くす……してほしいの？」

いままでできなかった分ナギに対抗してずっとイチャついている私たち

「やめい！それでいけるなら行かないか？そろそろ俺も帰らなければ、婚約者も待って」「」「」「ええええええええええ！！？」」

「」」」なんだ・・・？」

「いや……なんでもないよ? うん」

「お前みたいな女好きに婚約者が居たとはな!! 一番最後かと思つてたぜ!!」

「世の中は不思議なものじゃのう」

「タカミチ、これが世界の神秘というものだ」

「な・・・なるほど」

「私的には未来タカミチもそうなる」と予想する」

「え、
！？」

「お前等……俺を何だと思っているんだ!？」

「「「「女好き」」」」

「・・・もういい」

クイクイ

「うん？」

「・・・お腹すいた」

「ああ、もうそんな時間？あすなんがご飯だってさゝ詠春」

「ん？ああ、だったら今日は前にも美味かったし鍋にしようぜ！！」

「あ！それいいね！」

「・・・なあ少し思ったんだが、万能チートなアリスが料理作った
らヤバイくらいうまくなるんじゃないか？」

きた！いつか来ると思っていたよ！この瞬間・・・！

「「「・・・アリス（！！！！）」」」

ナギとラカンとアスナが目を輝かせて聞いてくる、アスナの目に光
！？・・・期待を折るのは心苦しいけど・・・

「あー・・・私ね・・・なぜか料理すると外は黒焦げ、中は生々な
物質ができるんだよ・・・」

「……え？ 万能チートなお前が料理ができない！？」

「新しい発見だ……こんな弱点があつたなんて……」

「
・
・
・
残念」

「じゃがこいつのことじゃ、料理を教えたらまた、超一流が裸で逃げ出すような料理を作れるようになるんじゃないかな」

多分そうだろうね。邪神の加護は伊達じゃないと思うよ。

「それだったら俺の実家に行ったとき習うといい、腕のいい料理人がたくさんいる」

「わかった……ああ!! そうだ! 京都ならさ! 詠春!」

「ん？」

「曲弦師いない！？習いたいんだけど．．．あ．．．やっぱりいな
いるぞ」

「紹介してええええええええええ！！！！！」

「ちよ・・・！わかったから離れろ！！お前の嫁が怖いんだ！！離れろおおおお！！！！」

新婚旅行とスクナ復活！

私達【紅き翼】^{アラルブラ}にアリカとアスナを加えたメンバーは京都に来ている。

詠春に誘われたから来た、というのもあるけど私とリーザは日本で過ごすことになるので、日本文化の結晶とも言える京都には前々から来ようと思っていた。

そしてナギとアリカ、私とリーザの新婚旅行も兼ねている、というかコレが本命。

「おお・・・ここが旧世界の国か・・・風情があるな」

「そうですねえ・・・新世界とは違う風情です。」

上がアリカで下がリーザ、私以外への硬い言葉は癖のようで、だが全てというわけではなく柔らかい言葉と硬い言葉が混ざった感じだ。まだ慣れていないのだろう。

「そうだろう？　つとここが清水寺だ、ここは飛び降りるやつがよくいて住民に迷惑を・・・ってお前等なにやってんだ！！！」

このバカ二人は・・・あつ

「ナギ、アリカが少し呆れてるよ？」

「ピク」冗談に決まってるだろ？　詠春、アリカ。本当にやるわけねーだろ」

「お前完全に尻に惹かてんなあ！！！！」

そういつて飛び降りようとするジャックを

「アンタは少し自重しなさい」

神鳴流 我流奥義 【零閃・一瞬千撃】

キキキキキキキキキキキキン！！甲高い音が連続で鳴り響きジャックを切り刻もうとする。

「うお！？【筋肉防御】！！」

すべてあのアホみたいな筋肉で防御される。戦闘なら切れるのに・・・手加減してないよ？・・・ネタに関することはバグを超えてチートだね。

「はあ・・・それより飛び降りたらお酒抜きね」

「じゃあ先いこうぜ」

「てめえは餌付けされてんじゃねえか！」

「んだと！？やんのかごるあ！！」

チャキツ 私が刀を構える

「「詠春く先いこうぜ」」

「はあ・・・ええ行きましょう」

そして今呪術協会本山へ向かっている

ナギとアリカはくっ付いてピンク空間を作って皆が呆れて、助けを求めて、

砂糖を吐き出してしまいそうな甘々空間を展開しているこっちを見て顔を引きつる。

「4人とも・・・人目があるんだ・・・もう少し抑えてくれ」

「「「やだ」」」」

ナギ、アリカ、リーザ、私の言葉が重なる

「もうイヤだこいつら・・・」

「別にいいじゃろ、しかし、アリスとリーザは風当たりが強くなるかもしれないの」

「ああ、旧世界はあちらと比べて同性愛については否定的だからな」

「ふう・・・愛があればいいだろうに・・・」

「ガトウが言うとは異常に説得力がありますね・・・っとそこのお嬢さん？私とお茶でも・・・」

「え・・・あの・・・」

「お前はなにをやっとるか!!!!」

ガトウがそういつて居合い拳を4発打ち込んでふっとぼし

「すまなかったな」

「あ、いえ。失礼します」

そういつて少女が歩いていく。

「愛があればいいのでしょうか？でしたら「犯罪は別じゃろ」

はあ・・・本当にアルは・・・

「おーいこの階段上ったところだってさあゝ」

「よし、ナギ！競争すっぞ」

「お、いいぜ！」

「んゝじゃあ景品はこの芋焼酎で・・・」

そういつたら

「ふう・・・貴様等にはゆずるわけにはいかんの」

「貴方達には譲りません」

「咸卦法はアリなのか？」

「し・・・師匠!? ア・・・アリスさん何故皆さんこんなに・・・」

「ああ、コレね私の神酒なのよ、凄くおいしいのよ? まあ元々は1本2~3万の芋焼酎だけど」

「元々も結構いいですね!？」

「そうかしら? 私の資産がアメリカの国家予算の8倍まで膨れ上がってるんだよね?」

「なんでですかぁー!!!!」

「リーザが私のぬいぐるみやら、プロマイドやら、売りに出したらしいよ」

「・・・ああ・・・そうですか・・・」

「それで? ルールどうなのじゃ?」

ああ、そうだった

「じゃあ一番先に着いた人が勝手で肉体強化はアリよ、そして妨害は回りに被害がない程度、出した場合は即失格」

「なに!? だったら俺は妨害できねえな、周りふっとぼしちまう」

「俺もだな・・・このルールだとガトウとお師匠様が有利だな」

「じゃあ行くよ? れでい・・・」

皆肉体強化を施す

「ーーー」 「ゴファ」

そして皆いつせいにスタートする、そしてリーザが吐血した。うん私も自分でやって恥ずかしかった。

「じゃあ上ろうか」

「はあ・・・私をおいていくとは・・・ナギのやつめ」

「まあ、いいじゃないですか、口緩んでますよ？」

「むう・・・」

私たちは談笑しながら後を追いかけた

そこで、現在私たちは近衛家、つまり関西呪術協会に來ている。
・・・だが・・・

「きゃあああああ！！！！アリスさまがきたあああああああ！！！！」

な・・・なに！！！！？

「ああ・・・この巫女達は【アリスを愛でる会】に入っているよ
うですね」

「なんと・・・ってうわあああああ！！！！ちょ・・・ま・・・！！ふあ！？ちよっとお！？

なんで巫女服！？ちょ！リーザ！HELP！ってなんでリーザまで着替えさせてんの！？せめて部屋で！！男の前で脱がすな！！」

ちなみに勝者はガトウ、最後にゼクトを踏みつけてゴールしたそう
だ。

「むう・・・！わしを踏み台にするとは・・・」

「いいところに居たお前が悪い」

「・・・なんかガトウ黒くなってる」

「誰のせいだと思う？」

「・・・さあ？」

多分私かりーザかな

「うう・・・私はもうお嫁に行けない・・・」

「もうきているじゃないですか」

まあそうだけどね？

そして、詠春の帰還と【紅き翼^{アラルフラ}】の来訪で大宴会が行われた。最初はまあ賑やかと言って差し障りのない感じだったんだけどね・・・？、気付いたらどんちゃん騒ぎ・・・ガトウに渡した神酒が3分の1あたりになったときに取り合い発生。仕方ないので10本くらい作って皆に見せると、

皆戦争中以上の速度でその神酒を取りに来た。

そんな時だ。何かを知らせにきた巫女が言葉を出す前に、咆哮が響き渡った。

「詠春。まさかとは思うけど、この咆哮って・・・りょーめんすくなのかみデスカ??」

嫌な予感がヒシヒシビリビリウヘウヘするんだけど

「恐らく、アレで間違いないかと・・・」

「うげえー、よりにもよって新婚旅行で・・・」

「すみません・・・手伝ってくださいませんか？」

「リョウメンスクナ両面宿儻か・・・一回あってみたかったんだけどね？じゃあ私一人でいつてくるよ」

「は？いやいや！？一応神ですよ！？」

「たかが両面宿儻だよ？神格者に勝てるっても？」

「・・・それもそうですね、封印は元々の封印方法でお願いしますね。」

はいはい、了解了解
てことで、私は一人で先に行ってきますかね〜終わったらリーザとイチャイチャしようっと

そしてスクナのところに来ました・・・だけど

「封印解除が中途半端って・・・出てきたの外枠だけじゃん・・・中身スツカラカンの空っぽじゃない」

そう、中身が空っぽで話も何もないのだ。封印を完全に外そうと思っただけでもリーザとのイチャラブタイムが消費されるのでやめた

「じゃあ封印するかね？ 【ペシュカド】！能力発動！ 【黒炎】 【不治癒】」

ペシュカドを創造、黒炎と不治癒を発動してスクナに投げつける。
そして【能力創造】で【巻き戻し】を創造し スクナを対象に封印を巻き戻す

ペシュカドにやられて弱っているスクナは抵抗できることなく封印される

「ふう・・・さて、早く戻って宴会でもしようかな」

「ただいま・・・って何で皆武装してんの？」

「アリス！ いや、本山がスクナを一人でどうにかできるわけないと・・・俺達はアリス一人で十分だといったんだがな？ それでスクナはどうした」

「ん、3行で説明するなら・・・」

中身空っぽだった

話したいけど面倒だから封印
帰ってきて説明 ↑いまここ

かな？」

「なぜ3行にしたのかよくわからんが封印したなら問題ない」

「一応確認のため陰陽師に封印の確認に向かわせろ！補強できるよ
うなら補強しておくように！！」

「「ハッ！」」

それじゃあ宴会に行こう」

「・・・でどうしてこうなった？」

簡単に状況を説明するとタカミチと私と詠春以外全滅。

そして詠春もナギとラカンとアリカに捕まり飲まされている。

「貴方が神酒を大量に出したからですよ。アリカ様が飲んで酔っ払
い、リーザ様に飲ませてました。

他の人たちはいつものことですね。」

「まあ・・・ゼクトも神酒にゾッコンだからねえ・・・っと」

「はう・・・ありしゅ」

・・・ゑ？だれ？

「うにゅ・・・なんでかってにすくなのところにいったのゝ#」

まずい・・・リーザに言ってなかった・・・てか絡み酒か！？・・・いや、普通の時もコレくらいするか？だけども以上に怒りそうだなあ・・・よし

「リーザに危険を加えそうだったから」

これで大丈夫か・・・！？！？

「ふえ・・・？えへへそんなにしんぱいしてくたんらー・・・」

・・・ヤバイかわいすぎる。あの綺麗なリーザがふにや笑いをするなんて死ぬ、ギャップ差で萌え死ぬ。タカミチも赤くなってるし。だがまあ、リーザは綺麗すぎるのでそこまで怒る気もしない。そして、私がもう我慢できない、ということ

「あの、巫女さん。部屋どこですか？」

「ふにゅ？もうねるのお？」

「ええ・・・”一緒に寝ましょう”？」

「うん」

「こちらでございます」

ちなみに巫女さんたちは私たちが結婚してると知っている。
知ったときはウラヤマシイーなど叫んでいたが今では普通に接してくれている。

そして部屋に着いた。

「では」

” お楽しみくださいませ”

あらら、気づいてたか。

「ふふ・・・防音張るから聞こえないよ？」

「・・・残念です・・・」

新婚旅行とスクナ復活！（後書き）

皆戦争中異常の速度でその神酒を取りに来た。

←

皆戦争中以上の速度でその神酒を取りに来た。
に変更

私、師匠になる。(前書き)

タカミチ強化です！なぜならば好きだから！！

私、師匠になる。

あれから、酔っ払いのリーザとやったのだが、リーザが酔っ払いブレーキが利かなく、危うく私が壊れるところだった（精神的に）そしてラカンとゼクト以外酷い2日酔いでダウン。まあ詠春はそれだけじゃなかったみたいだけどねえ？朝起きてきたときに「昨夜はお楽しみだったようで」といったら異常なほど反応していた。

「はあゝ・・・・・・」

あら？ずいぶんと落ち込んでるね

「ん？タカミチどうしたの？？？」

「あ、アリスさん・・・・ガトウさんが今日修行してくれるって言うてたんですけど・・・・」

「ああ・・・・ごめん」

それって私のせいだよね・・・・ごめん本気で

「いえ・・・・はあ・・咸卦法も一応教えてもらうんだっただんですけど・・・・」

「ん？もしかして居合い拳習ってるの？」

「あ、はい」

「もしよかったら私が見てあげるよ？」

「本当ですか！？お願いします！」

「おkおk、じゃあ広場いこうか？」

「はい！！！」

そして広場に到着。修行の前に説明しないよね

「それじゃあ修行の前に試験したいんだけど。タカミチ貴方は魔法が使えないんだったわね？」「はい」

そのことで皆より一歩遅れてるなんて思っていない？」

「・・・違うんですか？」

「ええ、私から言わせて見れば、”一つのことだけをひたすら見て、極めることができる”そう思っているわ」

「一つのことを・・・極める・・・」

「ええ、中途半端に切り札を持っても意味はないのよ？色々な組み合わせができる・・・私みたいな感じじゃないとね」

「・・・・・・・・」

「そして貴方の切り札は居合い拳、咸卦法、ならばその二つを極限まで極めなさい。どんな切り札にも負けない、そんな切り札にしなさい」

「・・・はい！」

「そしてこれが試験」

「なんですか？」

「私が師匠になったとして、アナタは

”私を何として存在させるの？”

「え・・・・・・・・」

さてと・・・これが試験よ？

「…………アリスさん……が師匠になったとしたら……アリスさんは……”師匠”は僕が超えたいと願う壁です！僕が超えなければいけない壁です！！」

「ふ……合格！はじめるわよ！」

「はい！」

「さっきも言ったとおり、あなたは自分の切り札を極めるべき、そこでよ。毎日、いえ時間があるときでかまわない。ひたすら居合い拳を撃ち続けなさい。そのものに才能がないなら努力すればいい。ひたすら、ひたすら、その一発を重く、鋭く、何よりも強い一撃に、自分だけの一撃を完成させなさい。」

「わかりました！」

「じゃあまず1万発ね、ひたすら打ち続けることに体を慣れさせなさい」

「え”……わかりました……」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ ふむ……やっぱりまだ音を叩くほどじゃないか。

パァン！パァン！パァン！8000回を超えた辺りから音を叩くようになってきた。

さつき才能がないとかいったけど・・・才能あるかもね。コレならもう咸卦法もやらせてみようか。

「い・・・ち万！」

ぱぁん！

「はぁ・・・はぁ・・・」

「どうだった？」

「途中から自分の拳の威力が鋭く、重くなっていったのがわかりました」

「そう、その感覚を忘れずに撃ち続けなさい」

「はい・・・！」

「そろそろご飯だからいきましようか。食べ終わったら咸卦法の練習するわよ」

「え！？もうですか！？」

「え？ガトウにおしえてもらうんじゃないの？それにもうそのレベルまで至ってるわ。それに隠れて居合い拳と咸卦法の練習してたんでしょ？」

「え・・・は、はい」

「だったら問題ないわ〜じゃあいきましょう〜」

「はい！」

ちなみにリーザはアリカの看病をしていた。

「あれ？皆は？」

「皆様は二日酔いなので部屋でお粥を食べております」

「あらら、おっ純和風！おいしそう〜」

「本当ですね〜詠春さんがよく作ってくれたましたけど、とてもおいしかったですから。楽しみですね」

「お、アリスとタカミチか、それでは食べよう」

「あれ、詠春、ダウンしてたんじゃない？」

「いや、二日酔いのほうはそこまででもなかったんだ」

「昨夜はお楽「言わせるか！」むー」

「まあそんなことは置いておいて・・・」

「「いただきます!!」」

ちなみにご飯は 味噌汁、秋刀魚の塩焼き、ほうれん草の胡麻和え
だった。とてもおいしかったです。

そしてまた広場、

「よし、じゃあまず一回咸卦法やってみて」

「え!?! いきなりですか!?!」

「いいからいいから」

我流でどのくらいいったのか知りたいしね

「左手に魔力、右手に気・・・合成!」

ブオオオオ! お!?! 本当に後一步じゃない!

「まただめでした・・・」

「いやいやいやいや・・・あとちょっとだよ!?!」

「そうなんですか!?!」

「ええ、私が詳細を教えてあげるからもう一回貯めてみなさい。」

「はい! 左手に魔力、右手に気・・・」

「あーちょっと気がゆれてるゝよし、あと魔力ちょっと少なく、そう! その状態! その状態を20分!」

「はい!」

「OK！合成してみた」

「合成！！」

ゴウー！！よし、できたみたいだねえ、だけど30%ってところか、

「うん、できたねだけどそれでも30%ってところ、咸卦法も毎日居合い拳を1万発くらい打ったあとに、咸卦法状態で居合い拳を打ち続けるをやりなさい」

「うえ・・・はい・・・」

「じゃあ今日はこれくらいかな？疲れたでしょう」

「はい・・・ありがとうございました」

「はいはい」

タカミチはいい子だからね、原作みたいに紅き翼に異常に心酔しないようにしなきゃ！

これからと、私の家

あれから数日が経った、その間夜リーザとイチャラブしたり、タカミチの稽古したりと色々やっていた。そして詠春がいきなりこんなことをいいだした。

「みんな、これからどうするんだ？」

「んあ？いきなりどうしたんだ？まあ俺は新世界で拳闘士だな！」

「俺はアリカを連れて世界を見せに回るぜ」

「わしは新世界を放浪かの」

「私も同じですね」

「そうか。アリスとリーザはどうするんだ？」

「日本に居るのは決定かな、それで京都に住もうかなーとか思ってる。まあタカミチを入学させるのと数年後に麻帆良にお世話になるからその挨拶には行こうと思ってるよ」

「え！？師匠！？え？ちょ！ま・・・」「一応平和になったんだし、どんだけ頭よくても歳相応の事をしなさい。それに私が日本にいるんだから日本に居なきゃいけないでしょ？大丈夫、私も1ヶ月1回くらいは様子見に行くから」

「ふむ、なら麻帆良でのタカミチの世話は私がやろう」

「・・・もういいです」

え・・・？ガトウの死亡イベントが消えた・・・！？私が介入したからかな・・・まあここは流れにのって・・・

「じゃあ、ガトウお願いできる？」

「まかせろ」

クイクイツ

「・・・私も」

「え？ああ、アスナも？そうねえ・・・でもまだ薬の影響でまだ成長するようになってないしねえ・・・ガトウどうする？」

「まあ、いいだろう、勉強は必要だろうしな。それに・・・この二人、随分とお互いのことを気に入ってるようだしな」

「・・・／／／／」

「な！ガトウさん！いきなりなにを！！／／／／」

「へーーーー・・・そうなんだあ・・・（ニヤニヤ」

「おやおや」

「青春じゃのう」

「でも、アスナは少し時間が必要かなあ？多分中学校の時にはタカ

ミチは大人かなあ？」

「・・・どうして？」

「人間っていうのはね、ほんの一部以外自分達とは違うものにはどこまでも冷酷になれる生き物なんだよ。」

「・・・」

「まあ、タカミチと一緒にには居れるよ？」

「・・・うん／＼／」

「アスナとタカミチはガトウの保護下で麻帆良か・・・わかった、あとアリス、京都に住むなら本山の土地に使っていない土地があるからそこを提供しよう」

「お、本当？　だったら京都に住むことにするようありがとうね詠春」

それから数日、ガトウ、アスナ、タカミチ、私たち以外はそれぞれ旅立っていった。

そして今空き地に来ている。

家を建てるのに必要な木材などは私が頼んで運んでおいて貰った。

「おゝここが空き地かあゝ広いし紅葉綺麗だし、いい場所だねえ」

「そうですね、空もよく見えますから月見酒などもできますね」

「気に入ってもらえて何よりだ、それでどんな家にするんだ？」

「こういう家だよ」

私はそういうと風で陣を描いて、ハガ鍊の【鍊金術】を使って家を製造。

「・・・この頃おとなしいからお前がチートだって忘れてたよ」

「さすがアリスです」

「ありがと・・・？」

「ああ、そういえばお前が言っていた曲弦師の話だが」

お！どうなったんかねえ？

「呼んでおいたぞ。明日の13時頃に家に来い」

おお！！さすが詠春仕事が速い！！

「お！本当？ありがとう！それでその流派の名前は？」

――
鳳凰流だ
――

緊張

私は今近衛家にきている。なぜココにいるかというと、弦使の技術を学ぶためにきている。

「ねえ・・・詠春・・・」

「なんですか？」

「周りがものすごい殺気を込めてきてるんだけど・・・？」

「今から来る人は近衛まではいかないにしても上位の発言力を持つお方ですので、アナタが変な動きをしないか・・・というところでしようね」

「そしてなんか口調変わってない？」

「長たるもの礼儀をわきまえなければなりません」

「まあ、詠春らしいね・・・ときたっぽい・・・ヤバイ緊張してきた」

「アナタでも緊張するのですね」

しつれいな！！

スッ・・・襖が開いた。そこにいたのは属にイケメンといわれる男

で、動きから柔を得意としているのがよくわかる。

「ふむ、おぬしが鳳凰流を学びたいという者か？」

「はい、アリス・K・ティアスというものです」

「俺は天崎 龍耶、まあ龍耶とでもよんでくれ

昔と今が混ざった変わったしゃべり方だなあ。

「はい、龍耶殿」

「ふ．．．堅苦しいのはやめい。むずがゆくなる」

「ですが．．．いや、わかったよ。龍耶」

ピクリと周りの人たちが反応する

「それで、何故鳳凰流を．．．いや、この場合は弦使か？なぜだ？」

「何故、っていわれても。使いたかったから．．．としかいえないね」

「貴様！さっきから龍耶殿に失礼であろう！！！」

「いえ、その龍耶殿にそういえといわれたのですが？」

「だまれ！！！」

そういう周りの数人が弦を飛ばしてきて八方から攻撃してくる。へ

えこれが・・・

「「【舞花】！！！」」

「【百烈桜華斬】」

ザンッ！

「そんな柔な気しか通っていない攻撃で私を攻撃するなど、戦争中であればもうあなた達は細切れですよ？」

私は”少しだけ”殺気を飛ばし言う

「アリス・・・お前の殺気が体に悪いんだ。やめてくれ」

「仕方ないね。（某ガチムチ風）」

それより詠春と龍耶以外随分と顔色悪いね？

「ふむ、別に戦闘力には困ってるようには思えない、まあお前のようなヤツなら悪用もしないだろうしな。別にいいだろう。それにどこまで私の鳳凰流が昇華するか見てみたい」

「ありがとう。龍耶」

「ふふ・・・報酬はお前の神酒だったか。それでいい」

「ええ、かまいませんよ。今度の満月の晩私の家に来てください。月見酒でもしましょう」

「はは！楽しみじゃのう！！」

「その月見酒、私と妻もお邪魔してよろしいですか」

「詠春も？別にいいよお」

「お、だったら俺も一稀^{いき}・・・嫁を連れて行っていいかのう」

別に縁側も広く作ったし、問題ないね」

「はい、楽しみに待っておきますよ」

緊張（後書き）

はい、新しいオリキャラでましたねえ〜ちなみにこのキャラの娘がバンバンでできます。ですが恋人、というわけではなく「お姉様〜」みたいな感じです。

修行

私、アリス・K・ティアスは今修行中です・・・修行はいいんですが・・・

「ちょ!!!?ま!!!死ぬ!!!まって!!!」

「またん!弦で防げ!自由自在に操れるようになれ!技うけて技を学べ!」つむがせ【旋風】

キインツ・・・ズガガガアアア!!!ふおおおおお!!?

「ちよおおお!!!つく!」【舞花】!

そういつて私は龍耶を八方から攻める

「甘い!舞花は”風に舞う花びらの如し”そんな単調なものではない・・・」【舞花】

先日の門下生達とは比べ物にならないほどの気。そして不規則な攻撃。

「ぐ!」

ちなみに龍耶・・・強いです。ナギが10人以上ほど、しかもこれで本気じゃない。だが転生者じゃないみたいね。ただ子供のころに転生者らしき人にこの技を習ってその奥義が鳳凰と付く業が殆どだ

ったので鳳凰流という名前をつけたらしい。その転生者は伝承の際に殺したらしい。それが試練だったようだ。

「そら！どうした！せめて来い、守ってるだけでは鳳凰流を極められんぞ！！」

「っ！【流水の刃・鉄砲水】！！」

数十本束になった弦が鉄砲水のように龍耶に襲い掛かる、それが6本、だがそれを軽く弦を使わずによけ

「まだまだだ、相手の不意を打て！こんな単調な攻め鳳凰流ではない！さっきから自分で食らってるんだ！わかってるだろう！」

私は才能の塊らしい、自分の10倍の速度で成長してるといった。しかし、やはり転生者の技、多分漫画の技だったのだろう、なぜか見稽古が発動しない、どういうこと？それに能力創造で能力を作ってもやはり無理だった。今まで楽してきた私への罰か・・・

「【雷鳥】！！」

雷鳥は上から高速で一気に攻撃する。だがやはり全て交わされる。

「ふむ、今のはなかなかよかった、だがやはり単調すぎるな、攻撃に逃げ道を作るな。絶対に当てるんだ【雷鳥】」

そういつて同じ業を使ってきた。私はそれをよける・・・だが逃げた場所に弦、それで体をひねり右に移動するとそこにも弦、

「【旋風】！」

キン・・・・ズガガガ！龍耶の物には威力が劣るが高い威力を自負している。だが・・・

「え？一本も切れてない？マジで!？」

そして雷鳥が右足と左腕を貫く。

「があ!?!?・・・あ・・・ぐ・・・」

「ふう・・・なかなかよかったな。だが避ける事を考えすぎてあまり気を込めなかっただろう。

お前が見たときに気が少なくても俺が気を込めれば気は増えるだろうに」

「うう・・・コレでも戦争の英雄なのに・・・」

「まあ戦闘のセンス、才能すべてが俺を凌駕している。まあ気長にがんばれ」

「うう・・・一回持ち手全部で勝負だ!!」

「ちょ!?!アリス!?!もしかして神器も使う気じゃ!?!」

「もちろん!」

「ま・・・いいだろ」

「やったね!!じゃあ広場いこう!結界はこの私の2日分の神力が込められている結界球がしてくれるから」

「ああ、わかった」

結果私が負けました。・・・ゑ！？そしてよくよく聞くとエルテ
ィアスに加護を貰ったんだとか。

そしてその呪いで不老不死、あなたも犠牲者だったか。

「なんだ、お前もあのバカに加護持ちか、災難だったな、まあ俺は
一稀を助けてもらったんだけどな」

「へえ・・・もしかして嫁さんも？」

「ああ、だが俺達は後悔はないさ、それにあんた等もいるしな」

「あはは・・・あれ？助けたって怪我かなにか？」

「いや、病気だったんだ。そしてその病気のせいで子供が作れない
からだになったし、死にそうにもなった。まあエルが救ってくれた
んだが。まあ面白そうから、っていう理由だったけどな。お前の話
聞いたとき同一人物か疑ったよ。まあ子供を作れないってのは直せ
なかったらしいけどな、人の体を神の力でいじくるとそいつの体弄

った神の眷属になるらしい。眷属にすると面倒だから加護だけ与えて消えやがった」

「ああ・・・確かに前のエルならやりそう・・・私なんか――だったんだよ！？まああの時ヤケクソになってカマかけたら当たってたのは私自身ビックリだったよ」

「はっはは！！というかお前男だったのか！」

「そうだよーそしてこの頃男が心からも消えてるよ、まあ不自然な感じがないから不安覚えなくてまだいいけど」

「そんなもんなのか」

「そんなもののなのよ、それに完全に考え方女になっちゃったし、裸を男に見られたら嫌だし、勝手に体触れられるのにもなにかいやだし」

「はあ・・・それ絶対加護って言うけど悪戯だぜ？」

「やっぱり？私も思ってた」

「ぶえっくし！」

「ん？君がみたいな化物が風邪でも引いたのかい？」

『あら、お薬いますか？』

「いや、誰かが俺のことをうわさしてんだろ。まあアリスあたりか龍耶辺りだな」

「龍耶？誰だいそれは」

「ああ・・・心ないアホな邪神が呪いをかけたヤツさ・・・」

「・・・そうかい」

『エルさん・・・』

麻帆良へご挨拶

私はいまガトウ、タカミチ、アスナと一緒に麻帆良にきている。

「ここが僕たちが通うことになる学校ですか？」

「ええ、それより学園長のところにいくよ」

「あ、はい、でもどこかわかるんですか？」

「ええ。」

そして来ました学園長室前

コンコンッ

「アリス・K・ティアスです」

——はいつてよいぞ

「失礼します」

そしてそこにいたのは・・・

「っ！皆下がって！鳳凰流【流せ「ほ！？ちょっと待つのじゃ！！
何いきなり攻撃しようしとる！？」

「何故って妖怪がいましたので、・・・あら？妖怪なのに妖力があ
りませんね」

「わしは人間じゃよ！？結構傷つくんだからやめて！？・・・ゲフ
ン・・・して今回ココに來た理由はなんじゃ？」

「えっとガトウを教員として、タカミチを学園に編入、これくらい
ね」

「アスナ姫はどうするのじゃ？」

「成長が再開したら・・・ですね。体に精神が引っ張られているの
で問題ないでしょう。中学生にしては少し大人っぽい程度で済むで
しょう」

「そうじゃな、わかった！それでなのじゃかの、この学園には禁書
などが大量にある。そしてそれを狙ってくる輩などが絶えんのじゃ。
なので魔法関係者で夜の警備をしているのだが協力してくれんかの
お？」

「どうする？アリス」

「ん？これは私の問題じゃなくてガトウとタカミチの問題だから二人が決めて」

「・・・タカミチの修行にもなるのでやらせてもらいましょうか」

「うぬ、感謝するぞ・・・タカミチ君は戦えるのかの？」

「それは私が保証しましょう」

「そうか、なら問題ない。だが警備の時に少し力を示してもらおうぞい」

「ええ、それは承知しています」

「それでは私は、これで京都に戻りますね」

「ああ、わかった。お疲れ様」

「師匠、今回はありがとうございました」

「婿殿によろしく伝えてくれい」

「・・・またね」

「はいはい、詠春には伝えておきます。アスナもまたね？」

私もそういうとスキマを作って入った

「あ！ここまで来たんだしエルに会いにいこう、それに色々聞きたいことあるし」

「ふう・・・コーヒーがおいしいね」

『フェイトは本当にコーヒーが好きね』

「まあね・・・」

「俺は断然紅茶派だな・・・」「――――鳳凰流【舞花】」なんだっ！」

ズガアアア！

「あぶねーな！何しやがる京！」

「あらら、当たんなかったか」

「それでさ、色々聞きたいんだけど」

「ん？なにを聞きたいんだ」

「私の男が無くなってきてるんだけど？」

「・・・ゑ？」

「だから私が完全に女になってきてるって言ってるの！」

「は？そんな筈はないんだが」

「それに神力を込めたら翼が出るアレどうにかならない？」

「・・・・・・ゑ？今何だった？」

ん？いよいよボケだかエルティアス

「だから！！神力を込めたら出る翼をどうか「なにiiiiiiii
いいい！！！！？」」

ふえ！？なに！いきなり叫んで

「それにあんたリーザから聞いてるでしょ！

「なんのことだ！」

・・・まさかリーザさん・・・あなたあれ、完全妄想な作り話ですか

「体見せろ！」

「は・・・はあ！？／＼／＼いきなり何言い出すのよ！！！」

『エル様それはいくらなんでも最低です』

「そうじゃねえ！いいから！」

「・・・わかったわよ」

エルティアスが私の胸に手を当てて神力を流してくる

「・・・まじか・・・」

「なによ？」

「いや・・・まあ・・・お前を女にしたのは俺にカマかけたから悪戯した、程度だったんだが・・・な、まあ、加護ってのは神格者になる可能性を与えるんだ・・・。だけど神格者程度じゃあ翼なんか生えない。生えるのは神と眷属の天使くらいだ」

「っていうと？」

「俺が加護とか神格者とかの特性を忘れててあなたが神になってしまいました」

「・・・」

『・・・・・・・・』

「ちゃんと説明しなさい」

「ああ・・・まず神格者になるだろ、ここまでは問題ない、けどだ、神格者ってのは神力が天使、神レベルまでいくと昇華する。まあ神になるんだな、天使になる場合はその加護授けたヤツが眷属にする」

「ええ」

「んで外が女、中身が男。こういう例もたまにある。それでその場合影響が強いほうが勝つ、これで普通なら男が勝つ、だけどだ。お前の性別変えたのダレだ？」

「エル」

「そうだ、普通魂の容量以上の質量を与えなきゃそいつに能力を与えないんだ」「っていうかそれって私眷属になるんじゃない・・・」「それは肉体を弄ったとき、魂弄ってなるんだったら天使が大量発生しとるわ！・・・それでお前の容量以上の力で女に変えた。っていうことは？」

「・・・女のほうが影響力が大きくなる」

「そういうことだ、でも男が完全に消えるわけじゃない。ベースは男なんだ、怒ったときとかによく男の姿に戻るのはそういうことだ、そしてお前はまだ完全な神じゃないから翼が不安定だ、あまり多用するなよ、そして男が完全に端に追いやられると多分背が縮むからな。後、神力だけだな、あれは器関係なしに増えていくからな。ま

あ素質の問題だからなあ、俺を超えることはないと思うが」

「なるほど、やっとわかったよ、っていまさらっと重要発言したよね背が縮むって！まあ私の自業自得ってことだね。あそこでカマかけなければ・・・いや？ただいあそこでかけなかったら・・・」

「ああ！そういうえ男の時の名前はそのままなのか！！」

「話題を変えたね」

『変えましたね、あきらかに』

「ん？一応 零崎 京夜ってつけてるけど」

「・・・それっていつ付けたんだ？・・・」

「うん？大戦でアスナの扱いに怒ったときくらいかな？え！？なに！？もしかしてなんか危なかったりする！？」

「それって零崎シリーズだろ？零崎始めのやつだろ？」

「うん、だけど識ってなんかね夜識、京識、なんか合わないジャン
！」

「まあそれが救いになったな。言っただろ、アニメの能力を使いきると性格がおかしくなるって」

「うん？でも能力だけなんでしょ？」

「・・・忘れてたんだよ！名前もなんだ。だがまあ意図して付けた

場合だ、まあ、転生の際に無理やり能力ぶち込んでるんだ。そういう現象はよくあるんだ」

「・・・セーフ」

「だが零崎ってつけてる時点で家族大事にしたり、害になるヤツについては完全じゃないといっても幾らか冷酷になってるはずだぞ？」

「あー・・・たしかに・・・」

「まあ今後は神になってるから問題ないだろうが、その前だったからだろう。零崎のヤツは残ってるんだな」

「そっか、あと龍耶の技を見稽古できなかったんだけど」

「っ!?!・・・ああ俺の加護を受けてるヤツには使えない」

「ふーん、今の反応をするってことは反省してるんだね。よしよし。龍耶に報告だね!このネタでお酒がおいしくなるよ」

「な!やめろこら!」

「んじゃバイニー」

そういつてスキマに入って帰る

「あのやろう・・・」

「まあいいじゃないか、悔やんでたみたいだし、これで踏ん切りつけたら？あと彼女は女なんだから野郎ではないよ」

「はあ・・・そうはいつでも暇つぶしで不老不死にしちまったんだ。踏ん切りなんかそう簡単につけねーよ」

「まあ、彼女が友達になったってことは・・・君もなる可能性が99.99%だよ」

「なんだよその高確率」

麻帆良へご挨拶（後書き）

ちなみにコレは感想で言われたからとかではなく前々から考えていた設定です。

そして神力の容量ですが、器関係なしに伸びます。詳しい設定？考えてませんよそんなこと。ですがエルを超えることはありません。エルの力量は絶対なので。

月見酒

今日は綺麗な満月、龍耶に月見酒をしようと約束をしたので縁側でおつまみと神酒を準備する。

「よし、これくらいでいいかな？」

「そうだね、私あの宴会の時に始めてお酒飲んだんだけど、今じゃお酒好きになっちゃったよ」

そうなのだ、リーザがあ宴会から酒が好きになった。かといってもバカ酔いするほどではなく味わいながら1杯飲む程度だが

「あはは、別にいいじゃない」

「まあおいしいからいいんだけどね」

ピンポン、ん？きたっぽいね

「はいはい、上がっていいよ」

ガラッ、

「お邪魔しますよ」

「お世話になります」

詠春と少しお腹が膨らんだお嫁さん

「随分と豪勢な家だのう」

「どうも、龍がお世話になってます」

龍耶と一稀さん

「いらっしゃいゝそして初めまして一稀さん、えっとゝ」

「はじめまして。天崎 一稀です」

「木乃葉いいますゝ」

「私はフリージア・K・ティアスです。気軽にリーザと呼んで下さい、木乃葉さん、一稀さん」

「私はアリス・K・ティアスです。アリスと呼んでください木乃葉さん、一稀さん。立ち話もアレなので縁側にいきましよう、上がってくださいなゝ」

「ほう・・・コレを飲んだらもう他の酒を美味しいといって飲めなくなるのお」

「そうでしょう？ナギ達もお酒を飲むときは「アリカ！酒だせ！」とよく言っていましたからね」

「それもそうでしょうね、これほど美味しいお酒はないでしょう」

「エル曰く神酒の味はその神の神力によって全然違うって、私の飲ませてみたけど」ありえない・・・（某デュエリスト風）」って言うってたよ」

「そうとうなんだろうな、あの馬鹿が言うってことは」

「ああ！そいうえばエルに龍耶の話題出したときにネー——」

「あっはは！あの野郎がそんな反応するとはな！本当に変わったなあ」

「そうですね。私たちがあつたときは温かみのない諦めたような目をしていましたから」

「そうだな、アイツがそこまで変わるとは・・・そいうえばアリスお前のその人当たりはいつもそうなのか？」

「え？私？まあそうだけど、気に入らないヤツにはとことん優しくないよ？」

「ズバっと言うな・・・ちなみにその嫌いなやつとは？」

「自分の信念を持ってないやつ。他人の正義を振りかざすヤツ。権力とかで強制的に何かをするやつ。まあ強制的にっていうのはまあ、曖昧けどねえ。私の嫌なやつに当てはまったヤツはご愁傷様？」

「それはしかたありませんな」

「そうですね」

木乃葉さんと一稀さん結構黒いです。

「ああ、そういえば魔法世界に言ったときにこんなことがありましたよ——」

「ふう・・・やっと初めての街に着いたよ・・・」

「は？お前等ずっと街にきたことなかったのか！？」

「それでよく生きていきましたね」

「だってこの前来たばかりだもん」

「そうかい・・・」

「へーここが街の中か．．．ん？あの首輪つけてるのって何？」

「ああ、あれですか、あれは”奴隷”ですよ」

．．．．．
．．．魔法世界を駆逐してやりましょうか．．．
．．．虫唾が走りますね．

「へえ．．．」

「っ！？ちょっとまって！おい！ナギ！アル！止めろ！アリスが本気だぞ！！！」

「私のお嬢様に触るとはいい度胸ですな#」

「今はそんな場合じゃないだろうが！！！」

「なんてことがあったんですよ」

「そういえばそんなことがありましたね・・・思い出したらアリスを羽交い絞めにしたあなたを細切れにしくなってきました」

「そんなことがあったん？あなたゝ後で少しOHANASHIしましょう」

「木・・・木乃葉殿・・・？あれは緊急事態で・・・」

「まあまあ、でも今からでも駆逐してこようか・・・」

「やめてくださいよ・・・？」

「大丈夫ですよ。【アリスを愛でる会】の会員が増えたおかげで奴隷への扱いが一般人と殆ど変わりませんから」

「何故会員が増えると扱いが上がるのですか？」

「何故って、【アリスを愛でる会】の条約にアリスの信念が組み込まれているからです。弱きものを力で（以下省略）する者を許すな、というね」

「ああ・・・確か今は8億ほどでしたか？確かにそれだけ居たら権力がインフレ状態ですね」

「とはいってもアリスが嫌がるので変なことには使ってません。主

に孤児院の運営とかそんなかんじですねえ」

「さすがリーザ私のことわかってくれてるね!!」

「もちろんです。アリスがどこを可愛がればどういう風に鳴いてく
「にゃああああああ!!」／／／／／」

「随分と仲良しですね」

「ふう・・・そろそろ中に入りましょうか。木乃葉さんの御体に障
りますし」

「あ! そうだね、じゃあ中に入ろうか」

木乃香、爆誕

あの秋の出来事から数ヶ月。いよいよ木乃葉の陣痛がきた。

「お湯を準備して！長様は奥様の手を握って声をかけてください！」

「わかりました！”木乃葉”がんばってください」

「・・・はい」

どうやら陣痛の痛みで喋るのも辛そうなので魔法で痛みを和らげる。変に使うと赤ちゃんに悪影響がでるので和らげることしか出来ない。

「ふう・・・赤ちゃんに影響が出るかもしれないので和らげることしか出来ない・・・ごめんね」

「いえ。幾分楽になりました、ありがとうございます」

「すまない、アリス」

それから数十分の死闘の末やっと出産、だが木乃葉の体力の低下が激しく命が危ない

「木乃葉様！？長！木乃葉様の意識が！」

「どいて！もう赤ちゃんを産んだ後！もう大丈夫！！」

【――其^それは平等^{びようどう}に照^てらす神^{かみ}の光^{ひかり}】

【――死^しの淵^{ふち}に眠^{ねむ}る者^{もの}に】

【――再^{ふたたび}び光^{ひかり}を】

――【レイズデット】――

木乃葉を暖かな光が包み込む。

そして輝きが収まると木乃葉が少しずつ目を開ける。

「木乃葉・・・！よかった・・・本当によかった・・・」

「あなた・・・、アリス様、本当に有難うございました」

「いえ、私は親友を助けただけです」

「ふふ・・・そうですか、少々疲れたので、眠らせていただきます」

「はい、ゆっくり休んで」

私ที่บ้านで鳳凰流の修行をしていると

「アリス」

「ん？詠春と木乃葉？どうしたの？」

「アリスにこの子の名前を付けていただきたくて」

「え？私なんかでいいの？」

「二人で話して決めたんですよ。アナタに決めてもらったらご利益ありそうですし」

「まあ、いいけどさ」

それに決めるんだったらもう決まってるんだよね。

「じゃあ木乃葉の「木乃」と詠春の「春」んで春は花の香る時期、だから木乃香^{このか}

この子は近衛 木乃香！」

「木乃香・・・ですか、いい名前です。ありがとうございます」

「アリスありがとう」

「いえいえ、私もなづけ親になれて嬉しいですよ」

ここに近衛木乃香、爆誕！

邪神のご機嫌取り（前書き）

今回はエル視点です。

設定についてですが、リンクス様の樹木の王からいただきました。もちろん許可はとっています。

邪神のご機嫌取り

俺は今困っている。それは京夜のご機嫌を取るには何をすればいいか、それをずっと考えている。

「うー、何にするかなあ・・・」

「君はさっきから何をうなっているんだい？」

「いやな、アイツ結構根に持つタイプだろ？だから今のうちに機嫌取っと思うんだけどなあ・・・なにすればいいか」

「コーヒーでも送ればいいんじゃないかな」

「んなわけあるか！！お前と一緒にするな！ん？食べ物か・・・それもいいかもしれんな」

『食べ物でしたら、お肉とかですかね？』

「んーあいつは何がいいんだろうな・・・っ！？・・・ふふふ俺は天才だあああああ！！！！」

そうだ！！アイツは確かトリコファンだったはず！！！！

「いきなりどうしたんだい？」

「決まったんだぜ！！さあ作るか！！！！」

俺は魔法球から作ったんだが、これまたチート仕様で中の時間1週間、外の1時間、コレはすばらしい！
そしてその中にトリコの生態系をぶち込んだ。ははは！邪神様に不可能はない！！

「よし、完璧だ。送るか」

「ん？それは魔法球かい。それを作るなんてやっぱり規格外だね」

「今更だな。・・・よしラッピング完了」

白地に赤色の水玉模様可愛い紙で箱を包む、そしてそれをピンクのリボンで結ぶ

「そおい！！！！飛んでけえええ！！！！」

そして空間を切り裂きその中にぶん投げる

「よし！！」

『最後に誠意がこもっていませんでしたね。80点です』

「なん・・・だと!？」

邪神のご機嫌取り（後書き）

2..30頃に「かわいらしく白の赤水玉模様の箱にピンクのリボンでラッピング」を「白地に赤色の水玉模様可愛い紙で箱を包む、そしてそれをピンクのリボンで結ぶ」に変更しました。

邪神に超感謝！だけど頭痛い

私は今外で龍耶と修行中、気だけなら龍耶と互角になってきた。

「そこだ！！」【流星】！！」

「あまい！」【繭玉の楯】！」

一撃必殺の流星を絃を束ね楯にする

「ふふ！簡単に当たりませ・・・ゴス！にゃあああああ！！！！」

「！？大丈夫か！？」

痛い、頭が痛い、何が落ちてきた！？私でも認知できない速度で落ちてくるって一体なにが・・・

「なにこれ・・・？」

「プレゼント・・・のようだな」

「こんなのを音速以上の速度で送りつけるの一人しか思い浮かばない」

「俺もだ」

まあいいやあけてみよう。

ビリビリ！パカッ！そこにあったのは

「魔法球？なんでこんなもの、私も1年が外の1時間の持つてるんだけど・・・手紙？」

おっす！おらエルティアス！お前には迷惑かけちゃったからな！そんな君にはこの俺特性魔法球をプレゼント！しかもコレ中の1週間が外の1時間！だがコレは本命じゃないんだ。

本命は中にトリコの生態系が入ってるってことだな。まあお詫びってことだ！これを使って君もトリコライフ！byエルティアス

「エルウウウウウウウウウウウウ！！！！ありがとうおおおおおおおお！！！！」

こんなすばらしいものをくれるなんて！頭に直撃したけど許してあげる！

「なんだ！？いきなりどうした！？」

「ねえ龍〜とっつっつっつってもおいしいもの食べたくない？」

「食べたいに決まっているだろう？」

「じゃあ手伝って」

「まあいいが、その魔法球か？」

「ええ、じゃあ早速行きましょう！」

そして今は魔法球内

「なに？真っ白い空間・・・あ、魔方陣」

「こっちに「いくときにはコレを持って行ってね！これを叩き割ると触っているものと一緒にココに戻ってくるよ！」って書いてあるガラス球があるぞ」

「魔方陣には・・・「山岳」「氷山」・・・もちろん山岳!!」

待ってろリーガルマンモス・・・ふふふ・・・

「よし、では行くか」

ぽう・・・魔方陣を発動。

———キングクリムゾン———

「で・・・なんだ？このバカみたいなのは」

「リーガルマンモスちゃんです！この子の中にあるジュエルミートをとりにいくよ！！」

「・・・あいつの中に入るのか？どうやって」

「こうやってだよ！！」

私はそういつて龍耶の首襟をつかみリーガルちゃんの口のなかにIN！！！！

「ちょおおおおおおお！？」

「てめえ！やるなら言えよ！！！！」

「まあまあ、んじやまあ【絶対視の魔眼】」

どこかなーとあったあった。

「こっちだよ」

「はぁ・・・これであまり美味くなかったら修行量4倍だ」

「それは保障するよ」

そして今私たちは猛進中、出てくる猛獣を絃で蹴散らしひたすら突き進む。

「ここだぁ！！！！」
【流星】

ズドオオ！！！！　そういつて壁に穴を開ける

「み！つ！け！たぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！　あっははははははh
ゲッホゲッホ！オエ・・・」

「落ち着け！・・・それにしてもものすごい光ってるな。つかコレ
ってもうなんか・・・いや、お前等だからな。もう突っ込まない」

「さて、持ち帰るよーリーガルちゃん。お肉もらうよ」

そういってお肉をちぎって触りガラス球を叩き割る

パリイーン！すると気づいたら白い部屋に戻っていた

「おお！戻ってる！さぁ！外にでて食べるよ！！！！！！」

「ああ！これは楽しみだな」

「えーーーーしゅーーーーん！！！！」

「あら？アリス、どこに行ってたの・・・って何その物体X」

「なんですか・・・騒々しい・・・ってなんですかそれ・・・」

「あ！ありすさんや」

「あら、アリスさん。どうしたん？それ」

「みて！これ！食べよう！」

「端折りすぎて訳がわかりません。まあそれと一緒に食べようということはわかります」

「それにしても宝石みたいですね」

「きれいやわーこれたべものなん？」

「そうだよ木乃香」

「では！この世の全ての食材に感謝を込めて！」

「「「「「いただきます！！！」」」」」

そういつて皆食べだす。

「美味い！！！！牛筋のようなコリコリとした食感に霜降りのような脂のノリ！」

「こっちはすぐに溶けて、濃厚、それでいてサッパリとした味わい」

「こんな肉どこで手に入れたんだ？」

「エルティアスからねーお詫びだっていつて魔法球が送られてきたんだけどその中に物語の中の生態系が入っててね？その動物のお肉なんだよ」

ちなみに詠春には全部教えてある。

「ああ・・・エルティアス殿か・・・」

「これほんとうにおいしいわ」

「そっかそっかでも食べ過ぎないようにね？太っちゃうよ？」

「え！？いやや！ふとりとうない！」

「あははは！まあ食べ過ぎなきゃ大丈夫だよ」

「アリス、このほかにもまだあるの？」

とリーザが聞いてくる

「ええ、他にも髪、肌が最高質になる苺とか」「ピクッ」「

「」「是非その苺食べてみたいわ」「

「え・・・ええ。今度採ってくるわ・・・」

刹那との出会い

あのプレゼント頭に直撃事件から2ヶ月ほど、私は詠春と二人で散歩している。

「ふう〜平和だねえ、戦争中では味わえなかったひと時だよ」

「そうですね。ですが、あのひと時はあのひと時で慌ただしくも輝いていました」

「それもそうだね・・・何か来る・・・妖気がする・・・」

そういつて私は指から絃を垂らして戦闘準備をする。

だがそこから出てきたのは白い髪と紅い目をした少女だった。

「ひっ！」

ちょー！？いきなり驚かれた！？そして可愛・・・げふんげふん
ってこの子もしかして刹那？たしか里から逃げ出したところを詠春
に保護されただけ。

「怖がらないで？なにもしないから」

「え・・・あの・・・」

「アリス、その子は一体？」

「うん？ああ、この子は烏族のアルビノだよ」

「!?!?・・・たしか烏族内では・・・」

「そうだね、だから保護したいんだけど?」

「それなら木乃香の友達も欲しいといっていたから私が引き取りますよ」

「え・・・?え?」

「じゃあこれからよろしくね?えつとく・・・お名前は?」

「え・・・?あの・・・さくらざきせつなです・・・」

「刹那か!よし、じゃあこれから一緒に暮らす家族の元にいくよ」

「ふえ!?!あの!」

「うん?」

「あの、私は・・・」

「いいからいいから!早くいくお」

「ええええええ?」

家に付いた後にまず汚れていたのでお風呂に入れたりした。

その時に「洗うから翼だして？」と言ったら怯えられた。・・・他の烏族焼き払ってこようか。

その後に私に根負けして渋々と出したが私が「キレイだね〜」と言ったら「こんなの綺麗なんかやない！」といわれたので少しお説教した。そのときいった言葉は我ながらいいセリフだと思う。まあ何も考えてない即興セリフだけど。

「貴方は貴方の父親と母親が愛してくれた自分を否定するの？」

そういったら刹那が泣き出してしまった。

泣き出したってことはそこまでのを外してなかったんだね。これで「そんなに愛してくれなかった」とか言われたら私どう反応したらいいかわかんないよ。

そして私は刹那を泣き止むまで抱きしめた。すごく役得でした。

その後に木乃香にあわせた。

「おとうさま、そのこは？」

「ああ、今日からウチの家族になる刹那だよ。仲良くしてあげてくれないかい？」

「やった！これからよろしくな～せっちゃん」

「せ・・・せっちゃん？えっと・・・これからよろしくおねがいします。おじょうさま」

「いゃん～そんなかたくるしくいわんといて～このちゃんでええよ」

「こ・・・このちゃん？」

「そうやえ～じゃあ”まり”であそぼう～それともかくれんぼ？」

「え・・・じゃ・・・じゃあ”まり”で・・・」

「ならあっちいくえ～」

「あ・・・まって・・・」

「結構いい感じじゃない？」

「そうですねえ・・・」

「まああの子をあそこまで追い詰めた烏族を消したいっていう思いはあるけど・・・多分いま翼だしたら黒翼だよ」

「でしょうねえ、というかやめてくださいよ？」

「やらないよ、自然が壊れちゃう」

「・・・そうですか」

刹那との出会い（後書き）

え？読み辛い？すみません

ヒロインアンケートください。こない場合は作者のノリで増やしていきます。

11／07 2..31 刹那を説教するときの文章の「貴方を愛してくれた」がなんで愛してるってわかるん？という感想があったので修正。アリスは結構行き当たりです。

アリスに使わせたい能力も並行募集！

あと感想もください。意見、誤字、批判でもいいです。

教育方針

私は今詠春と木乃葉に呼ばれて、二人の部屋にお邪魔している

「・・・で、私を呼んだ理由は？」

二人のまとう空気からして真剣な話なのはわかる

「木乃香のことですわ」

「魔法を教えるか・・・ですか？」

「ええ・・・それで意見を聞きたいのです、ちなみに私は木乃香には教えたくありません」

ふう・・・まあコは木乃香のためにも少し強く言うかね

「詠春、私は教えるべき、いえ教えなければいけないと思うわ」

「・・・なぜですか」

「はあ・・・わかっているんでしょう？魔法を知らないということ
は危険から身を守る術を持たないということ。知らないということ
は自分から危険に首を突っ込むということ。護衛をつければいい？
そんな万能な護衛いませんよ。そして関西呪術協会の娘、そしてあ
の桁外れの魔力、そして英雄の娘、そして英雄の娘は英雄の恨みを
受ける。コレだけの条件がそろえば答えは簡単にでる。それでも教
えたくないというのは親のエゴだよ」

「それでも・・・！」

「どうせ隠し切れないでしょう！呪術協会という名前が付いてる時点で怪しむだろうし、世間にでると嫌でも自分の環境の異常に気づくわ！外に出さないという選択もあるけど、それは貴方が望まないでしょう」

「・・・そう・・・ですね」

「どうせ木乃葉にも言われたんでしょ？」

「ええ、私もガツツリ言ったのですが、それでも踏ん切りがつかなかったように」

「はぁ・・・詠春、私も関わらせたくないけど・・・状況がそれを許さないのよ。本山だって安全じゃない、関東魔法協会に突っかかるヤツらがいる。それに木乃香が巻き込まれるのは確実よ」

「・・・アリス、お願いがあります」

「なに？」

「あなたの知り合いに魔法を教えるのが得意な人は居ませんか？」

「・・・そうねえ居るといっちゃいるけど、基礎を固めてからね、その程度なら私が教えることが出来るわ」

「そうですか、ではお願いできますか？」

「陰陽術じゃなくていいの？」

「陰陽術は実戦ともなると熟練が必要です。今はすぐに身を守れる術が必要です。それに先ほど貴方が言ったように過激派に不穏な動きがあります。なのでエルティアス殿が居る麻帆良に行かせようと思っています」

「そっか・・・ならあのぬらりひょんには魔法を関わらせていることは言わないほうがいいね、それと情報が漏れるかもしれないから極秘で訓練するから」

「わかりました、では・・・木乃香を・・・”頼む”・・・」

親友の頼みだもの、断れないよ。

奥義伝授と我流奥義作り

「さて、お前も気だけの勝負なら俺を凌駕するようになった。」

はい、今龍耶に修行つけてもらってます

「それでだ、鳳凰流も極めただろう。奥義を伝授しようかと思ってな」

お！いよいよか・・・あれ？でも継承って・・・」

「ちょっとまって！たしか伝承の時に師匠殺したんじゃない・・・？」

「おいおい、俺不老不死だぞ？しかも言ってなかったが俺もこの前神格化して能力UP！不死性も高くなった。それに継承と伝授は違う、伝授はある程度力を付けたらやってるからな。それに継承はなあ・・・俺死なないからもうないと思う」

「・・・だったら問題ないね」

「よし、それじゃあ実演するぞ」

「あいあい」

「【鳳凰爪襲撃】！！」

絃で爪を立てて襲い掛かる鳳凰をかたどりそれを叩きつける
ズガアアアアアアアアアア！！！！！！

……？道場が消し飛んだよ？え？大丈夫なの？

「あっちゃあ……あんまり力込めなかったんだけどなあ……まあいいや！コレが奥義だ、あと2つあったんだが、それは我流らしくてな」

「え？それ会得しなかったの？」

「いや、師匠曰く自分に合った技を自作するんだと、それに会得しなかったのは俺に合わなかったからだ。俺の我流奥義がお前にあったら別に使ってもかまわないんだぜ？ お前のヤツを俺が使うかもしれないしな？」

「なるなる」

「んじゃ、やってみろ」

「
・
・
・
は？
」

「だからやってみろって！」

「いやいやいや、コツとかは!？」

「お前、俺の修行受けてそんなのあったか」

あ
あ

「なかったね!! そんな理不尽を怒りに!それを力にいい!!!」
【鳳凰爪襲撃】!」

ドガガガガガ! おお! できた! . . . ちなみに攻撃は龍耶に思い
つきりぶつけた

「おお! そこまで威力ないけどできた! これなら結構早くできそう
. . . ってどうしたの? 龍耶」

「. . . 俺でも半年かかったんだけどなあ (遠い目)」

「いやいや! 加護のおかげだから! 私自体にそんな才能ないんだよ
! それに私の攻撃直撃したのに無傷って!」

「それでも. . . なあ. . . なんかこう. . . そして当たる瞬間に
繭玉の楯でガードしたからなあ」

「まあまあ! おいしいスイーツ食べさせてあげるからさ! そして凄
い発動速度だね. . . 」

「なに!? それなら仕方ないな! そりゃあ使ってる年数がちげーだ
ろうが、それまでお前が同じレベルだったら首つってやるよ」

何が仕方ないのか気になるが. . . そして首つるな!

「じゃあ、今日はコレくらいでいいか。あと我流奥義作つとけよ
後で奥義相應しいかテストするから」

「あいあい」

キングクリムゾン！！！！！

2ヵ月後～

さて、私は今道場に向かっている。なぜ向かっているかという和我流奥義が完成したので見てもらおうと思ったのだ。

そして到着、だがいま門下生と訓練しているようでこちらに気づいていない。（気配を消している）

・・・ニヤリッちよつと悪戯～

「鳳凰流、我流奥義【鳳凰天翔】！！！」

まず絃呪縛で拘束、この技に捕まっているときに動くとバラバラになる。

そして足元から絃で作って気と神力を練りこんだ鳳凰を超高速で叩きつける

ズドゴオオオオ!! 鈍い音が鳴り響く

「がっは!!」

「「「師範代!!!」」」

そういつて門下生が龍耶に駆け寄り私を殺気を込めてにらんでくる。まあぶっちゃけ猫に威嚇されたほうが怖いけど

「・・・くく・・・くく・・・くはははは!! やってくれんじやねえか!? ア”ア”!?」

・・・ゑ? だれ!? え、前不意打ちしたときそんなになんなかったよねえ!?

「ちょ!? 今回なんでそんなn「ははは! いいぜ! よくそこまで強くなったあ!!」」

うぐっ! 言葉を最後までしゃべれない・・・!

「コレなら奥義を入れた”死合い”をしても大丈夫だなあ・・・」

へ!? ちょ! なんか仕合と字が違う気が・・・ってちょ!?

「奥義! 【鳳凰翼連撃】!」

いきなりかい！

———【繭玉の盾】

鳳凰をかたどった絃が突っ込んできて翼で攻撃してくる。それを繭玉の楯で防ぐ

ズガン！つく・・・きつつい・・・

だがそれだけでは終わらなくそのまま旋回してまた攻撃してくるそこで踏ん張っていた私は反応しきれなく直撃する。

その間役1秒ほど。龍耶と訓練するようになって前まで力に頼りすぎていたがもう技術が身につく

気や魔力の使い方がエヴァたんほどまでに上達

「らああ！鳳凰流、我流奥義！【鳳凰ノ子】！」

我流奥義2！コレは小さい鳳凰を沢山作って四方八方から攻撃、しかも一発が流星の2倍ほどの威力

「ふむ、なかなかだ・・・！けどなあ・・・神力も大雑把にしかこめてねえ・・・これじゃ俺には届かねェよ・・・【鳳凰ノ守護】

神力を絃1本1本に込めた鳳凰が翼で龍耶を包み込み私の【鳳凰ノ子】を全て防ぐ

「ちょ・・・まった！お願い！？覚醒（神格化）した龍に勝てる気がしん「問答無用だぜエ！？」

「ああ・・・師範代の特性スキル【戦闘狂】が発動してる・・・」

「ちょ！？名も無き門下生！なによそれ！」

「本気を出しても大丈夫な相手と戦うときに発動するスキルです。ちなみに前回発動したのは神鳴流の鶴子様との戦闘の時です」

「ええ・・・それって止まったの？」

「はい、そのときは龍耶様も今ほど人外ではなかったので龍耶様が負けることで終わりました。ちなみに戦闘時間は2時間ほどでした」

・・・ああ、これ私終わったな。まだ神力に関しては龍に1万歩くらい負けている。なぜなら私は製造に使うくらいしかないから。そして神力は物に通して使うことが気、魔力に比べて難しい、だから衝撃波に込めるくらいしかないのだが・・・龍は絃に神力を込めて異常な強度、切れ味、威力にすることができ、しかもエルを超えるほどの錬度で。しかも衝撃波に込めるにしても私なんかとはレベルが違う。そして私たちの奥義は神力を込める用に作られている、まあ普通に込めなくても異常な威力なんだけど・・・さっきから普通に神力を込めてる。まだ本気じゃないけど。このまま続けたら確実に殺される

「・・・最終手段・・・助けてー！！一稀いいい！！！！」

タッタッタッタという走る音が聞こえてきて・・・

「なにかありました・・・って何ですかコレは・・・」

「ア」？・・・いや？なんでもないぞ一稀？本当になんでもない。

訓練だ、だけどアリスが冗談をマジに受けただけだから」

「そうですか？ また鶴子様の時みたいになっているのかと・・・」

「ンッン！！ そんなわけないだろ？ あの時お前にOHANASHI
されてとても反省してるんだぜ？」

咳払いして龍耶が言い訳を並べる、その顔には冷や汗がダラダラ

「・・・アリス、本当にそうなのですか？」

うわー後ろに修羅が見える・・・そして龍耶が涙目になってこっち
を見ているよ・・・そしてその目は・・・

「頼む！！ 俺を見捨てないでくれえ・・・！！」 そういつているよ
うだ・・・いや、実際思っているんだろうケド、まあ今回は私も悪
いからね

「うん、ちょっと龍が熱くなっちゃったただだよ、それをとめるた
めに呼んじやったけど・・・ごめんねえ」

「いえいえ、それより皆さん、ご飯ができましたので上がってくだ
さいね」

「」「はいっ！」「」

「アリスウウウ・・・今後！絶対！！どんなことがあっても！一稀

をよぶなよ!?! 俺はもうあんなことされたくない!!」

「え……ええ、わかったわ……」

何があったかものすごく気になるなあ……

奥義伝授と我流奥義作り（後書き）

今回は龍耶が嫁さんに尻に轢かれている・・・という話（笑）

木乃香、溺れる！そして刹那の決意

私は今リーザとイチヤイチヤしてます。具体的にはリーザが私の頭を撫でたり髪を弄ったり。

リーザはゴッドハンドの使い手だね・・・リーザに撫でられるとすぐ気持ちよくなる・・・

夜のほうもね・・・

「うにゅ・・・」

「ふふふ・・・可愛いねえ・・・」

むう・・・／＼／＼いきなり何を・・・うん？この気配詠春かな？

「アリス！木乃香と刹那を知りませんか！？先ほどから見当たらないのです！」

・・・まさかこれって溺れるイベントか・・・？あのイベントの歳はよくわからないけど、多分今頃だよねえ・・・魔法教えてるって言うってもまだ、火よ灯れ のレベルだ

「知らないよ！、私も心配だから協力するよ、私は川のほうを探すね？先日の雨で水の量が増えてるからもし居たら危ないし！」

「わかりました！では私は周りを調べますね」

「OK！」

じゃあ急ごうか！

そして川に到着・・・どこだ！？

「このちゃん！！」

あっちか！遅かった！！

「刹那！」

「あ・・・アリス様！！このちゃんがあ・・・このちゃんが！！」

「まかせて！【神力半開放・白翼18対】！」

バサア！！私は翼を具現して木乃香を助けにいく、後ろから「え・・・？」という声が聞こえてきたが今は木乃香が先決・・・！

「木乃香！つかまって！」

「アリ・・・がぼ！スはん・・・」

そういつて手を伸ばしてくる、その小さい冷たくなった手をつかんで引き上げる。

「ゲホッゲホ・・・はあ・・・はあ・・・」

「うん・・・水もあまり飲んでないみたいだね・・・大丈夫」

岸に戻ると刹那がいなかった、多分詠春を呼びにいったんだろう。
気の利く子だ・・・

私は毛布を製造して木乃香にかぶせる。・・・そうしていると詠春
が気で体を強化して猛スピードで走ってきた。

ズガガッ!!

「木乃香! 川は増水してるからあれほど気をつけなさいと・・・で
すが・・・無事でよかった・・・」

「お父様・・・ごめんなさい・・・」

そうしていると刹那も走ってきた

「はあ・・・はあ・・・このちゃん・・・ごめんなあ・・・まもれ
なくて・・・」

「気にせんどいて・・・? せっちゃんがわるいわけやないよ」

「でも・・・でもお・・・」

「だいじょうぶ・・・」

「つようなる・・・このちゃんをまもれるくらい・・・つようなる
！！」

詠春たちが行った後に刹那が言った・

・・・うん、いい目だ・・・この際刹那に神鳴流教えようか

「だったら刹那、神鳴流覚えてみる？」

「・・・はい・・・教えてください！このちゃんを守る力をください！！」

「OK、まあ今回のことは気にすることないよ？あと木乃香とはいつもどおり接してあげてね？」

「・・・はい」

「それに木乃香も魔法習ってるんだよ」「まほうをおぼえて、せつちゃんをたすける」ってね」

「え！？まほうですか！？」

「ええ、帰ってから詳しく聞かせるよ・・・明日から厳しく指導するからね？」

私が綺麗な笑顔でさういと

「・・・はい・・・」

そう少し元気がない返事をした

このとき刹那は少し後悔していたのであった・・・

体が縮んだ・・・え!?!リーザさん!?!なんで息が荒くなって・・・ちょ!やめ

今回はその行為自体は出てきませんが微妙にエロちっくです。

あとリーザがS全快で縛ってます。少々鬼畜物になってるので苦手な方はスルーしてください。今回の大事なことは←です

アリスが小さくなった。140cmくらい。

夜だけ小さい状態。通常は前より少し背が高い状態。役157cm

体が縮んだ・・・え!?!リーザさん!?!なんで息が荒くなって・・・ちょ!やめ

あの溺れる事件から数日、私の体にエルから言われた異変・・・いや完成?が起こった

「・・・体が・・・縮んだ・・・」

前まで150いくかいかなかった背は140近くになっている。

「女神だったら普通長身美人なんじゃないの・・・?」

やばい・・・今は夜・・・この姿をリーザに見つかったら確実にやられる・・・さっさと容姿変更で元に戻そう・・・いや、少し大きくして157→くらいにしようか

「そうと決まれば即実っこ「アリス」?私の白いパーカーしらな・・・い・・・?」

うそーん・・・このタイミングですかあ・・・?

「いや・・・あのね・・・これは・・・」

ちなみに完全に神になると縮むっていうのは教えてある、教えたときにロープを弄りながら、「それはそれは・・・とっても楽しみなねえ?」と、とっても満面の黒い笑顔で言っていた。ゆえに知られなくなかった!現にロープ出して息荒いし!!

「アリス?動かないでね・・・?動いたら・・・痛くなるから・・・いや、凄く痛くするからあ・・・。まあ痛がる顔も可愛いから抵抗

してもいいけどお？」

YA☆BA☆Iまじでヤバイ！！これは実力行使で・・・

「【神力全開放】！！」

シーン・・・

・・・ゑ？なんで神力がでてこないの？

「ま・・・【魔力全開放】！【気全開放】！！【妖力全開放】！！
！【靈力全開放】！！！！」

sideエル

「ああゝそろそろアイツが完全に神になるころかな・・・あっ！神になったら情報を整理するために力が一切使えなくなるって言うの忘れてたな」

side out

どうしよう、まじでやばい、魔力、気、妖力、靈力、神力、全部使えないんですけど！？エル！！！！こんなの聞いてないよ！！自力だけの鳳凰流じゃあ、リーザに使ってもただの糸遊びだよ！？身体能力だけだったらリーザにフルボッコされるのに！それだけならいいけど、「あら、そんなに痛い縛りプレイがいいの？だったら遠慮しないで言えばいいのに」とかなりそうだよ！絶対にできない！

だけど怖いから癖で体が勝手に動いてしまった。訓練のしすぎはダメだね・・・（遠い目）

【流星】 【時雨】

時雨は他のわざと一緒に使う、1と20本を他の技にまぎれさせて攻撃するものだ

「抵抗したら痛くします、って言いましたからね？」

そういうのと同時に私の体に悪寒が走った。

「え！？きゃあ！？・・・っ！あ”！いだい！！リーザあ・・・あう！！！」

リーザはそういつて絃を全て”素手”でつかんで引っ張る、当然気で強化していない私は軽く引っ張られる。そして、乱暴に後ろで手をロープで縛られ、膝カクンされ地面に倒される

「さて・・・と・・・ゆっくり楽しみますかね・・・？」

「うう・・・少しゆるくしてほしいな？ってアリスはアリスはお願いしてみたり・・・」

私が痛みと恐怖で涙目になりながら上ずった声でお願いするが・・・

「なにいつてるの？抵抗しなかったら痛くはしないって言ったよね？抵抗しちゃうんだからね、自業自得だよ。可愛らしく、鳴いて、

泣いて、喘いて私を興奮させて」

「ひっ！お願い！痛くしないで・・・いぎい！？」

――翌日――

そこに横たわっているのは体に縄の痕が付き、顔に涙の跡が付いて、手首が縛られている全裸の少女と、その少女を抱きかかえながら黒い笑みを浮かべている女性。言わずもがな私とリーザである。ちなみにもう寝たあとで、今は昼頃。今起きたばかりである、そしてまだ縛られています。夜は色々酷かった・・・どんなに哀願しても抵抗したことを許してくれない。そして痛い、気持ちいい、を同時に、交互に攻められた。後半には頭がおかしくなりそうで、我慢できなくなつて泣きじゃくりながらオネダリしたんだけど、それでもリーザはノつてこなかった、いつもならノつてくるのに・・・

行為を始めたのが7時ごろ。そして終わったのが朝4時だった。

「ねえ・・・リーザ・・・？そろそろ解いてほしいな？」

「はい？あと1週間はその可愛い状態で居てもらおうかと思ってるんだけど？」

なんかドン！ドン！リーザが黒くなってます。そしてトンでも発言しました。

「それは・・・もう許してよお・・・」

今回は嘘泣きじゃなくてマジ泣きです。あんなことがあと1週間！？そんなの泣くしかない。そしてマジで泣いてるのをみて益々黒い笑みを浮かべるリーザさん。あれ？前までこんなに黒くなかった・・・いや黒かったです。すみません勘違いでした。でも嫌がることはしなかったんだけど・・・

「ふふ・・・可愛らしい顔だねえ・・・まあそうだねえ、今後”そういう雰囲気”になったら私のことをご主人さま、と呼んで？そして週1回に私の好きなようにされて？それが解く条件だよ。この条件が呑めないなら”ずっとこのまま”で毎日やり続けるから。ちなみにそのロープはエル様仕様だから、絶対に切れないよ」

あれ・・・？さっき1週間だったのにずっとに変わった・・・それになにその条件、そんなにSM好きだったっけ！？

「そんなにSM好きだったっけ・・・？」

「SMじゃなくてアリスが鳴いたり、泣いたり、喘いだりするのがいいだけだよ」

ああ、そうですか

「うう・・・わかったよう・・・リーザ・・・だから解いて・・・」

「うん？今は”そういう雰囲気”だと思ったんだけどなあ？どう思う？アリス？私の勘違いかなあ？」

「あ・・・うう・・・縄を・・・解いてください、ご・・・御主人様あ・・・」

「はい、よくできました」

リーザは満面の笑顔でそういった。

それからリーザに抵抗できなくなっていた。

ちなみにその後、行為の時だけ今の状態に戻って通常は前の姿より少し背が高い状態になるということで落ち着いた。

体が縮んだ・・・え!?!リーザさん!?!なんで息が荒くなって・・・ちょ!やめ

はい、少しやりすぎた感がありますね。ですが後悔も反省もしない
!!!

「下手な文章でこっち系を書いて大丈夫か?」「大丈夫じゃない、
大問題だ」

間違い修正しました。さっきは2日間だったのに⇒さっき1週間だ
ったのに

なにを思って2日にしたのか私にもわかりません

木乃香の救出。そして麻帆良へ

私は今詠春と話し合っています。

「で、あと1ヶ月後にあちらに送ると」

「はい、そろそろ過激派の動きが無視できないほどになってきましたので」

まあ、確かにこの頃木乃香の周りをうろついてるねえ

「わかった、多分そのことに過激派が感づくだろうねえ・・・まあ私が”どんなことをしても”守るけど、もしもの時は殺しても致し方なし・・・だよ？」

「わかっています、貴方に手伝ってもらう以上そこは避けられないと思っていますので」

「わかってくれてなにより」

そして3週間が経った、そして今は深夜の1時半、木乃香がさらわれたらしい

「詠春！木乃香が攫われたって!？」

「・・・はい・・・すみません・・・」

「まあ、どうせスクナの封印解いて関西魔術協会をくって感じだろうね」

「っ!?! スクナを!?! だったらすぐにとめなければ!?!」

「ああ、大丈夫だよ。実は今日はね私がリーザの言うことを何でも聞く日だったんだけどね?それを邪魔されて怒ったリーザが向かってる」

「・・・木乃香が巻き添えを食らうのでは!?!」

「いやいや、そこまででは・・・ない・・・で・・・しょ?」

「何故疑問形なんですか!」

ヤバイ、本当に辺りかまわず破壊衝動に任せて破壊するかも・・・

「ちょっと私も行ってくる、鈍った詠春は邪魔だから付いてこなくていいよ」

「・・・はい・・・では帰ってきたらその鈍った体を元に戻すのを手伝ってください」

「はいはい」

「さて・・・少し急がないとね【神力半開放】【灰翼24対】」

はい、神になってから感情に関係なく翼の色を決めれるようになったんだ。

しかも神力が以前より明らかに増えて2倍近くに・・・まあいいや、それで翼の種類だけど

白翼は補助やら強化、聖魔法が得意になる

黒は呪、破壊魔法が得意になる

灰翼は白と黒の中間。まあオールラウンダー？なのでそこまで強くない敵なら灰翼が一番戦いやすい。

普通に戦うなら翼を出す必要はないけど、今回は新技も試したいし・・・翼を出す必要は神力を武器に応用するときには翼を出しておいたほうがやりやすいんだよね。なんでだろうか

「【咸卦法・神（3分の1）】【天眼】・・・いきますか！」

そういつて空中に飛ぶ

「【月歩】！」

空気を蹴って音速以上の速さで突き進む

ん・・・？あれはリーザ・・・ってうわゝ召喚された鬼がリーザによって「見せられないよ！」な状態になっとる。うお！？一匹飛んできた！！

ここは任せて木乃香のほうに行こうか・・・

見つけた！！あれ？男？千草じゃなかったっけか？数は20人ほどか、多いなあ。やっぱり私が介入したからかな。2次創作小説だけで単行本は魔法世界あたりまでしか見てないからな。それにもう記憶が曖昧だよ。まあいいや、私の家族に手を出したことを後悔させてあげるよ・・・

ズガガガガガガ！！うお！？速すぎたか！地面をえぐってしまった・・・まあいいや

「さあ？木乃香を返してもらおうよ」

私はそう言って絃を垂らす。ちなみに絃はブレスレット型の物、神力を原料にして絃を作っている。

実は、我流奥義で不意打ち事件から龍耶にイヤというほど訓練させられた。龍耶の神力10分の1の攻撃を神力で作った絃だけで防ぐ。あれは死ぬかと。いや、死なないけどさ

「つく！西洋魔術師が！！俺達の邪魔をするなあ！！」

そういつて数人が私に向かって陰陽術やら何やら使ってくるが・・・

なにそのヘッポコ・・・まだ木乃香のほうが強いよ。私は何もしないで体で受ける、だが私のまよっている力の余波で全て消されてしまった。

「なっ!?! 貴様! 一体何をしたあ!?!」

「いや・・・何もしてないよ、それに速く終わらせないとリーザに拷問級の御仕置きされるから終わらせるよ・・・神戯絃術・奥義【死の旋律】」

ちよつと厨二っぽいけどいいよね。

これは絃使いと音使いの技術をあわせたものだ。これは絃を張り巡らせて音で脳内を揺らして出血させたり、かき混ぜたり、意識を失わせたり。色々なことが出来る。普通はできないけどね? 私には神力がある。これは奇跡の素にもなってるから殆どのができるようになる。それ相応の量は必要だけどね。私、エル、龍耶には関係ないけど。

ああ、ちゃんと木乃香には効果がないように細工してある。

「が・・・あああ!?! な・・・んだ・・・う”う・・・があ・・・」

今回は脳内をグチャグチャにさせてもらうよ? 私を敵に回したんだ・・・これくらいの覚悟はあるでしょう、龍耶だったらバラバラだったね。ちなみに龍耶は裏仕事をしているので冷酷だ。まあ他の人たちには言っていないけど。仕事中の龍耶は冷血無情だね、まあ殺る相手は殆どがお腹真っ黒だからなんだろうけど。

「はい、おしまい」

「なんだ、俺が来る意味なかったじゃねえかよ？」

「うん？ ああ、龍耶、ちょうど話してたんだよ」

「誰とだ？」

「え？ 画面の「いわせねえよ！ 【鳳凰翼連撃】！」

「ちょ！？ 【鳳凰ノ守護】！」

ガキイイイイン！ ガキイイイイイン！！

「おお、俺の我流奥義か」

「ええ、結構使い勝手よさそうだったからね、それより速く帰りましょう。リーザが怖い」

「おう！ っと・・・そうだった！ お前の嫁からの伝言だぜ？ 「私を素通りしたのは木乃香のことがあるからまあいいけど、あまりにも掃除が遅い、そして私の機嫌が悪い、だから御仕置き決定ね」 だそうだ」

・・・帰りたくないよ・・・でも帰らないで、もし捕まったら日の光を拝めるかわからない。ずっと地下室に拘束されて飼われるんじゃないだろうか。はあ・・・帰るか・・・

「詠春」

「アリス！木乃香・・・よかった」

「じゃあ私たちはこれで・・・さあ行くよアリス。ああ、あと”今夜と明日は一日中居ません”から」

「ええ！？そんなぁ！一夜だけって・・・「なに？」・・・ううんなんでもないよ・・・（泣）」

そして私はリーザに引きずられていった。ああ、また痛くされるのかなぁ・・・どうせなら普通にせめてほしい・・・

「強く生きろ・・・アリス」

「同意見ですね」

——二日後——

「うう・・・体中軋む、喉が痛い、あんな変な格好で縛ったり、痛くするから、・・・」

「でも可愛かったよ？」

「可愛かったらオールオーケーな考え本当にやめて、私の体が持たない」

「それは無理。アリスが可愛すぎるのがいけないんだよ？恨むんなら自分を恨んでね」

もう言うのはやめよう。私の定めだと受け入れよう・・・

——木乃香、出立当日——

「木乃香、忘れ物は？」

「大丈夫やゝ、もう3回目やでゝお母様」

「はは、木乃葉は寂しいんだよゝいい歳なのn「ゴスッ!」ア”ア”ア”ア”!?!?!」

木乃葉が釘バットで思いっきりフルスイングで殴ってきた。木乃香の黒いツツコミは母親の遺伝だったのか・・・

「はあ・・・まったく・・・木乃香、お義父様によろしく伝えてください。あと魔法に知ってることは秘密にしておいてくださいね」

と詠春

「わかったえゝ」

「痛ゝ・・・ああ、木乃香、あのジジイ・・・ぬらりひょんが無理やり見合いさせようとしてウザかったら私にいいなさい。細切れにしてあげるから」

と私

「怖いから自分で「お爺ちゃんウザいえ?」っていうゝ」

と木乃香、多分そっちのほうがクルだろうね

「そっちのほうがダメージでけえだろうなあ」

と龍耶

「お嬢様、そろそろお時間です」

「お母様へ皆へまたなへ」

「はいはいへまたねへ」

最後まで間延びして、なんかしまらないなあこの親子

木乃香の救出。そして麻帆良へ（後書き）

ちなみに木乃香ですが、描写は麻帆良でしようと思っています。一応今の時点での力量は麻帆良に来たネギくらい。でもネギみたいに攻撃魔法ばかりではなく、全体的に、補助専行で修行してました。だからといって攻撃が苦手な訳ではありません。アリスの教育で敵には迷わず攻撃します。刹那も同様。

そして次回は刹那の修行風景、短くなります。なぜなら書くことが少ないから。

くなぜなに☆じゃしかごく技・能力編（前書き）

今回は読み直してこれわかりずらくね？どんな技かわけわかめWWW
とかそんなのを説明していきます。私が書いた以外でわからないの
があったら、感想に書いてください。すぐに加えますので。

なぜなに☆じゃしかごく技・能力編

「さあ！京！今回はあの手な文しか書けない作者の後始末をまかされたぞ」

「あのバカは本当にダメだな。文武顔体、どれをとっても最底辺といってもいい存在なのに」

「まあ仕方ないだろう、さあわかりづらかったのはまずコレ！」

NEW！【邪神の加護】

「あゝこれはなゝ」

「じゃあ説明いくぜ！！」

これはまず、与えられた奴が神力を使えるようになる。まあ使えるのは加護を与えた奴の・・・つまり俺だが、そのほんの一部。

だけど与えたのが俺だったからな。膨大な量になったんだ。

次に神格者への昇華チャンスを与える。

神格者になると身体能力が全体的に上昇。コレは与えた神によって違う。俺の場合攻撃的な上昇だな。

まあ神格を持つ物と神とでは天と地の差がある。まあ字的には同じじゃねーかと思うが作者も意味がわからないながらも昔のゲームから取ったらしいな。名前は忘れたらしい

京夜特別仕様…”ほとんど”のことに對する才能を有する。絃に關しては元々天性のモノがあつた。

「お次はこれだぜエル！」

【神格者から神になる】

「ああ・・・これな・・・

これは神格を得てからある一定以上の神力を得ると昇華する。ということはだ。

俺の加護を得ていたら？バカみたいな神力を持ったらそりやあ・・・
・神になるわな

ちなみに龍耶もこれから神化するぜ

「はいお次はコレ！」

【鳳凰流の技がわけわかんねえ詳細説明しろks】

「okまかせろ

NEW！【霧雨】これはまだ作中じゃでてきてねえな。まあ出ないだろうが、これは基本技で相手に絃をまわりつかせ、相手の動きを阻害しながら微妙な蓄積ダメージを与える攻撃だ。絃がまわり付く時間は使用者が使っている間、もしくは切断されたり、はじか

れたりしなければずっとだ。ダメージ量は・・・一般人なら2秒ほどで血だるまになっちまう。んで魔法使い、これは力量、障壁の硬さによって違うが魔法先生レベルだと皮膚が少し切れる程度だな。

【暗禁閉（アギト）の戒】これは・・・まあ使うのか？目、耳、口を糸で縫いつける技だ。コレをやられると7日間はどうなことをしても糸は取れない。

NEW！【渦潮の陣】これは自分を中心に渦のような回転を作る。そして相手の攻撃をはじいたり、近接に持ち込まれたときにも有効だな。だけど上方からの攻撃は防げない。

【絃結界】こいつは絃で結界みたいナノを作る。その中に入ろうとするとバラバラの細切れになる。

【絃呪縛】こいつは相手を絃で捕縛する。無理に動こうとするとバラバラだ

【時雨】これは他の技に紛れさせて上方から不規則に攻撃する。普通はバレずらい1〜20本あたりだ。

NEW！【旋風】こいつは絃によって渦巻く旋風を作り出して、それによって発生するカマイタチで対象を斬り刻む技だ。だが気を大量に込めなきゃ皮膚がちよっと切れるくらいだな。普通の技の中で一番気を消費する。カマイタチの数は一回に30ほど。手加減した大体の威力は直径30センチの木を切り裂く。

【舞花】これは八方から不規則に絃を襲い掛からせる。その様は正に”風に舞う花びらの如し”

【雷鳥】相手の上方から絃を束ねたもの（1本1本でも可、場合によって）を上方から高速で落とす

New! 【流星】これは一応奥義なんだそうだが、使いやすいからという理由で普通に使われている。流星のような軌道で相手に一撃必殺のダメージを与える技だ。攻撃方向はどこからでもだな。前だったり、右からだったり、左からだったり。

「こっから奥義だゝ奥義は殆ど一撃必殺、他の技でフォローしながら使うことが多いぞゝまあ雑魚だったら別だけどな」

【鳳凰爪襲撃】絃で爪を立てて襲い掛かる鳳凰を作ってぶつける。コレを使えるのは龍耶とアリスのみで、こいつらが使うとバカみたいな威力になる。

【鳳凰天翔】これはアリスの我流だな。絃呪縛で動けなくした後から鳳凰をかたどった絃を高速で突撃させて打ち上げる。こっから流星、舞風、旋風につなげるぞ。

【鳳凰ノ子】これもアリスの我流だ。小さな鳳凰を大量に作って四方八方から相手に襲い掛からせる。その間に他の技で攻撃したり。絃呪縛で動きを封じたり。

NEW! 【鳳凰翼連撃】これは龍耶の我流だ。鳳凰を作って、その翼で連続攻撃。だが翼は鋭く尖らせて、しかもバカみたいに神力を込めたりしてるから威力は高い。鳳凰の数は衝突事故を起こさない5匹が限度。

【鳳凰ノ守護】これは龍耶の我流だがアリスも使っている鳳凰を作ってその翼で攻撃をガードする。これは絶対防御といってもいいほ

どだ。

「何故鳳凰にこだわるのかは知らん、普通に戦ったほうがいいだろうに」「ロマンだ！ロマン！こんな文才がひとかけらも無い小説で！ロマンもカッコよさもなかったら誰もよまねえだろうが！」

「ほい！次はコレだああ！！」

【神戯絃術】

「これはなあ・・・ぶっちゃけるとオリジナリティを出してくて作ったんだけど。どこで描写したらいいかわからなかったからここに書く！！！こんな作者でごめんねー」

これはアリスがペシユカドを持ちながら絃術を使えるようにしたもの。今全力で手袋型の造絃器を作って、思いだけで絃を動かそうとがんばっている。それを描写すると 異常に長くなるのでカットした。

全力戦闘などではこっちのほうが使いやすいとか。ちゃんとペシユカド用の神冥流技も用意してある。

誤字ではない。厨二？聞こえんなあ

【死の旋律】 絃を張り巡らせそれから音を奏でる。その音で相手の頭の中をかき回してグチャグチャにしたり、脳内揺らして出血させたりできる。暗殺向き。ちなみに人は聞こえない。

NEW！【音ノ刃】 おの名の通り音で刃を作って飛ばす。これは絃

を鳴らして作っているの、アホみたいな数を飛ばすことが出来る。けど今は試作中、及び意思で動かすことを練習中なので100発が限度。威力は旋風の2分の1程。

NEW！【神冥流】

「これは作者が言うに『神を冥府に送ることができる』だそう。まあ黒炎を使うことから冥府を連想したってだけらしいが・・・今後名前が変わる可能性大だ。そして別の名前も募集中！らしい」

NEW！【邪王炎殺剣】これはペシユカドに黒炎を纏わせる技。技名は某邪眼使いから取った

NEW！【斬刑】連続切り、的確に死の線を切る。連撃速度は零閃より速い。

「ほい、少々作者の指が疲れてきたがまだまだ行くぜ。お次はコレ」

【神力】

「ああ、これな・・・ぶっちゃけ作者の文才の無さを隠すためのものだからな。矛盾を減らすための」

物を作ったりするときに使えば神器にすることが出来る。しないことも出来る。

技に込めると魔力や気以上に威力が跳ねあがる。

奇跡の素ともいえる力なので殆どの技が実現可能

「お次はこれだぁ!!」

【他の人のヤツをパクった・または我流技】

「はいはい、戦争中とかに使ってたやつね」

【零閃】…高速で刀を抜き放ちすぐさま戻す（普通は見えないジャツクは見えた）。ただそれだけ、剣閃がでる。

【零閃・一瞬千撃】…一瞬で【零閃】を千回ほど放つ。

【零閃・蓮華】…通常の【零閃・一瞬千撃】より強力なものを放つ、そして剣閃が当たったところから衝撃波が起こり、血が華が咲くように舞う

【神殺・居合い拳】これは咸卦法・神を使っているときのみ放てる。一発がファイナルスパークのような威力。簡単に言えば「もう絶対地上じゃあ使わない!」

【咸卦法・極】神力以外のものを混ぜ合わせる

【咸卦法・神】極の力と力同士の間に神力を繋ぎとして入れる。実際はそこまで神力を使っていないので翼は具現しない

「次はコレ！」

【アリスオリジナル】

「これか！やっぱりな・・・実際これまだ完成してないんだよ。作中だと完成したことになってるけどな。今作者が授業中に考えてるらしいだから・・・。詠唱募集します！！【大地】と【水】の詠唱をお願いします！！」

【人に恵みを与える神の炎】 【全てを燃やす始原の炎】

【平等に照らす神の光】 【愚者を滅する裁きの光】

【全てが凍てつく天・（魔）の霊氷】

【この世に豊穡・（災厄）をもたらす平和・（滅び）の風】

【全てを包み込む優しき闇】 【全てを塗り潰す破滅の闇】

いまのところコレが既出だな。ちなみに殆ど白翼で戦うから灰、黒の詠唱は適当にそれっぽく変えるらしい。さすが作者、なにも決めてないのに小説書くとか度胸があるな。

そして元素詠唱をした後に言霊的な詠唱

【――罪深き者に死は温い】

【――ならば与えよう永遠の苦しみを】

【――透氷に生き狂え】

とかだな、そしてアリスオリジナルの技に関しても募集だ！できれば言霊も考えてくれ！なくても全然かまわないが、作者がつけると意味不明になるかもしれん

「んーこれくらいか？」

「そうだな、つーかエル、お前一回でも戦ったっけか」

「いや、一回もない、麻帆良でなにかがあるらしい」

「そうか、ならいいんだけどな、

読者の皆さん！このほかにもわからない能力、技があったら教えてください。説明しますので」

くなぜなに☆じゃしかごく技・能力編（後書き）

文章中にあつたように元素詠唱、及び、アリスオリジナル新技募集。

アリスに使わせたい能力、絃術も同時募集。絃術は音ともあわせま
すのでそっち系でもOKです。

新しく追加されたものにNEWを記載

11／08 16..33 わかり辛いところを修正。修正箇所には
NEW!を記載。

専用神器製作と刹那の修行

今は朝の4時、未来のために物造りをしている。・・・そう、

「・・・試作品一号完成!!」

神戯絃術を使うための手袋型絃造器を作っている。そして今試作品1号「絃がでるんです君」が完成!ちなみに両手である。

「うん? 完成したの? アリス」

「うん、でも出力がなあ・・・1000本が限界なんだよね。バカみたいに神力込めるとペシユカド使うときに暴発しちゃうし」

「そっか、でも1000本あれば十分なんじゃないの?」

ふふふ・・・素人はそう思うだろう。事実、通常は500本あれば足りる・・・だけど

「私達達人は、10万本くらい使って戦うからね、高速戦闘だとそれくらい展開してないと、切られたときとかすぐに対応できないんだよね」

実際龍耶と戦う時なんか常時10万、奥義使うときなんか20万は常時展開している。まあ技の余波で結構切断されるけど。

「なるほど。・・・だったら宝石とかに神力を込めて、それを手袋につける。そして絃作るときだけ発動するように・・・とかは?」

「……よし、宝石を作ろう」

「考えてなかったのね……」

その発想は無かった。加護は”物を作る”才能はくれたが”発想”の才能はくれなかったんだね。

「ああ、その前に……【ペシュカド】……【邪王炎殺剣】！そ
おい！！！！」

ズバ！ボォ！この手袋は要らないので破棄する

「宝石は……何にしよう。ここは豪勢にパパラチアサファイアで
いこうか」

「なに？その宝石」

なん……だと！？知らないのか！！

「説明しよう！パパラチアサファイアとは！スリランカなどで産出
されているとても希少な宝石で、幻とまで言われている！！！そし
て」

「ああ……もういいよ、それにメンドクサイでしょうに」

「うん、疲れたからもういいや。じゃあ作ってくる」

「午後から刹那の修行あるの忘れないで上げてよ」

「……覚えてるよ」

頭からぽぽぽーんwwwと抜けていたよ。そして刹那はもうすぐ中1、やっぱり介入のせいで変わっていた。そして麻帆良に行くのも近いのでペースを上げている。まあ私も行くんだけど

「何その間は、そしてなにかムカつくこと考えなかった？ なにかとつても虐めたくー」

「じゃあ作ってくる!!!!」

「できた・・・！コレが私の武器【テイルカナ】！名前は適当！生後30秒！」

はははは！これで完璧だ！龍耶をボコボコに痛めつけてやる！！
テイルカナの性能がヤバイ、マジでヤバイ、何がやばいって50万まで展開できる。そして意思による絃の操作を簡易化させる能力もつけた。これはキテる・・・そしてもっとヤバイのがある。

やばい、肩がヤバイ。何がやばいって目の位置より上まで上げようとする痛い。これは死ぬる

「名前適当なの？こんなに苦労したのに、そしてもう時間だよ」

「了解」

それじゃあ行きますかあ・・・龍耶も居たら実験台になってもらうかなあ

よつと・・・お、いたいた。

「おまたせ刹那、少し遅れちゃったかな？」

「いえ、自主練習をしていたので」

ああ・・・いつも思うが京都弁のせつにゃんが懐かしいよ・・・そして硬くなってしまった。ちよつと悲しいね。

「そっか、だったら準備運動は必要ないね、はじめようか。前は何やったっけ？」

「はい、前はアリス様に「全力で攻めてきなさい」と・・・」

「ああ、そうだったねじゃあ今日も同じことをやるよ、今回私は強く反撃しないから一撃でも私に届かせてみなさい」

刹那はもう奥義も殆どを習得したし式の太刀も習得した多分原作の

修学旅行Verの詠春なら倒せるんじゃないだろうか。殺気浴びせて修行してるから実戦以上の経験を得てるだろうし。

「では・・・いきます！【斬岩剣】！」

ズパアァン！私はもちろんよける。そして私がいた地面が綺麗な断面で切れていた。

「おお、錬度が上がってきてるね。ちゃんと自主練習してたんだ」

「はああ！！！」

刹那は私に連続で切りかかってきた。そして私は連続で攻撃したときによくできる隙を探した、うん隙は無いね・・・だけど

「うん、ちゃんと隙は作らないようにしてるね、でも重芯がずれてたら意味はないぞ・・・っと」

私はそういつて剣を受け、それを強く右に払い一瞬で間を詰め、こちらから見ての右足を払う

「きゃあ！？・・・っく！まだまだ・・・！【斬空閃】！」

「おっと・・・っ！？」

刹那が斬空閃を放ってきたので避ける、そうすると刹那が一気に接近してきた。そして

「【雷鳴剣】！」

あちゃーこれは・・・刹那はあまり接近してこないから油断してたね・・・強さ故の油断か

ズガアアアアン！！！！

「なかなかよかったね」

「はあ・・・はあ・・・これでもダメですか・・・」

「いやいや？ちゃんと届いたよ」

服の端がボロボロになっていた。まあ運動服だからいいけど

「や・・・った・・・」

そういつて刹那が倒れこむ、

「あ・・・ちょ！つと・・・最後の一撃に全部込めたか・・・それを受けても平気な私って・・・」

そんなことを呟きながら本堂に入っていった。

そして刹那を届けて寝かした後、適当に”さっきまで”ブラブラしていた

「龍耶あああああ！！実験台になれえええ！！【鳳凰爪襲撃】！」

「ちょ！？いきなりかYO！【鳳凰翼連撃】」

ズドオオオオオオオン！！！！

あ。ちなみに結界張ってますよ？張らなかつたら20秒くらいで本山が消えちゃうよ！

「はあ！神戯絃術奥義【面影糸】」

「っ！？なんだそれ！凶悪な気配しかしねえんだけど！しかもみえねえし！」

「これ？これはトラップ型の技だよ。引つかからないようにね？思考に反応して発動するからバラバラになるよ。まあ普通の人を通っても何も起こらないんだけどね？」

「なにその凶悪な技、見えないとか死ねばいいのに・・・な【旋風】！」

キイイイイン・・・ズバアアアアン！！

「っちい！どんだけ威力高いのよ！・・・これはまだ試作なんだけど・・・『音速を超える音』を見せてあげるわ・・・【音ノ刃】！」

振動させ刃にして飛ばす。だがコレで終わらないのが私クオリティ！直死を発動させて一気に近づく

「ペシユカド！・・・神冥流【斬刑】！」

【斬刑】は連続で切る。零閃より短く、動作も少ないのもっと速く切ることができる。

「ちょまあああああああ！」

ヒュヒュヒュヒュヒュ！っち、当たらないか

「ちょっと待て！マジで！俺を実験台にすんなよ！直死発動とか、それ神になったお前が使うと神だろうと殺せるんだから自重しろよ！」

「わかったよ、侵入者辺りで試すかな、疲れたから私帰るね」

そういつて私は背を向けて帰りだす

「ああ・・・速く帰れ・・・っとあと神酒寄越せ」

「うん？ああ、さっき一稀に渡しておいたよ」

「おっそうか、あんがとな」

「はいはい」

私は前を見ながら手を挙げて返事をする

ふう・・・麻帆良行くまでに実験したいから侵入者来ないかな？・・・
・っていうか人殺しに関して何も感じなくなってるし、しかも最初の出来るだけ殺さない信念はどこへいったんだろうか。

専用神器製作と刹那の修行（後書き）

色々でましたな、ちなみに作者は行き当たりばったりで書いてます。だから予告と全然違うこと書いたりしますよ。私なんかもん仕方ないね。今回でた技は追加は

なぜなに☆じゃしかご に追加しておきます

くなぜなに☆じゃしかごく武器編

「さて、今回も尻拭いだぞ京」

「またか、あれからまだ1話しか作ってないぞ」

「自分で書いてて訳がわからなくなったそうだ。あと設定集で書かなくていいように・・・だ」と

「まあいいや、じゃあ俺の武器から

アリス使用武器

【ペシュカド】ペルシャと北部インド固有の短剣で、ペルシャではカルドと呼ばれている。刀身は鏢元あたりの断面はT字型になっており、刀身はS字型に湾曲している。片刃で先端は鋭く尖り、湾曲した刀身は甲冑を突き刺し、自然とえぐる事ができるよう、適した形をしている。

本来は投げるものではないが、そこはチートボディ！作るときに能力を付与している。

持ち方は右手で刃を返している

付与能力

【黒炎】 ..すべてを燃やし尽くす炎に変わる。

【追尾】 ..アリスが命令したら追尾する。命中してから黒炎は鉄

板、捕まえるだけなら足に当てる

【不治癒】…その名のとおりでアリスが許可するまで回復できない。

【共鳴】…（未登場）ティルカナと同時に使用すると技の威力が底上げされる。（手加減時なし）

【刀】切れ味がいい。ひたすら硬く、壊れ辛い

【ティルカナ】指抜け手袋型、全体の色は黒メタル。指の第2間接の部分に宝石が付いている。

宝石はパパラチアサファイア。ブレスレット型だと、どうしても邪魔になってしまったため作った。

展開できる絃の本数は約50万本ほど。

ペシユカドを使うときは、右手が宝石から、左手は指先から絃を出す。手袋全体に術式を刻んでいるためどこからでも絃は出せる。

意思で操作しているが手で操作しない訳ではない。

付与能力

【簡易化】…意思による絃の操作を簡易化する。

【共鳴】…（未登場）ペシユカドと同時に使うと技の威力が底上げされる（手加減時なし）

エルティマス使用武器（未登場）

【魂喰^{ソウルター}】形状は鎌、エルの膨大な神力が内蔵されている。

その名の通り魂を輪廻に戻るのに問題ない程度までを食らうことができる、その喰らった魂を力に変えて自分の物にできる。しないのも可

グッシャーター

【神喰】形状は鎌、エルの膨大な神力が内蔵されている。

その名の通り神を喰うことが出来る。そして喰らった神の力を自分の物にできる。しないのも可

神は死んだら輪廻には行かず消滅するしかないので全て喰らう

龍耶使用武器

【靈鈴^{れいりん}】師匠からの贈り物。

2つの対で、いつもは肩ほどまで伸びている髪を右と左とで束ねるのに使っている。

絃の展開数は約24万。霊と付いているが霊力が込められたり霊が憑いてるわけではない。

木乃葉使用武器(?)

【釘バット(ネタ仕様)】そのまま釘バット、ネタ仕様なので死ぬような傷でも死なない。ただものすごく痛い

くなぜなに☆じゃしかごく武器編（後書き）

武器編に関しても〇〇が書いてない、こんな武器どう？などがあったら感想までお願いします。

詠春の依頼

今は12月、私は詠春がいる部屋に向かっている、なんでも依頼があるそうだが・・・多分木乃香の護衛だろうな！

「はいるよ」

私はそういつて襖を開ける、そしてそこにいたのは詠春、刹那、そして

「は？龍耶？」

「おう、お前も呼ばれたのか」

・・・・・・まさかだよな？

「君達にきてもらったのは他でもない、木乃香の護衛の件についてだ」

「まあ予想はしてた。それで？私たちにやってもらいたいことって

「？」

「まあそうだな、意図的な殺しの依頼以外だったらやってやるさ。アレは今休業中だ」

「木乃香お嬢様・・・このちゃんのためなら・・・」

え！？ 龍耶休業中だったんかい！そして刹那が原作と違って幾分柔らかい？

「わかりました。貴方達には同じクラスの学生として「ちょっとまっつてええ！？」・・・なんですか？」

「いやいや！？」「なんですか？」「じゃないよ！私と刹那はいいとしてだよ！龍耶は無理でしょう！？」

「お義父様は色々無茶をいらっしやるので問題ありません、また、ぬらりくらり、とぬらりひよんのように流すはずです」

「そういやそうだったああ！！でも龍耶が嫌がるだろう！？」

「ちょっと待ってろ・・・ああ、俺だ・・・詠春からの依頼で・・・ああ、そうだ・・・それで木乃香のクラスに・・・ああ・・・女子だけなんだが・・・わ、わかってる・・・ああ・・・わかった」

電話相手は一稀か、なんか一瞬焦ったぞ。ていうか流派のトップがこんな長期依頼受けて大丈夫なわけが無い！！

「ああ、大丈夫だそうだ」

「ちよい！？女の子の群れの中に飛び込むのは一稀が許したんならいいとして！流派のトップなんでしょ！？」

「ああ、式を置いていくから問題ない」

「・・・アンタもチートだったね、そういえば」

「ほめるなよ。照れるぜ」

「それですが、貴方達には木乃香と同じクラスに転入してもらって護衛していただきたい」

「それはリーズナブル可？」

「ええ、問題ありません」

「だったら私はOKだよ」元々タカミチの様子も見に行くつもりだったしね」

「俺も大丈夫だ」

「私事です」

「ありがとうございます。では一週間後に麻帆良へお願いします」

一週間後か・・・問題ないね

「了解。じゃあ私は色々準備するね」

「じゃあ俺も・・・っと」

「私は自主練習でも・・・」

依頼の話が終わり今は家に備え付けてある道場の中

「むう・・・」

「どうしたの？そんなに可愛く唸ってると食べるよ？」

「サラリと怖いこと言わないで、ティルカナがなんか寂しいなっ
思ってたさ」

そう、寂しいのだ能力が1つだけ。これは締まらない・・・

「なにかいい案ない？」

「んゝ指輪見たく惹かれ会うとかは？」

「惹かれ会うかゝ．．．共鳴とかかな、よし作ってみよう」

できた．．．だけどコレって凶悪だよなあ．．．
性能を言うと2つを同時に使用した時に威力が底上げされる。

「うん、凶悪なのができたよ」

「まったく．．．少しは考えて行動しなきゃ．．．食べるよ」

「なにを食べるの!? いや．．．わかったからやっぱいい」

「そう? それより準備しないと。包装物色々あるんだから」

「はいはい」

さてと、原作（いや、もう壊れてるか）開始まであともうちょいか
く楽しみだねえ」

京夜の闇、リーザの声（前書き）

今回は不完全な状態でもどうなるか、というお話です。

私の技量ではキツかった。

京夜の闇、リーザの声

詠春の依頼の日から日が経ち、私たちは見送りを受け、今は駅前にいる。そしてお腹が空いたのでなにか食べようと思い買いに行こうとしたらリーザに「ナンパを受けたら血溜まりができるので私がいくよ」といわれた。

話はかわって・・・連絡ではガトウかタカミチが来るって話だけど・・・タカミチだったら師匠に対する1時間前行動を叩き込んでやるわ・・・

「どうしたアリス。黒い気を放って」

「訓練のときに出す時より黒いですよ」

「うん？ いやあ麻帆良に私の弟子がいるんだよね」

「そうなのか？ そんなの聞いたこともなかったな、それにしてもお前の弟子か・・・強いのか？」

「その弟子は無事だったんでしょうか・・・」

「まあ数ヶ月おきに来るって言ってただけどそれを思い出したのが来る2日前。そして強さはわからない。10年以上前だからね・・・才能は・・・努力の才能があった」

「ふむ・・・どれほどだろうなあお前が才能がないというのだからよっぽどだろうが」

「まあ才能なんてのはさ、所詮「頂にたどり着くまでの壁が低くな

るハンデ」なんだよ？体質的な音感だとか魔力量は別にしてね。タカミチの成長スピードは・・・正直才能がないのに異常だと思ったよ」

本当にね・・・ただ早い拳を8000発打っただけで音を叩くとか意味わからん。でもその成長は才能の成長じゃなくて努力の成長なのは一発でわかったね。根がしっかりしてたから

「ほう・・・頂に辿り着くまでの壁が低くなるハンデか。たしかにな・・・そしてお前が”異常”を使うな。胡散臭くなるだけだぞ」

「そうですよ。長に聞いた話だと1回みただけで神鳴流を使ったらいいじゃないですか。そんな人が言っても説得力が皆無です」

失礼だね龍耶・・・そして刹那が黒くなってきてる。まあ異常なのは自分でも思ってるけどさ？

「ただいまアリス、ワクドでよかったよね？そしてまだこないの？」

「おかえりなさい。リーザさん」

「おかえりーリーザ、私はなんでもよかったよおー。うん、そんなんだよねー」

「おう、何を買ってきたんだ？」

ちなみにワクドというのは・・・ワクドナルド…愛称はワック、ワクドといわれ、自重しないネタレストランとして人気を。なぜ自重しないネタレストレンかという・・・

テラバーガー、ねるねケーキ、かぼちゃとニシンのパイ 等々。し

かも異常に美味しいという謎

そしてほとんどの物がお持ち帰りOKという活用性の高さ

キャッチフレーズは「無限の可能性を追求するレストラン」どっかのRPGかと思った

「えっと・・・かぼちゃとニシンのパイと人参のステーキ、デザートに炊飯器チーズケーキ」

「お、人参とケーキが新製品か・・・まあ美味いんだろうけどさ？」

「いつも思うが斬新すぎるな・・・まあ美味いんだろうが・・・」

「私的には三葉虫のグラタンが一番アレでした・・・美味かったんですけどね・・・」

まあ食べようか・・・

「ふう・・・美味かったね！いつも思うんだけどなんかムカつく」

「それには同意します」

「そうだね、っと学園長の使いがきたみたいだよ」

「あ？ぬらりひよんの？」

どこだろ・・・ってアレかな・・・誰だアレ

「貴方達が学園長の仰られていた方々ですか？」

・・・イケメンなんだけど・・・なんか胡散臭い感じ・・・そして
仕草1つ1つが気持ち悪い

「はい、そうです」

リーザが凜々しすぎる・・・

「ではご案内します。どうぞ・・・お手をお貸ししましょうか」

あ”？こいつ細切れにしてやろうか。そう思っていると小さな声で
龍耶が言ってくる

『落ち着けアリス、まだ誰も気づいてないが少し漏れてる』

『こいつバラしていいかな？いいでしょ？いいよね？』

こいつは絶対クロス私の嫁の手を握る！？絶対許さん

『やめてくださいよ！？この学園都市が滅びます！』

小さく叫ぶ・・・凄いね刹那

「いえ、大丈夫です。それより案内をお願いします」

リーザは無表情でそう言い放つ。少しスツットしたね。まだ殺したいけど

「ほら、アリスも行くよ？」

そういつて手を伸ばしてくる。むう・・・

「うん」

「最後にはラブるのか」

「アレがリーザさんたちですよ」

アレから案内されて今は「学園長室」と書かれたドアの前。さっきの先生は帰った。

「では、入りましょうか」

「あ！ちよつとまってね」

そういつて私はマッキーを取り出し・・・キュキュツキュキュ・・・よし！！

書かいたのは・・・学園長に横線を引きその上に「ぬらりひょん」と書いた。

「ふふふww的確すぎるwww」

「おい、それまずいんじゃないか？」

「そうですよ、いくらなんでもそれは・・・」

「アリス、遊びが過ぎると・・・」

「いやいやwwみたらわかるからwww」

そういつて私がドアをノックする

「ぬらちゃん！はいるよ！」

——よいぞ

ガチャリ・・・

「おひさゝぬらりひょん」

「失礼す．．．る．．．ぶっ！！あっははは！！的確だあ！！はっははは！！！！！！」

「龍耶さんどうし．．．つぶ．．．ふ．．．ふふふ．．．」

「お二人ともどうしたんです．．．か．．．つぶ．．．くふふ．．．」

龍耶が隠すことなく爆笑、刹那とリーザが後ろを向いた肩を震わせる。だけど笑い声漏れてるよ？

「ひょ！？わしの顔何かついてるかの？ガトウ君．．．」

「いえ、なにもついてませんが．．．？」

「師匠たちはなぜ爆笑してるんでしょうか．．．普通は驚愕だと思うんですけど」

「それ何気にひどいこといつとらんか？」

うん、そうだろうね。私が部屋に入る前にアレがなかったら．．．ね

「二人ともドア見てくるといいよ？」

「「?」?」

首をかしげて二人とも見に行く、そして3人はまだ笑ってる。結構ツボに入っただけらしい。

「はははは！！これは．．．くっくく．．．」

「ガトウさん・・・笑ったら・・・かはっ・・・」

二人とも笑ってる

「な・・・なにがあるんじゃない・・・」

「まあ、話が終わった後に見るといいよ、それより本題に入ろうか？」

「はあ・・・はあ・・・死ぬかと・・・思った・・・」

「息ができませんでした・・・」

「生きてきた中で一番笑ったわ・・・」

「あれは不覚だったよ・・・アリスのやることは突拍子がなくて対応できん・・・」

「それが師匠ですよ・・・でもアレは・・・」

「気になるのう・・・まあわしが笑えないことはわかりきってるが」

あらら、ぬらりひょん、結構傷ついてるね。まあ関係ないけどね。
多分私の敵になるんだろうし

「それで、詠春から聞いてると思うんだけど」

「うぬ、木乃香の護衛のための入学じゃったな。3年間でいいのかの？」

「んーどうだろうね。木乃香の危険がなくなったらってことで」

「わかったぞい。それでだのう・・・」

「警護の話？」

「そうじゃ・・・木乃香のためにも・・・」

「私とリーザは基本パスで、気が向いたらやるよ、龍耶と刹那はわかんないけど」

「なぜじゃ？おぬしらの任務は・・・」

「私たちは私情のほうを優先しますので、それに警護をしなくて一般人に危害が加わってもですよ？私たちは木乃香と周りの友人を守ればいいんです。ほかの人なんて知りませんよそんなの。そのことによって木乃香に嫌われても・・・ね。あなたたちが勝手に守ってくださいな」

なんか私ってイラついてくると口調が変わるね。怒ったときは普通に雑になるけど

「・・・だのう・・・」

「くどいぞ？あと私たちにはあまり魔法関係で干渉するな、お前たちの言動は私の癪に障ることばかりだ。私の行動が目に残ることが

あつたりとかは別だが、あと手に負えない状況になったら助けてやってもいいぞ……。基本私は意思を曲げることはないが」

「……わかったぞい。して龍耶殿と刹那殿は」

「俺は報酬次第だな」

「私は”訓練”にもなりますのでやらせていただきます」

ふふふ「このちゃんのため」っていわないのは私たちがいるほうが安全だって知ってるからだろうね。

「報酬はいくらじゃ？」

「ああ……敵の数や質によるな。何もない日は30万、雑魚だけなら65万、刹那以下なら80万、刹那以下が10匹以上が100万だ。それ以上はそのときだ。」

「それは……雑魚と刹那殿以下の区別を詳しく……そしてちと安くならんかのう？」

「あゝぬらりひょん、龍耶は紅き翼を1秒で細切れにできると思うよ」

「ふお！？……………それなら安い物じゃのう。お願いしよう」

「ああ、雑魚は刹那に一撃でやられる奴ら。以下の奴らは刹那の攻撃を2回以上耐える。そして言い忘れたけどな」

「なんじゃ……？」

「これが一番の条件。俺、刹那を攻撃してきた奴の生死の自由。俺らの私情に関する敵への拷問権」

「むう・・・君らの私情の権に関しては皆の前でやらぬという条件で可能じゃ」

さすが爺、利用できるものは利用するか

「じゃがのう・・・できるだけ生かしておいてくれると助かるのじやが・・・」

「相手がアホでバカな外道発言しなけりや問題ねえよ」

「わかったぞい、それでだがの今日魔法先生と魔法生徒に会わせたいのじゃが」

ん？なんで今日なのよ

「なぜですか？別に今日じゃなくてもいいでしょう？くだらない理由だったらこの学園を跡形も残さず滅しますよ」

・・・今日自由権の日だったね

「それはやめてほしいのう・・・理由はお主等の知名度じゃよ。英雄が二人、伝説の仕事人・・・この3人が学園内にいたら大騒ぎじゃよ」

あーそれは仕方ないかもねえ・・・

「それを鎮めるのが貴方の仕事でしょう。私たちを巻き込まないでください、そしていきなり干渉を破る気ですか」

「それはわし程度では無理じゃよ、一学園長と二人の英雄・・・どちらが強いかわかるじやろう」

「・・・くっ！わかりました・・・」

ああ・・・これは・・・1週間近く酷くなりそうだ・・・主に夜・・・この頃優しかったのに・・・仕方ない！！

「明日でもいいよ？」

「！！・・・いいのアリス？」

そんな期待をこめた眼差しで言われても・・・

「うん、今回は仕方ないからね」

「ありがとう」

「話は纏ったの、今日の0時半に世界樹前での。タカミチ君ガトウ君、寮への案内たのむぞ」

「「はい」」

あれ？そういえば二人とも空気だったね

「それにしてもアリス」

なんだろうね、そういえばアスナどうなったんだろう

「うん？なにガトウ」

「お前変わったな？前まで慈悲の塊みたいな奴だったのに・・・」

「いや・・・取捨選択ができるようになったといっただけいいね。助けられるなら助けるさ。だけど私が助けてる間に龍耶達じゃ対応できない敵がきたら？最悪の事態を考えて行動してるだけだよ」

「そうか、そういえば【アリスを愛でる会】解体したんだってな？」

「・・・え？そうなの？」

「そうだよ！私達が結婚してからメンバーが抜けてきたから解体したんだよ」

そんなことがあったんだね・・・会長のリーザって大変だったんじゃない・・・

「あ！それ聞きましたよ。たしか【アリス様と会長を見守る会】が

できたとか・・・」

「「・・・ゑ？」」

あれ？リーザも知らなかったの？そしてポカーンなリーザ可愛い・・・

「はい、なんでもお二人を見守るんだとか・・・あと【アリスを愛でる会】の弱い者をくっついていうのは引き継がれてるらしいですね」
そうなんだ、まあ奴隷の件は大丈夫そうだね

「そうなんだあ・・・で？アスナとはどうなの？背に関しては一応私が4～5年生まで成長させたけど」

「この頃成長が再開して、今は近衛さんと同じクラスですよ」

「へーそうなんだあ。ってそうじゃなくてね？仲のことを聞いているの」

「いやあ・・・それは・・・」

「見てて砂糖が口からでそうになるぞ」

「ちょ！？ガトウさん！?!？」

なかなかラブってるみたいだね

「周りから見たらロリコンだね」

「その点は二人とも注意してるらしい」

「もちろんですよ・・・ロリコンが学園教師ってヤバイじゃないですか。しかも女子クラス」

それもそうだねえ・・・

「それよりも師匠・・・一回もきてくれませんでしたね？」

「う”！・・・はい。すみません、忘れてました」

「はぁ・・・いいですよ・・・それより、体の中で咸卦法ができるようになりました！」

「え？我流で？」

「え？はい。っていうかやっぱり師匠もできるんですね・・・」

「うん、だけどそれをタカミチに教えようと思ってたんだけどなあ」

「お前もできるのか・・・見たことなかったな・・・」

「まあね？それに私は体の中での操作とか放出に関するなら一応得意だしねえ」

「そうか・・・つついたぞ」

ここかぁ。誰と相室だろうか・・・まあそこはガトウ達が手を回してるだろうけど

「ここがアリスとリーザ、右が刹那で、もう一人魔法生徒がいる。そしてその右が龍耶殿、男なので一人となっている」

「わかったよーじゃあ0時半にねー」

「ああ、またあとでな」

「ちゃんとこれからは訓練つけてくださいね」

そういつて二人とも離れていった

「じゃあ・・・ここからは個人活動？」

「そうですね。私は部屋でゆっくりします。少々疲れました」

「俺もだな、お前ら、ここは家じゃないんだからな？防音障壁張れよ」

「わかってるよ！／／／」

「アリスの声を聞かせるわけがないでしょう。聞いた奴がいたら記憶抹消決定」

リーザがもう、ね・・・黒すぎる・・・

「おゝ家具はそろってるんだね」

「そうだね、ベットもやわらかいし・・・これで体を痛めなくていいんじゃない？」

「そういうことをしないほうが早いと思うんだけど？」

「それをするとなりが無意識にアリスを地下に拘束するかも」

「ちよい！？だから何で地下で拘束するの！？襲うとかじゃなくて！」

「襲い終わったら終わりでしょ？拘束したら”何回でもできる”じゃない」

「・・・・・・・・それよりなにかやることないかなあ・・・」

「やることならあると思うよ」

「・・・優しくするなら・・・いいけど・・・」

「それは無理かな？今結構イラついてるから」

「だったら駄目。・・・あーそうだ。私やることあるわー」

うんうん、考えたら大仕事あるじゃん

「なに？」

「人脈作りだよ」

さあ・・・きました幼女の家。じゃあチャイムを押そうかな

ピンポーン・・・カチャカチャ・・・ガチャ

「なんだじじい・・・って誰だ貴様」

おお、可愛い幼女・・・私が言えることでもないか。容姿変更
解いたら私も幼女だし・・・あれ？その幼女に発情してるリーザっ
て・・・いやまあいいや、リーザだし。私だし。

「アリス・K・ティアスというm「なんだと！?!?!?今まで何を
していたああ!!」「ゑ?!?なにを・・・ぐえ!」

ガクガクガクガク！！ちょ・・・ま・・・首が・・・折れる・・・

「ま・・・った！・・・スト・・・ップ！」

「ああ・・・すまん・・・じゃなくてさっさと解け！今すぐだ！
！」

「むう・・・？すみません、何のことでしょう」

「・・・いい度胸だ、まあこんなところでは何だ、入れ」

うーん・・・なにかやったかな？初対面だと思うんだけど・・・ん
？”解け”？

「・・・ナギに私が3年後に解きに来るといわれたのね？」

「ああ！そうだ！なのにお前は・・・」

・・・あの赤毛・・・次あったら・・・

「言い辛いんだけどね、それナギがその場しのぎに言ったただけかと」

「・・・なんだと?」

「まあ・・・ご愁傷様」

「あいつめえ・・・!・・・までよ!?!あいつが来ないということとは私はどうなる!?!」

「そこは私が解説するしか・・・」

「できるのか!?!」

「え・・・ええ、それより顔が近いです。キスしたくなりますよ」

「なにをいつてる・・・まったく、それより本当に解説できるのか?」

「ええ、できますよ。ですけど条件があります」

「・・・なんだ」

条件?それはもちろん・・・

「この学園には私がいる間ずっとということ」

「うん?そんなことか、それなら別にかまわんさ」

あらら？縛り付けられてたんだからもうちよつと何かアクションがあるかと思ってた

「じゃあやるよ」【直死の魔眼】【絶対視の魔眼】発動・・・来い【ペシユカド】」

「なんだ、その魔法は・・・」

「はいはいー動かないでよーっと・・・うわぁ・・・」

きもい、なんか長いのがエヴァにまとわりついてる・・・こんなのは・・・

「殺すしかないよねえ？」【斬刑】に処す」

「な」ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ「にを！？・・・ってなんだ？」

ブオオオオオ！！・・・うんちゃんと戻ったみたいだね

「おお！・・・クッククハハハハ！！復活だぁ！・・・それよりお前、何をやったんだ」

「呪いを殺したただけだよ。私は【平等なる死】ですから」

「・・・まあいい、お前はチートだと噂だからな・・・気にするのはやめた」

・・・私って非常識の塊っていう認識されてない？エルのほうが酷いでしょ？この前、”討伐”金になったし、しかも金が「求めるだ

け」ってどうよ

「結構傷つくんだよ？まあいいや、私はこれだ」まあまで、アリス・
・だったな」

「うん？そうだよ」

「礼もある、茶でも飲んでいけ」

まあいつか、エヴァは普通に好きだし。私のランキングで上位だよ

「そうなんだ〜、あつもう0時じゃん」

「ん？なにかあるのか？」

「そうなんだよ〜0時半に正義バカ共と顔合わせだよ、めんどくさい」

「・・・お前相手によって口調の変動が激しいな」

「そりゃあ、初対面には丁寧に、友達には碎けて、嫌いな奴には冷たく、私は態度に全部表れるからね。例外として目上の人で嫌いな人も丁寧」

「そうか、ふむ・・・楽しそうだな・・・私m「p r r・・・」「なんだ？」

ガチャリ

「なんだ・・・じじいか・・・今から？なんだ・・・ああ・・・わかった行ってやる。ああ？そのことに関しては行ってから説明してやる・・・ああ、永眠しろじじい」

「ぬらりひょん？」

「ああ、今からこい、だと」

「あはは！あせってるだろうねえ？」

「くっくく・・・だろうなあ・・・じゃあ行くとするか？立派な正義の魔法使いのところへ」

「そうだね、でもあまりにも癪に障るとき私逃げるからね、殺しちゃうから」

「あ・・・ああ・・・」

あそこかぁーリーザ、刹那、龍耶、全員いるね。あらら、期待の目にさらされてるよ。

「こんばんは、皆さん」

「なんのようだ爺」

私達が上から降ってきたことで3人以外の皆が驚く。・・・これくらい気づこうよ？

「おや、遅れてしまったかな」

「うん？ いやいや、今私も着いたばかりだから、問題ないと思うよ」

「そうかい、だったらよかったよ」

褐色肌・・・真名だねえくクールだあく

「それでは、始めようか、まず自己紹介をお願いしようかの？」

「はいはい、アリス・K・ティアスです。二つ名は【神速の幼女神】
【精霊を従える者】 【平等なる死】です」

私が自己紹介すると周りから視線が集まる。・・・うざいな

「私はフリージア・K・ティアスです。二つ名は【断罪の女神】です」

今度はリーザに集まる・・・本当にうざいな。

「俺は天崎龍耶、二つ名はない、裏名は【レイヴン鴉】」

「!?!?・・・伝説の仕事屋・・・?」

おや? 真名が反応したね、伝説って・・・まあ龍耶の力量ならそうだろうけど。まあそれ異常に周りの人が反応したね。タカミチとガトウには教えてあるからなにもないけど

「私は桜咲刹那です。二つ名はありません。神鳴流を使います」

「私たちはこれくらいだよ」

「今度はわしらじゃの」

「瀬流彦です。あまり戦闘は得意じゃありません。これからよろしくお願いしますね」

「ガンドルフィーニです。これからよろしく」

「式集院 光です。私もあまり戦闘が得意じゃありません。これからよろしく」

「明石です。魔法関係者が関係する事件を調査しています」

「鏡 形而。これからよろしくね」

「葛葉 刀子です。神鳴流を使います。これからよろしくお願いしますね」

「シャークティです。会えて光栄です。これからよろしくお願いしますね」

「神多羅木だ。これからよろしくお願いする」

「高音・D・グッドマンです！よろしくお願いします！」

・・・これで全員かな？結構長かったね・・・作者の気力が切れそうだよ・・・私なに言ってんだろ？

「それでだ皆のもの、アリス殿、リーザ殿、龍耶殿、刹那殿は警備についてくれることとなった」

ん？おい、ちょっとまで、爺・・・誰が警備につくといった？基本的にやらないといったはずだが・・・そしてリーザが凄い怖い、私達にしかわからないほどに怒ってる。無表情のときほど怖いときはない

「ちよい、じじい・・・私達やるなんて1回もいってないよ？

「わしも考えたのじゃがの？一般人が傷つけられることを木乃香は望まないと思うんじゃないよ」

「そんなの関係ない、そのことによって私が嫌われようと関係ない」

「だがじゃ、そのことによって木乃香の心に傷がつくかもしれん」

・・・こいつ・・・

「それにじゃ、おぬしはエヴァの呪いを解いた、これはどういうことじゃ」

・・・だから癪に障るというんだよ・・・お前らは

「貴様こそ何を言っている？ナギから私が時に来ることは知っているだろう。それにだ、3年契約だったはずだしなあ？貴様がそんなことを言う権利はない」

「何を言ってるんですか！？彼女は【真祖の吸血鬼】ですよ！？」

「だから？」

「だから？って・・・彼女は危険すぎます！それにです！鮮血の死神が言ってることが本当ならば！」

エル・・・なにやっただろう

「彼女の魔力で結界を強化しているはずですよ！なのに彼女を放つなんて！」

「そうですね、悪く言えば彼女は魔力のために飼っていたと言ってもいいですし」

——私達はあの子の財産がほしいだけよ！

「・・・・・・・・」

「そうです！彼女は危険すぎます！」

——あんな薄気味悪い子引き取りたくないわ

「・・・・・・・・」

「っ！？アリス！？アリス！！」

ああ・・・醜いな・・・見てるのもいやになってくる・・・殺そうか？

今のアリスの異常に気づいて顔を真っ白にしてるのはリーザ、龍耶、刹那、エヴァだけである

「アリスさん!？」

「おい・・・どうしたんだ・・・？」

「おい!目え覚ませ!」

・・・誰だ？”俺”を呼ぶのは・・・まあどうでもいい。こいつらも殺そうか？

「【天眼】 【直死の魔眼】 【テイルカナ】 【ペシユカド】 【全解放】
」

ゴオオオオオオ!!!

「な・・・なんだ!？」

「こ・・・れは・・・？」

「これほどとは・・・皆のもの下がれ!!」

「な・に・ば・か・や・っ・て・ん・だ！このバカ京夜！！！」

side 三人称十京

「な・に・ば・か・や・っ・て・ん・だ！このバカ京夜！！！」

ズドガアアアアアア！！！！・・・エルがいきなりアリスを蹴り飛ばし30mほど吹っ飛ばす

「ちょ！？エル様！なにを・・・」

「な！？貴様は【鮮血の死神】！！なにをしにきた！！」

「てめえらが目覚めさせた獣を鎮めに着たんだよ！！このバカ共が！！！！」

「な！？なにをいってる！」

「つか状況が訳わかんねえ・・・」

「いいから！龍耶、リーザ準備しろ！ほかの奴らは後ろに下がれ！邪魔だ！あいつは殺しにくるぞ！あいつの四肢を吹っ飛ばすくら

いでやれ!!【隔離結界・強度全開】・・・よし、これで壊れねー
だろ・・・くるぞ!」

「まあ深くはあとで聞けばいいんだろ? 全開でいくぜ【全解放】」

「そういうこった【神力1割解放】ああ、リーザは最後のメに使う
からな、待機してる。ゆっくりしてらんねーぞ、早く終わらせないと
アイツが戻ってこれなくなる」

「わ、わかりました」

「プレッシャーかけんなよ・・・」

龍耶が18対のエルが4対の翼を具現展開する。翼の数では龍耶だ
が神力の密度が段違いで龍耶の3倍ほど

「・・・1割でそれかよ・・・お前は本当は規格外だ」

「ほっとけよ」

誰だ・・・? まあいい俺の邪魔をするなら殺すだけだ

「【面影糸】 【黒炎ノ宴】」

京夜が糸を張り巡らせ、そして黒炎がそこらに浮き始め二人めがけ

て飛んでいく

「ほら、きたぜ？——俺の元に姿を現せ【魂喰い】！鎌に宿りし悪しき念よ姿を現せ！【ネヴィディガ】」

「まじで殺す気できてるな【鳳凰ノ守護】」

エルが魂喰いを地面に向けて一振りするとそこから死霊があふれ出し、黒炎を相殺していく。そして龍耶は自分を守ることに徹する。

ドゴオオオオオ！バチイイイイン！

「ガハッ！？・・・ちょ・・・！？この黒炎の威力おかしいだろ！？」

「それくらい本気ってことだ。知り合い相手だと知らぬ間に手加減するもんなんだがな」

「・・・なあ、男に見えるんだけど？そして翼黒くねえ？」

「そこも詳しくはあとでだな・・・黒いのはアイツがダークサイドなことばかり考えてるからだろ」

「邪魔をするな、【ソニックブーム】」

キイイイイン！

「あぶねえな！」

エルが魂喰いを振って相殺

「【鳳凰ノ子】！！」

すかさず龍耶が鳳凰ノ子で攻撃を仕掛ける。

「【黒炎の死槍】」

鳳凰ノ子を黒炎で相殺し二人に接近する。

「死ね【斬刑】」

ギギギギギギギギ！！

光速に近い速度で繰り出されるナイフの連撃をすべて鎌で受け止める

「まだまだ遅いぜ？そろそろ終わらせないとお前が帰ってこれなくなるからな。お前は堕神にはさせねえぜ・・・【^{エルキ}天の鎖^{ドゥ}】リーザ！
いまだ！語りかけろ！今なら間に合うはずだ！」

「わかった！！」

「アリス！！戻ってきて！アリス！！聞こえないの！！」

s i d e o u t

s i d e アリス

――・・・ス・・・きて!・・・ないの!

だれ? わたしをよぶのはだれ?

――・・・ねがい!・・・てきて!

すごく なつかしいこえ

――・・・リス!・・・戻・・・!

このひとはだれだっけ? あれ? 私この人を知ってる?

――・・・ス! 返事を・・・て!・・・リス!

この人を知ってるよ……。ずっと前から……。だって

——アリス！聞こえないの！

私の愛してる人じゃない

side out

sideフリージア

「アリス！戻ってきて！聞こえないの！！」

私は泣きながら何回も声をかけ続ける。もう数十回も声をかけているが反応がない。

「お願い！戻ってきて！」

もう駄目なんじゃないだろうか。そんな考えがポツリポツリと思

浮かぶがそれを振り切ってまた声をかける

「アリス！戻ってきてよ！」

あれ？いまし・・・！？

「アリス！？返事をして！アリス！」

確かに反応してる！翼も消えた・・・もう少し！！！！

「アリス！聞こえないの！！！」

フツ・・・翼が消えて体が光に包まれて女体に戻る。そしてそのまま私のほうへ倒れてくる

「アリス・・・」

「えへへ・・・ちゃんと迎えにきてくれた・・・ありがとう」

そういつてアリスは眠ってしまった。まったく・・・それだけ？・・・あとでまとめて払ってもらおうよ？心配かけた罪は大きいよ・・・

「大丈夫だった・・・みたいだな・・・」

「ええ・・・なんとか・・・」

私が泣きながらそう答える

「それにしても何があった？加護で膜を作ってたからちよつとやそつとの怒りじゃ戻ったとしても理性はあるはずなんだが？」

それは・・・わからない・・・アリスのことはわかっていても京夜のことは何もわからない・・・

「わかんね、あのホストっぽい教師がなんか言ったらいきなり空気が張りだした、まあ強すぎて反応できたのは俺達だけみたいだが」

・・・そいつが原因？だったらそいつバラしておこうか・・・

「まあ、あとで聞けばいいか。それより今はまだ別の問題がある」

「ああ、そうだな」

なんだろう？

「いや、なんだろう？みたいに首傾げんな。お前のことだ！」

「さっきから殺気漏れてんぞ」

「確かにあそこの教師全員皆殺し決定ですが・・・なにか？」

「いやいや、なにか？じゃねえよ。”まだ”殺すなよ。それに殺るなら半分寄越せ」

「そういう問題じゃねえよ！！そして3分の1ずつだろうが！」

「それで今のはなんじゃ？」

「私も聞きたいですね」

こいつらは・・・

「あゝ・・・リーザお前寮に戻ってろ。こいつら殺しかねない」

「いえ、こいつらがどういう風に言うのか聞いておきたいので。殺しはしませんよ」

「・・・本当だな？・・・んで。今のなにか？切れたんだよ簡単にいうとな」

「ほう、では2つ目じゃ。なぜいきなり攻撃を仕掛けた」

「は？助けてやったんだ、ありがたく思え」

「な！？なにをいって・・・」

「黙れムシケラが、貴様等に話す権限はない、黙ってみていろ、さもなければ強制的に黙らせる」

「・・・リーザさんが怖いです・・・龍耶さ・・・皆さん怖いです・・・」

「それでは3つ目じゃ・・・なぜ貴様が介入する」

「親友・・・悪友か？んゝ・・・親とも取れるんだよな・・・じゃあ親友だ！」

「ふざけ」ドゴォ！「ガハア！？」「ズシャアアアア！」

「!？・・・なんのつもりじゃ？」

なんのつもり？

「なんのつもりって・・・私はいいましたけどね、黙ってみていなければ強制的に黙らせると。それに従わずに話した結果がアレですよ。まあ虫は地面を這うものが多いですからね。ちようどいいでしょう」

「まああんな物体Xはほつといてだ。もうこれ以上こいつ等に干渉することをやめろ。お前等には入り込めない領域なんだ。はっきり言ってだ、干渉そのものが敵対につながることもある。その場合には木乃香を守るだとかそんなことでもよくなっていることがあるかもしれない・・・さっきみたいな感じだな。まあこの街を塵に変えられたくないなら干渉しないことだ」

「それはどういう」

「エル様もういいです。それくらい言えばゴミにもわかるでしょう。アリスを寝かせたいので」

「ああ、じゃあまたな？今度遊びにでもこいよ」

「はい、アリスと遊びに行きますよ」

「だったら俺達も戻るかね、行くぞ刹那、これ以上いても無駄だ、それに俺もこんな奴等と一緒にいたくないんだ」

「へ？あ、は・・・はい・・・」

京夜の闇、リーザの声（後書き）

新しい技は午後更新しますよ。今日は寝ます。3..33まで作業してたよ

そしてエルの4対で

『私』との面談（前書き）

超展開、だが反省はしていない。そこは私だからとあきらめてください。

『私』との面談

「ん・・・ここは・・・」

「アリス、起きたの？」

「リーザ・・・」

私はそうやって体を起こす

「もう大丈夫なの？結構無理に力を使っただろうから少しガタがくるかもってエル様がいつてたけど」

「そうなの？」

別にそんなことはないけど・・・それよりも・・・

「前より調子がいいかもしれない」

「うーん・・・一回エル様のところいつてきたら？」

「そうだね、一回エルのところにいこうかな・・・お礼も言いにくいかなきゃ」

私はそうやってスキマを開き

「じゃあ行ってくるよ」

「うん、あ！そうだ。私へのお礼は自由権1週間分でいいから」

「あ？・・・わかったよ・・・」

「準備しよう♪」

怖すぎるよ・・・

「ん・・・きたか？」

「この前はありがとね〜エル」

「別に構わんさ、それより体は大丈夫なのか？」

「それがね？前より調子がいいかもしれないんだよね」

「はあ？それは意味不明すぎるぞ・・・いくらお前が摩訶不思議現象の塊だからといってもなあ・・・」

ちょ……なにその言われよう……

「私の立ち位置そんなところにいるの？」

「ああ、お前には言っていなかったけどな、翼の色が変わるってありえないからな？」

「……なんでそれを早く言わないのか私はとても疑問に思うよ」

「まあそれよりだ、お前はなんであの時切れたんだ？それも我を忘れるほどに」

うーん……それがなあ……

「前世のことなんだけどね……結構深いところに傷があったのかなあ。私自身そんなに自覚ないんだけど」

「まあ人間のことなんかわからんがな」

うーん……これって一回自分と向き合わなきゃ駄目っぽいよね

「ねえ……私が全力で暴れまわっても大丈夫な離界作れる？」

「いきなりどうした？別に問題ないが……」

うん、少しでも制御できるようにしておかないとね

「少しでも制御できるようにね」

「まあ、危なくなったら体半分に切断してとめるからな」

「・・・わかったよ」

もうちょっとやさしくできないのかね？

「――さて、問題ないぞ」

エルは外から話してもらっている。まあ一人のほうかなにかとね

「はいはい」

「【全解放】 【白翼・黒翼28対】」

バサア！・・・やっぱり思ったとおりかぁ・・・男の部分を端に追いやるっていったけど、なんか違和感があったんだよね。

端に追いやったんだとしたら、どんなことがあっても影響の強い女人格・・・つまり私が主導権を握るはずだ。なのに男人格で暴走することがある。つまり

「——これは予想外だな・・・まさか白と黒で分かれるんじゃない”混ざり合う”とはな・・・」

「まあ、始めようかな・・・私は私に会うためにここにいるんだからね。即興だけど大丈夫かな」

———汝は何を求める

———過ぎ去りし時を思い何を成す

——悲しき過去に囚われて何を成す

——我は汝、汝は我なり

【鏡の世界】

キイイイイイイン・・・甲高い音が響き私が光に包まれる。そして光が黒と白に別れはじめ・・・

「始めましてかな？私」

「多分そうだろうな、俺」

「——・・・前代未聞だぜ？おい」

そうなんだ？まあどうでもいいよ。

「それで？俺を呼び出した理由はなんだ？」

「なんだって言われてもね？私自体が体のことわかってないし」

「俺もだぜ？そこまではわからねーな。・・・まあ昨日のことは悪かったな、気がついたら・・・ってヤツだ」

「まあ、今度からはゴミだけにとどめてほしいかな」

「わかってるよ、それに前までのことは、お互いがもう一人のことを知らないがために起こったことだ」

「そうだねえ・・・それよりさあ・・・」

「ああ、俺も思った、さすが俺だな？」

「「これって別々に分かれることできないかなあ（ねーか）？」」

「――俺にもわからん・・・前代未聞だからな、双子が合体した神だとかはいるが・・・あれは二つの魂の融合だからな・・・」

「じゃあやってみたほうが早い気がする」

「それには同意する」

「「じゃあ、いってみよう！」」

「――黒翼展開してんのにその性格おかしくないか」

「ん・・・いや、これは俺を象徴してるだけだ、それよか邪神のお前の性格のほうがありえないから心配スンナ」

「そうだよエル」

※それに作者の行き当たりばったりなんだからな！

「――なんかムカツク声が聞こえたような気がしないでもない」

「そこはスルーだぜ？エル」

「どうやってやればいいの？」

「んー・・・白と黒を分けてパカッ！みたいな？？」

「なにそれ、意味わかんないさすが私」

「そんなにほめんなよ」

まあいいや

「じゃあ一回戻すよ」

「おう」

「【世界の崩壊】」

パリイイイイイン！！・・・割れる音が響きもう一人の私が碎ける

『つたく、自分が碎けるってのは気持ちよくねーな』

『まあまあ、じゃあやるよ？そっちは黒を持ってってね。私白持つ』

ていくから』

『まかせろ』

白やら黒は感覚だ、感情がそうじゃくても翼の色が変わるっていうなら元があるはず・・・

『ちょい？それ白じゃない？』

『あ、わりー・・・それ黒だ、よこせ』

『はいはい・・・これで全部かなあ？』

『みたいだな』

『じゃあ・・・・・・・・・・』

『どうした？』

『これからどうすんの』

『・・・・・・・・派手に・・・こう、技を・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『じゃ・・・じゃあ即席で作るぜ？』

『うん・・・』

【神分身のじゅーちゅーとまって?】

『何?』

『いやいや、それは駄目でしょ、ダサすぎだって』

『やっぱりか・・・だったらお前がやってみろ』

【闇ノ訪問】

『無駄に厨二』

ゴウ!!ズズズズズズ・・・

「パカパカン!俺! (青タヌキ風)」

「普通にできちゃったね」

「けどなあ、常時は辛すぎるな・・・今だけで10分の1が・・・」

「そうだね、本気戦闘のみて感じかなあ」

「——お話が纏ったところでアリス、お前の嫁が鬼の形相なんで早く戻って来い」

「・・・」

「・・・まあ、あれだ、がんばれよ？」

「・・・うん（泣）一応行為の時はリンク切断するからね」

「あいよ」

そして一人の戻った後に離界を出て、修羅になったリーザに確保され、そのまま2日間日の光を拝むことができなかった。

『私』との面談（後書き）

なぜ小説本文と入れたのか、あのときの私は何かにのっつけられていたようだ

時系列？なにそれ美味しいの（前書き）

早く登場させたかった。ただそれだけ。後悔？反省？なにそれ美味しいの

そういえばTPP導入で同人の作家がくってありましたけど。なろうとか大丈夫なのかね？

時系列？なにそれ美味しいの

語ることがなかったので3ヵ月後。今は研究所（私作）にハカセ、超、エヴァ、私で閉じこもっている。

「ここら辺はコレくらいでいいか・・・」

「エヴァ手を抜いたら罰として呪いまたかけるからね」

「はぁ！？・・・そんなに睨むな・・・ちゃんとやるから・・・」

まったく・・・私は妥協は許さん！！いいか！絶対にだ！！

「アリスさん、お腹が空きました・・・」

「そういうだろうと思って「買ってきたぜ」」

ナイスタイミング龍耶

「・・・今日はなんですか？」

「ワクドナルドだぜキャンペーン中でワナルドストラップがついてきた」

うわーいらない・・・

「窓からそおい！してきていいよ」

「そんなことより食い物を寄越せ」

「おう、

かぼちゃとニシンのパイ

王蟲のからあげ定食

マンモスバーガー

プレデター麻婆豆腐

を買ってきたぞ!!」

「「「「.....」」」」

いや.....なんか麻婆豆腐といわれたものがブラックライトに反応してものすごい光を放ってるよ!!? モンマスバーガって鼻かい!!
そしてからあげが青い!

「じゃあ私がパイを貰います」

「え”!?!.....じゃあ私は比較的まともなバーガー」

「なに!?! じゃあ私はから揚げ定食だ!」

「やっと作業が終わったヨ.....これは何ネ?」

「「「「プレデター麻婆豆腐」」」」

がんばって・・・超・・・骨は拾ってあげるから・・・

「う・・・コレを食べて大丈夫なのか・・・？」

「ご馳走様・・・大丈夫ですって超さん」

「早いな！？・・・じゃああまりおいしくなさそうだが・・・」

「でもムカツクことに不味いことは絶対にならないワクドナルド」

結果うまかった。麻婆豆腐がうますぎる！！でも食べたくないね

食べ終わった私たちはそれはもう頑張った。エヴァが心臓部を落下させて私の【修羅の笑み】によって涙目になったり。ハカセが作業中に寝てしまい私から入魂ビンタを食らったり。いろいろあった唯一被害がなかったのが超であった。何度か危ないことはあったが。

「疲れた・・・」

ツルッ

「っ!?! ガシッ!・・・ふう・・・アリスは・・・?」

「今は飲み物を買に行ってますよ」

「あぶなかったネ」

「2回目となると何されるかわからんぞ・・・」

「うん? 何が2回目?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私が戻って声をかけると汗をダラダラと流しギギギッ・・・と音が
つきそうな感じで涙目でこちらを見る

「終わったヨ」

「ねえ? エヴァ・・・”2回目”って?」

「いや・・・だなあ? その・・・あの・・・」

もう予想はついてるけど可愛いからもうちょっと虐めよう

「うん? どうしたの」

そうやって肩に置いた手に力を少し込めて顔を近づける

「ひっ！・・・いや・・・ごめんなさい・・・」

あらあら。泣いちゃった？まあ力の差がありすぎると本能で悟るらしいね

「なにがごめんなさいなのか聞かせてほしいなあ？」

んーリーザのが移ったかな・・・まあ本家の100分の1程度だけでも

「【闇の福音】が脅威と言っている魔法先生に見せたら仰天もののネ」

「一応アリスさん作…変態画質監視カメラありますから取れてると思いますよ」

「学園長あたりに見せるかな」

「それがいいんじゃないですか？」

それから2時間後

「で・・・できた・・・」

「もう・・・寝ても・・・いいよね？」

「・・・・・・・・・・」

「超サン！？死んだらだめです！」

超・・・

「大儀でしたよ・・・（泣）」

「お前は見送るな！！」

ん？元気戻っちゃったか・・・さっきの弱弱しいほうが好きなんだけど・・・

「！？・・・なにか物凄い寒気が・・・」

「気のせいでしょう？じゃあ仕上げに入るから皆外に出てて」

「【神力全解放】 【真・白翼4対】」

真・くはエルがやってたのを見てやってみた。束ねると出力が跳ね上がる。だけど維持が難しい・・・

神力を茶々丸に少しずつ流し込み馴染ませる。私の神力が茶々丸Wゲフンゲフン・・・

「そろそろだね【神の造形】」

茶々丸が光りだし私が”仕上げ”をしていく・・・

作業が終わり翼を仕舞う。・・・神力が半分以上減った。

「入ってもいいよ」

「終わったか。だったら起動するか」

「そうですね。超さんそちらをお願いしますね」

「わかったヨ」

二人が起動準備を黙々と進めて準備が整った

「じゃあいきますよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ？」

「まさか・・・！？」

「鬱だ・・・死のう」

「ちょ！？待つネ！？」

「あつ。起きましたよ」

え？本当？

「ふむ、お前の名前と主は？」

「茶々丸です。マスターはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル様、サブマスターはアリス・K・ティアス様です」

「よしよし・・・うん?・・・アリス?」

「私が設定したヨ」

「ナイス超! そんな貴方にはこのスパコンを進呈しましょう」

「ぶっ!? そんなものどっからだしたんですか!!」

「・・・ありません」

「気にするな茶々丸。アイツは非じょ・・・ヘブウ!？」

何か変なことを吹き込もうとした幼女に居合い拳を当てて飛ばしておく

「じゃあ、これからよろしくね? 茶々丸」

私が微笑みながら言う

「は、はい・・・アリス様・・・／／」

「アリス・・・恐ろしいネ・・・」

「プログラムの成長速度が計算より1年と半年ほど早いです」

更新についてbyくるみ※作中には関係ありません

はい、くるみです。

実は前日18日のバイト中に右手首、中指、薬指、小指が折れてしまったので新しい話を書くのが難しい状況になってしまいました。まだ書き貯めがあるのですが、作者の変な書き方もあって更新速度がガクッと落ちてしまいます。

一応片手でも書いていきますのでよろしくお願いします。

あと更新まで日が開くと思うのでアンケート募集します。

ヒロインアンケート…アスナ除外で

技アンケート…これは曲弦、炎を募集

ワクドナルドの商品を募集。「こんなゲテモノ料理あるよ」 「こんな馬鹿料理あるよ」などがあったら教えてください。

自己紹介（前書き）

左手だけで書いたので少々荒っぽいです。
今回は簡単な自己紹介で、基本物語に濃く関わってくる人だけです。

自己紹介

さてさて、私はいま学校に向かっています。なぜか？それは・・・
今日が入学式だからですよ！

「アリス・・・凄い人ばかりだね」

「クラス表みてるんだよ。まあ私たちは1―Aだから、行こうか」

「あいよ・・・ねみ」

「ええ」

じゃあ、行こうか

「おはよう」

「おはようございます」

「おっす」

挨拶して中に入るとそこにいたのは 真名、刹那、木乃香、アスナ、
エヴァ、茶々丸、楓だけだった。

「あら？結構少ないね」

「ウチたちは早すぎたみたいや」

「そっかぁ、席順は？」

「最初は適当って黒板に書いてる」

「アスナが・・・喋ってる!？」

この前は私が話しかけても「・・・うん」「・・・そう」「・・・
わかった」くらいしか言ってくれなかったのに・・・

「あの時は眠かったし疲れてたの」

「そうなんだ。まあまた後でね？」

「ええ」

「調子はどうかな茶々丸」

「アリス様。特にコレといった問題はありません」

「そう？何かあったらすぐにいつてね」

「はい」

ふう・・・問題なくてよかったよ・・・野菜が来たら確か攻撃するんだっけか？・・・そのときは八つ裂きにして爺のところにも送りつけるか

「おいアリス・・・ここにいる奴らは殺気を感じ取れるんだからやめろ！」

「わかってるよ」

そういつて私は茶々丸の前の席に座る。むう・・・それにしても寝起きだから異常に眠い・・・

「アリス様、髪が跳ねてますよ」

うん？あら・・・本当だ・・・

「エヴァー櫛持ってない・・・にゅ？」

私がいきなり声を出した理由はひとつ。茶々丸が髪を手で梳いてくれたのだ。

「ん・・・／／／」

「つく！・・・一足遅かった・・・」

リーザが物凄く悔しがってる・・・大丈夫だよね・・・？

ガラガラッ！！

「ラブ臭がする!!」

「ゴキブ・・・いや、あなたは？」

「なんか物凄いこと言われた気がしたけど・・・早乙女ハルナだよ、よろしくね」

「私はアリス・K・ティアス。これからよろしくね」

それから次々と来る人と会話をし、いよいよ始業式

「わしがこの学園のr y それでr y じゃから君たちにはr y
これでわしの話は終わりじゃ」

「はぁ・・・ぬらりひよんめ・・・話し長い・・・」

本当にあの頭輪切りにしてやろうかなあ・・・

そして教室に戻ってきて自己紹介タイム、イベントとか関係なく
テンション高いなこのクラス・・・

「じゃあまず僕からだね。高畑・T・タカミチだよ。これからよろ
しく」

おやおや、結構さわやかに決めたね・・・！

「じゃあ一番は欠席だから・・・明石さんから」

※ここからは飛ばしていきます

「次は明日菜。よろしく」

「神楽坂明日菜です、4月21日生まれで好きな物はアリスの作った料理。嫌いな物はガキ。趣味は・・・特にない。これからよろしく」

「質問！アリスさんとの関係は？」

「昔からの友達」

「絡繰茶々丸です。好きなのは、アリス様の髪を梳くことと、料理です。嫌いな物は・・・特にありません。これからよろしくお願いします」

「質問！！アリスちゃんとの関係は！？」

「マスターのご友人・・・でしょうか」

「マスターってだれえ！？」

「エヴァンジェリン様です」

「近衛木乃香やゝ好きなことは占いと料理、嫌いなのは・・・特にないなあゝこれからよろしくな」

うん？ 木乃香の口調が原作と違うような・・・木乃葉があまり京都弁を喋らないからかな・・・

「桜咲刹那です。好きなのはアリス様の料理、嫌いなのは曲がったことです。苦手なのは対話。これからよろしくお願いします」

「白崎龍耶だ。好きなのは鍛錬。嫌いなのは特にない。これからよろしくたのむ」

「質問！！なんで男子なのにここにいるの！？」

「それは僕から説明するよ。龍耶君は学園長の知り合いの息子さんでね。それで男女を合併しようか？っていう話が出てきたんだよ、それで試しに一人男子生徒を入れてみようってことでね。知り合いの龍耶君がこのクラスにいるんだよ」

「「「ああゝ・・・」」」

クラスの全員が苦笑いをする。あの爺いつもそんなことやってるのか・・・

ちなみに龍耶は苗字を変えている。何故かというと知られたら本家のほうが危うくなるから

「龍宮真名だ。好きな物はダーツ、ビリヤード、あんみつ。嫌いなのは・・・オクラとエビ。これからよろしく」

「はい、次は師し・・・アリスさんお願いします」

こいつ今師匠って言いそうになったな？まあいいけどさ

「アリス・K・ティアスです。8月16日生まれで、好きな物は甘いもの全般、嫌いなのは苦いもの、あと正義。趣味は修行と料理と髪を梳かしてもらうこと。堅苦しいのは嫌だから「さん」とかはいいらないよこれからよろしくね」

「髪綺麗だけどなにかやってるの？」

「んー特になにもしてないかなあ？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。好きなのは日本の文化、景色。囲碁。嫌いなのはニンニク、ネギ。趣味は囲碁をすることだ」

「フリージア・K・ティアスです。好きなのはアリスの鳴き「言わせないよ？」」

「照れてる？」

「いや、まじめにやってね？」

「好きなのはアリス。アリスの料理、アリス・・・嫌いなのは邪魔をするやつら。趣味はアリスを弄ること。呼び方はリーザってよ

んで。これからよろしく」

うん・・・まあ・・・いろいろと・・・

「アリスさんとはいったいどういう関係!？」

「うん? 婚や・・・恋人」

「」「」「ええええええええええええ!？」」「」「」

いやいやいや、オブラートに包もうよ!？

「それは一体どういう!！」

「これは大スクープ・・・超美少女二人が付き合っている・・・これはきてるよ!!!！」

「今まで一番気に入った声は!？」

「それは「それだけは言わせない」だめ?」「だめ」

はあ・・・これからどうなるんだろうか。

死神の誕生（前書き）

あっははは！！書き溜めに修正できないほどの矛盾発生！ふはは！
8話分消え去ったぜ！！ははは！！

まあ落ち着いて・・・

どくら辺で入れるか迷った設定・・・迷った挙句ここで入れることにした

死神の誕生

とある暗いとも明るいとも狭いとも広いともいえない不思議な場所、そこで男女が話し合っていた

「久しぶりねエル、棘がスツキリするほど切り取られてるわね」

女性が嬉々とした感じで男に話しかける

「ただいま”母さん”、まああいつらと一緒にいるとなあ・・・」

その掛けられた言葉に笑みで返し、その後にその笑みを崩し苦笑いを浮かべる

「あなたが・・・うう・・・私を母さんと呼んでくれる日がまたくるなんて・・・」

「嘘泣きは気持ち悪いからやめろよ」

「それで？あなたが危険・・・でもないけどここにくるなんてなにかあったのかしら？」

「俺の加護持ちのやつらのことだ」

二人の先ほどまでのふざけた感じがなくなり真面目モードに切り替わる

「あの3人ね？なにか問題でもあったのかしら？」

「ああ・・・その中に一人がな・・・”性質”に目覚めてもいないのに俺の1割に届いてるんだよ、それもただ力任せにぶつけるだけで・・・な」

男の一人が暗い表情で語りだす

「どういうことかしら？今の神だとしてもあなたに勝てるのは二人よ？しかも全力で神力の性質を利用して・・・」

「ああ、それで相談しにきたんだよ・・・」

「まずは見てみないとわからないわねえ・・・呼んでもらえるかしら？」

「わかったよ」

男はそう答えると闇に消えてしまった

「・・・邪神の加護を受けし者・・・か」

私は今竜耶と何もすることがないので病気になるいそうな日の中で駄弁っている。

「あれだなあ、ぶっちゃけ俺らがどんだけ強いかわかん

「まあねえ、それには同意」

「俺ら神なんだろう？ 一応」

「チート能力！ なんだけど・・・なんか・・・こう、もっと世界が崩壊・・・！ 的な何かほしい一応神なんだし」

「俺らどんだけ強いんだろうなあ」

「そうだねえ・・・エルはキチガイだから比べれないし」

「だれが最悪最恐マジキチエルティウスだコノヤロー」

「いやいや、誰もそんなこと言ってないし・・・」

いきなり出てきて何いってるんだこいつは・・・

「そしてお前の疑問に答えるとだ、前に言ったとおりこの世界は俺が管轄していて、管轄神が世界を強化したり弄ったりできる。そしてこの世界にいる間は神力による破壊現象を最低限に抑えているんだよ。ぶっちゃけお前らだったらほとんどの神を瞬殺できるからな」

「じゃあほかの世界に行って神力ヒャッホーとかやったら崩壊するの？」

「間違いない」

・・・こえええ！神力こえええ！

「そんなに物騒なものだったのか・・・」

「まあそれよりアリス、ちょっとついてきてくれ」

「ふえ？いきなりどうしたの？」

「健康診断だ」

「・・・・・・・・・・」

え？なに？健康診断？・・・は？

「いやあああああああ！！！！ココに変態がいます！！！！誰かタスケテ！！！！」

「お前・・・いくらなんでもそれはちょっと・・・」

「は！？ いやいや！ 変な意味じゃねえよ！」

「まあわかってたけどね？」

エルがそんなことというのはアリエナイ

「あー俺もついていってもOKか？ 暇なんだ」

エルが少し考えるそぶりを見せて・・・

「まあ大丈夫だろ、【転移】」

エルが発動するとその場が光りだし、その光が収まったところにはもう誰もいなかった

「・・・ここは？」

光を抜けた先は気持ち悪い空間でした

「やべえ、俺これ苦手だわ・・・吐きそう」

「メメタァしないでよ!？」

まじで顔真っ白じゃん!ガチで吐かないでよ!？

「それで、ここどこ?」

「全界の中にある無界・・・まあ戦闘とか訓練とかしたりするところだ」

「なるほろ」

「あら、遅れてしまいましたか?」

・・・誰?

「今来たところだ」

「エル?この人は?」

「うん?ああ、会うの初めてだったな。この人は・・・」

俺の母親だ」

[illegible]

「エルの母親って言ったら「あ、あ！？舐めてんのかこの優男が！」みたいな感じかと」

「残念だが微笑みとハンマーでオーディンやゼウスを調教する程度の能力だ」

「すげえ
・
・
・
」

「木乃葉と同じ能力か・・・」

「まあ話がずれたが本題だ」

「健康診断ってなにさ？」

「まあ・・・カクカクシカジカ（性質使ってないのにエルの1割に拮抗する異常性を説明中）」

「えーっと・・・その前に性質ってなによ」

「・・・話してなかったっけ」

「【真・黒翼3対】 【闇ノ訪問】」

アリスと京夜に分かれる

「聞いてねえよ！ 【流星】」 「【ペシユカド】 【斬刑】」 『【刀】
【零閃・蓮華】』

竜耶が流星でエルを吹き飛ばし浮いたところにアリスと京夜で左右から連撃

「いやあ・・・スマンスマ・・・ごめん」

「はあ・・・まあいいや、それで？ 性質ってなに」

「性質っていうのは神力の性質だな、そのまま。性質は神によって違うんだがほとんどが性質がない」

「ないっていうと？」

「特徴がない平原みたいな感じ」

「でもそれって逆に言えばすごくバランスがいいってことじゃない？」

「いや、そのバランスのいい＋αなんだよ」

「なるほど・・・」

「この中で性質持つてるのは俺とアリスと竜耶だな・・・俺は置いておいて竜耶は【伝導】だな」

「ああ！わかるわ！！」

これはピッタリだねえ・・・実際あれは卑怯だと思うよ

「ねえエル！私はどうなの！」

「あゝ・・・わかんねえんだわ」

「・・・は？」

「オーディンなら【戦闘】ゼウスなら【神罰】だの色々あるんだが・・・な・・・」

「性質あるのはわかるけどどういふのかわからないってこと？」

「まあそういうことだ」

それって一体どうしたらいいの？

「まあそうした場合はその性質に合うことをすれば”理解”わかるはずで
すよ」

エルの母親が言う

「そういうことだ・・・それでお前の性質はたぶん戦闘関係だろう
と踏んでる」

「ああ！それもわかるぜ！！」

「なんでえ！！？」

私そんなに戦大好きじゃないよ！？

「だってお前戦闘好きじゃん？バトルジャンキーじゃん」

「・・・まあね」

「それでだ、ぶっちゃけ今のお前は恐ろしいほどの爆弾だ、不安定
すぎる」

「・・・」

「普通は神自身が理解してから性質が出てくる。だけどお前は理解していないのにその性質の一部分が飛び出ている。このままだとお前の体が持たないかもしれない前代未聞だからわからんが」

「それで、どうしろと？」

「この中に入っていたいだきたいのですよ」

エルの母親はそういうと紅い扉を出現させた

「それは・・・？」

「今までの神の記憶が詰まった場所への扉・・・かな」

「つまり今までの神と戦えと・・・？」

「そういうことだな」

「ですがこの中の出来事はすべて事実、つまりこの中で死ねば死にます。もちろんこの中には自分を除く一定の戦闘能力以上を持った神がすべて記録されています。もちろんエルや竜耶殿も・・・」

それってガッツリ死亡フラグ

「まあ・・・拒否権はないがな」

「デスヨネ」

「まあ終わるのは外の時間で1時間って事になってる。どんなにかろうともな」

「中でヌタ程かろうと外では1時間ってこと？」

「そういうことだ・・・」

「まあ行ってくるさ・・・リーザを傷つけるかも知れないんだし」

「まあ頑張れよ」

「狂ってくれるなよ？」

「さあ？どうだろうね」

私はそういつて扉をくぐった

「中は精神と時の部屋みたいな感じだねえ」

そんなことを言っていると目の前にオジサンがいた

「ふむ・・・268367番目のお客様か・・・歓迎しよう。我等
総勢2543人・・・参る」

そういつて神力を解放してきた

「・・・やりますか【神力全解放】 【ティルカナ】 【ペシユカド】
・アリス・K・ティアス・・・行きます」

「われの名は伊邪那岐・・・参る」

日本神!?

side 竜耶

「アイツ大丈夫かねえ」

俺がポツリと言葉を漏らす

「待つしかねえだろ・・・っはぁ・・・団体さんか」

エルが俺の言葉に答えると同時に俺たちの周りに5千以上の神々が現れた

「竜耶、扉死守だぜ・・・扉を壊されたら中にいるやつが消滅する」

「まじかよ?」

そんなこと言われたら守らなきゃいけないだろうに

「しかも今回は本気で殺しにかかっているな・・・しかも慈悲神がいなくなったのを狙いやがったな」

「汚らしい邪神とその加護を持つ者を消滅させにきた・・・抵抗せずに消えてくれぬか」

「「お断りだねえ!!」」

side out

side???

「すまないアリエス・・・われらの力が及ばぬばかりに・・・」

「・・・やつらを止められなかった・・・すまない」

「気になさらないください・・・オーデイン、ゼウス」

「お前は・・・行かなくてもいいのか・・・?」

オーデインと呼ばれた青年がつぶやく

「・・・私が行っても邪魔になるだけです。それに私たちは最高神・

・ ・ ”邪神”を助けるわけにはいきません」

「邪神・ ・ ・ か・ ・ ・ 創造神と同じ性質・ ・ ・ ”造形”を持った神・ ・ ・ 」

ゼウスと呼ばれた男が言う

「彼の生きがいⅡ造る・ ・ だったからね、幼い頃の彼をみて僕は恐ろしかったよ、ただひたすら物を作ることだけに神力を使う・ ・ ・ 」

「そして自分の欲を満たすために作ったもので神から邪神へと成ったもの・ ・ ・ か」

「エルは神としてやってはならないことをしました・ ・ ・
・ ・ 神殺しを造るという大罪を・ ・ ・ 」
【ゴツキター神喰】・

side out

sideアリス

あれからたぶん10年くらい戦い続けて今は15番目

「【弦曲終曲・終焉】」

幾万の弦で相手を貫き体内にある弦を枝分かれさせ内側を掻き回す

「があああああああ！！！！」

「消えろ【黒炎ノ宴】」

15番目の周りに黒炎が現れ一斉に飛び掛る

「あ”あ”あ”あ”！！！！」

15番目の神は叫びながら塵も残さずに消えた

「はぁ・・・結構キツイ」

しかもコレは実力順ではなくて完全ランダム方式、14番目にカリー神が来て2年くらい戦ってた

「次は私だ・・・16番・・・破壊神シヴァ・・・」

「はぁ・・・大物ばかり・・・っと！」

愚痴っていると剣が私の目の前に来ていた

「危ないなぁ・・・【斬刑】に処す」

連続でシヴァの死の線を切ろうとする

「甘い・・・」

そういつて私の腕を切り落とす

「ぐう・・・！？【再生】・・・【弦曲零番・別れ】」

弦で四肢を狙いながら私自身は斬刑で攻撃し続ける

「無駄だ【テストメント】」

シヴァの剣が輝きだしそれを振った瞬間に全力ガードしたにもかかわらず私が5kmほど吹き飛ばされる

「ぐ・・・う・・・無理だってこれ・・・」

「戦え、お前にはその義務がある。生き物を傷つけた時から罪を負っただろう、命を奪ったときから罪を負っただろう。だがそれでも貴様は守ると誓ったはずだ。生き物を傷つけても命を奪ったとしても自分が砕けたとしても守ると誓ったものがあるはずだ」

ああ・・・もう・・・わかってるっての・・・

side out

sideエル

くそ・・・後ろに扉があるから無闇に力が使えないな・・・まあそれを狙ったんだろうが。それにしても何分たった？40分は超えたはずだが・・・くそ・・・そろそろヤバイなともと俺は戦闘型じやねえから結構キツイ

「ふん・・・貴様のようなやつにも守るべきものができたか・・・まあ我等には関係ないが。さあコレで終わりだ・・・その罪を死で償え!!」

「やべ・・・」

「【雷鳥】！」

ズガアアアア！

竜耶が敵の上から弦を20万ほど一気に落とす。煙が晴れる・・・だが相手は防いだようで傷一つない

「レベル違いすぎだったの・・・」

「戦闘レベルはお前のほうが上だがな・・・数が多すぎる」

あれから一人も消せていないしな、消そうとするとほかのやつが邪魔して後ろに引っ張っていく・・・めんどくせえ

「ユグドラシルの頂に座すものよ! 【ヴィゾーヴニル】」

「なんだ?! こいつ!」

「コイツは攻撃能力はないが結界を張ることができるそれにコイツが消えるのはほとんどない」

「そうか・・・これで少しくらい・・・」

「【爆ぜろレーヴァテイン】」

一人の神がレーヴァテインでヴィゾーヴニルを切り裂いた（ヴィゾーヴニルを倒せるのはレーヴァテインのみ）

「おいおい・・・俺が作ったアルテマ級の神器まで持ってくるかよ・・・」

コイツはやべえ・・・終わったかな・・・

「さあ・・・その罪を死で償うがいい!!」

「まったく・・・何度目だよ・・・」

その神が剣を振り上げ

降ろした

side out

side 三人称

———邪魔

パキイイイン！！ レーヴァテインが砕け散り持っていた神の上半身が消え去る。普通ならそこは粒子が戻ってきて再生するが体がどんどん崩れていき消滅した

「まったく500億年ぶりくらいに感動の再会だったのに・・・」
懐かしい声が扉の奥から聞こえる

「私の親友を傷つけた罪は重いよ・・・全員殺してあげる」

扉が開いて最初に映った姿は
身体はそこまで変化はないが、白かった髪は黒く染まり、目は両方赤く、翼は黒くボロボロになっていた。だがその体から発せられるはずの神力が微量しか感じられなかった

「は・・・ははは！！聞いたか！？神力ゼロのあの小娘が私たちを倒すそうだ！！ははは！」

だがここで忘れているだろう、アリスは”扉から”出てきたのだ。
修練をクリアしてきたのだ

「ふふふ・・・そちらの言い分こそ笑ってしまうよ・・・ねえフェンリル、ヨルムンガンド」

いつの間にかアリスの後ろには耳と尻尾を生やした130cmくらいの少女と

180cmほどの長身女性が立っていた

『そうですね、それ以前に神力を感じることができないという時点で終わっています』

『・・・』

フェンリルと呼ばれた少女はアリスの後ろで腰にしがみついている

「大して力を持たない愚神さん達く見逃すから帰ってくれない？」

「何を馬鹿なことを言っている！こんな機会を見逃『残念【アポカリプス】』」

アリスが剣を出現させた。その剣は刀身が赤黒く所々に黒い線が走っている。その黒い線は心臓のようにうごめいている。

「【剣曲終番・神々の終末】」

アリスが技を宣言した途端にいつの間にか神々の後ろに移動していた。

「さようなら愚神共、冥土の土産に教えてあげるよ・・・私の性質は”死”だよ・・・私は死神のアリス」

パアアアン！ 一斉に今までそこにいた神々が消え去った、いや消された

「さて？最高神にご挨拶しに行こうか。ロキに「娘さんを下さい」
って挨拶もしなきゃいけないし」

アリスは笑顔でそう言った

死神の誕生（後書き）

あれ？ネギま！だったよね？死神まではよかった、設定もいい、だがどうしてこうなった？まあ次の次にはネギまに戻りますよ。

あとミニイベントでやってほしいのあったら教えてください！

そしてアリスを使いたい人がいましたらどうぞ

なぜか「感想を受け付けない」になっていた件について

最高神との会談

あれから1時間程経ち、最高神、上位神たちが召集されその面々と会談することになった。

最高神はオーディン、ゼウス、ハデス、シヴァ、カーリー、アリエス（母親）、ロキ、その他省略 20名

上位神はスサノオ、アマテラス、その他省略15名 が集まった。ほかにもいるらしいが用事のあるものはこれなかったらしい

サクサク・・・

「美味しいリル？」

『ん・・・』

ああ、やばい可愛い・・・キャラメルコ○ン食べてるリル可愛い・・・やばい可愛い

※大事なことなのでry

ちなみにリルⅡフェンリル ルムⅡヨルムンガンドとなっている

「これより最高神、上位神による方針会談を始める！」

渋いおっちゃんが声を上げた・・・オーディン・・・今だと凄く弱く見えるなあ・・・というよりここにいるやつら弱すぎじゃない？力を隠す必要はないなんて羨ましい・・・

そんなことを思っていると最高神の一人が声を張り上げた

「議題は邪神と似非死神についてだ！」

あ”？

「その喧嘩買ってあげる・・・！【アポカリ「やめとけアリス」

「なんで？別に殺してもいいじゃん」

「お前性格変わりすぎだろ！？」

「どうでもいいやつはどうでもいい、的な」

「もう何も言わない、だけどここは抑えておけ・・・めんどくさくなる」

えー・・・めんどくさくなるって言われても・・・

「その面倒くさくなるあいつ等を全員消せば問題ないでしょ」

「やめとけて・・・」

「まあ俺たち以外の神って初めてだから話聞いてみてもいいんじゃないか？」

竜耶がそこまでいうなら・・・

「わかったわかった・・・はいリル・・・あーん」

『あー・・・美味しい・・・』

ああ・・・癒されるわあ・・・

「まずは死神！貴様についてだ」

「はーい意見ありますー。あなた以外の人にしてくださいーゼウスとか」

「何だと・・・？貴様立場をわきま「いいだろう」

ナイスゼウス

「ぐう・・・くそ！！」

名無しの神ww

「まずはお前の性質についてだ」

「んー？まあ不利になるようなことじゃないし別にいいよー私は死・戦闘・愛を司る死神DEATH☆」

私が答えた瞬間に場がざわめく

「3つ持ちだと!?!」 「出鱈目だ!」 「嘘じゃないのか?」

「静まれ!!...それは本当か?」

「もちろん」

「では次だ...フエンリルとエルムンガンドをどうやって生き返らせた」

ふふ...その質問を待っていた!!

「それは...愛の力よ!!!!」

.....

「え?滑っちゃったパティーン?」

「ふ...ふざけブツ!?!」

さっきまでうるさかった最高神を弱パンチで吹っ飛ばす。見えなくなったね!

「あ...ごめんウザすぎたから殴っちゃった」

私をイラつかせるから駄目なんだよ? まあSなのは神だけに発動だけどね

「エル・・・お前アイツのパンチ見えたか？」

「ああ・・・だけどよけれねえな」

悪いけどエルはもう瞬殺できるからねえ・・・

「死神よ・・・具体的に説明してくれ」

「神殺しが禁忌になってるんでしょ？でもその前にも神は死んでる・
・神殺しで殺した場合消滅するらしいけど普通に死んだ場合は？
それで消滅するんだったら禁忌になんかならないでしょ？」

「まあ・・・確かにそうだが・・・」

「そこで普通に死んだのなら何か残ってるんじゃないのかな？って
さ、だって消滅するって言われてるってことは輪廻課ってところに
送られてないってことでしょ？造形で肉体と魂を造ってあげて記憶
思念体になってた二人をその魂と肉体に入れたの」

「そうか・・・まつのだ！なぜおぬしが肉体はまだしも魂まで作れ
る！？」

「私は誰に加護を与えられたでしょうか！」

「それはそのエルティアス・・・そうか！！」

「加護を与えられるⅡその髪の毛の性質を少し持っているってことだね。
まあ神器やら作れるから性質のこと聞いたときに検討ついたらんだけ
ど」

「まあ経緯はわかったけどさあ？僕の娘を蘇らせて何をしたいわけ？」

ロキ様ものすごい笑顔だねえ・・・目が笑ってないけど。

「娘さんを私にください！あとレーヴァテイン壊しちゃったけどごめんね！」

レーヴァテインは元をエルが造ってルーンをロキお義父さんが刻んだらしい

「は？もう一回言って」

「レーヴァテ「いやそっちじゃないほう」

「娘さんを私にください！！」

「へえ？忌み嫌われてる二人をなんで嫁になんかしたがるんだい？」

「可愛いから！愛してるから！愛してくれるから！愚神の考えなんか愚神に喰わせとけ！」

「ははは！君は変わってるね？まあ二人が望むならいいよ」

「それはもう夜に聞いてます」

「お前・・・リーザはどうした」

「・・・いや、わかってるよ？だけどね？ほら、わたし節操なしだし、一応リーザに許可もらってるし（結構初期に）」

まあ帰ったらリーザと茶々丸のO☆SHI☆O☆KIというなの地下監禁が待っているのは決定事項だね

「アリスと・・・竜耶・・・だったか？」

「はい？」

「なんだ？」

「神は下位、中位の神なら問題ないが上位以上の神は世界を管轄することになっている。そしてお前たちは最高神レベルの戦闘力を持っている・・・故に世界の管理をしなければならない」

「「えー・・・」」

面倒くさい！イヤでござる！絶対に働きたくないでござる！！

「・・・やはりアリス殿はやらなくていいだろう」

「なんで？」

「考えてみたら死神に世界を管轄させるなどほかの神が納得しないだろう」

それもそうだ

「竜耶殿には中位世界を1〜10管轄してもらう。まあ数は自分で決めるといい、世界の強化や操作はエルティウスに聞くといいだろう」

「わかった、まずは1つから頼む」

「了解した」

「私は一体どうすればいいの？」

「まあ自由に行動してもらって構わんよ」

「了解しましたあゝ・・・じゃあそろそろ帰ろうか？疲れたし」

「だがお前は帰ったら事情を隅々まで聞かれた後に地下に監禁されて攻め立てられるんだから休めないだろうに」

『・・・？』

『それには私も参加したいですね』

「・・・帰ろうか」

リルは唯一私が攻めに回れる子だからな・・・変わらないでほしいな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1285y/>

邪神の加護を受けし者

2011年12月6日15時51分発行